

博 士 論 文

「ひきこもり」当事者のニーズとソーシャルワーク —「ひきこもり」支援の実践からの事例研究—

Needs of Hikikomori individuals (Socially Withdrawn Individuals) and
Social Work:
Case Studies in Hikikomori Support Practice

2014 年度

福崎 はる

熊 本 学 園 大 学 大 学 院
社会福祉学研究科社会福祉学専攻

論文の内容の要旨

「ひきこもり」当事者のニーズとソーシャルワーク —「ひきこもり」支援の実践からの事例研究—

福崎 はる

本論文は、「ひきこもり」支援において「ひきこもり」当事者のニーズに添った支援とは何かという問いを立て、パワー交互作用モデルによるソーシャルワーク実践という視点から、「ひきこもり」における新たな「ひきこもり」支援の可能性を探るものである。

第1章では、現在行われている「ひきこもり」支援を分析するとともに、「ひきこもり」支援の課題について指摘した。

「ひきこもり」状態の人は、全国で 69.6 万人いるといわれている（内閣府調査 2010:「趣味の用事のときだけ外出する」を含める広義の「ひきこもり」状態の人の算出人数を採用）。これに対し、1990 年代初期から「ひきこもり」支援は、「相談」「居場所」「家族支援」「当事者の会」「訪問支援」「宿泊型」「就労支援」など、その時々課題に応じて様々な支援方法が生まれ実施されてきた。そして 2013 年には、「ひきこもり地域支援センター」が全国 39 箇所に設置されるまでになった。しかし、それでもなお「ひきこもり」年齢と「ひきこもり」期間、父母の年齢は増加の一途を辿っており、「ひきこもり」の長期化、「ひきこもり」当事者とその父母の高年齢化が進んでいる現状がある（KHJ 親の会 2005-2013、青木 2010）。

内閣府（2013）の調査によって、これまで行われてきた「ひきこもり」支援では、「支援機関の連携」、「ネットワーク構築」、「支援の不足」、「ミスマッチ」、「支援目標（を何に置くか）」という 5 点において、支援が当事者にとって効果的に行われていない現状が、明らかにされている。これら 5 点の課題に共通するのは、「ひきこもり」当事者のニーズに添った支援ができていないということであった。そのような「ひきこもり」支援の現状の中で、筆者は「かたつむり学舎」という支援機関を立ち上げ、当事者のニーズに添った支援を中心に据え、可能な限りニーズを実現していく方法で一定の成果を収めてきた（2012）。しかし、その支援方法は再現可能性が乏しいことが課題であった。

そこで第 2 章では、「ひきこもり」当事者のニーズを支援するという視点で、「ひきこもり」支援を行った「かたつむり学舎」の関わりについて分析し、その実践の再現可能性を高めることを目的とした。分析する視点は「パワー交互作用モデル」（門田 2000）を採用した。なぜなら、このモデルは「当事者のニーズをアセスメントし、ニーズに添った支援を行う」という「かたつむり学舎」と同じ視点を有していたからである。このモデルではパワーを「自分のニーズを充足するために環境に影響を及ぼしていく能力」と定義し、そのパワーが失われた状態を「パワーレスネス」な状態と定義している。そして、「パワーレス

ネス」な状態に陥っている当事者のニーズをアセスメントし、「アドボケイト」「エンパワーリング」「サービス調整」という視点で支援を行う。

このモデルの視点によって、「かたつむり学舎」での 2 つの実践例を分析した結果、「ひきこもり」当事者はパワーレスネスの状態に陥っていることが実証された。また、「かたつむり学舎」では、「当事者のニーズをアセスメントする」だけではなく、支援方法もこのモデルと同じく「アドボケイト」「エンパワーリング」「サービス調整」で整理できることが判明した。このモデルは「学校ソーシャルワーク」のモデルとして提案されているが、「学校」という範疇にとどまらず、「ひきこもり」ソーシャルワークにも応用できることが実証された。実践例Ⅰでは「社会とのあいだ」、実践例Ⅱでは「学校とのあいだ」でパワーレスネスな状態に陥っている「ひきこもり」当事者に対し、当事者ニーズに添った「パワー交互作用モデルによるソーシャルワーク」支援を行うことが、有用であることが示された。

さらに、これら「かたつむり学舎」の実践例を通して、第 1 章で挙げた現在の「ひきこもり」支援の 5 点の課題についての解決の可能性も示唆された。「支援機関の連携」、「ネットワーク構築」の課題については、全ての「ひきこもり」支援機関同士が連携せずとも、「全体を見通し、流れや変化を把握しながら、本人の意志に添った援助が受けられるよう、アセスメントをし、全体をマネジメント」（鈴木、2004）するソーシャルワーク実践によって、実質的な連携とネットワーク構築が可能となった。また「支援の不足」、「ミスマッチ」の課題は、「ひきこもり」当事者のニーズをアセスメントし、そのニーズに添った支援を行うことで、「支援の不足」「ミスマッチ」は解消された。そして、「支援目標」の課題は、小さなニーズを 1 つ 1 つ満たしていく過程で、「ひきこもり」当事者自らが「目標」を明確に持つことができるようになっていくことで解消されていった。

ところで、「かたつむり学舎」で支援した実践例Ⅰ、Ⅱともに、「ひきこもり」以前からパワーレスネスな状態に陥っていたことが明らかになった。このような状態は、「かたつむり学舎」の実践例に限ったことなのか、それとも「ひきこもり」当事者の多くが「ひきこもり」以前からパワーレスネスな状態に陥っているのか、というさらなる問いを立てた。

そこで、第 3 章、第 4 章では、4 名の「ひきこもり」経験者にインタビュー調査を行い、「ひきこもり」経験者たちが人生のどの時点でパワーレスネスな状態に陥っていたのかを分析した。またその時、当事者のニーズに添った適切な支援を受けられたかどうか、パワーレスネスな状態と「ひきこもり」状態との関係性について明らかにすること、及び、パワーレスネスな状態を改善するための支援を行うとすれば、どのような支援が必要であったのかを検討していくことを目的として、インタビュー調査を行った。第 3 章でその方法を示し、第 4 章で調査結果をまとめた。調査を分析する視点は、第 2 章と同じく「パワー交互作用モデル」を採用した。

その結果、4 名の「ひきこもり」経験者たちは、性別・年齢・家族構成・現在の状況などが異なるにも関わらず、「ひきこもり」になる以前からパワーレスネスな状態に陥っていたということが判明した。また、パワーレスネスな状態は、対人関係だけでなく、構造的に

も引き起こされていることが示唆された。さらにパワーレスネスな状態に置かれ続けた結果、自分に自信がなくなり、自らのニーズを抑圧し、ニーズを明確にできなくなり、ニーズを満たせなくなる、という悪循環に陥っていることも明らかになった。

彼らが適切な支援を受けることができなかった要因は複数あるが、大きな要因の1つは、当時の彼らを支えるための支援自体が社会の中に存在していなかったことである。また、「相談するという選択肢があることを知らなかった」「どこに相談すればいいか分からなかった」といった支援の存在についての社会的啓発活動の課題も浮き彫りになった。

第5章では、本稿のまとめと「ひきこもり」支援への提言を行った。本稿では「パワー交互作用モデルによるソーシャルワーク」が「ひきこもり」支援にも有益であることが明らかとなった。その大きな特徴は「当事者ニーズの把握」であり、これは何よりも重要である。これを効果的に行うためには、「支援者との良好な関係性」が不可欠であり、「気軽に変更できること」「多様な選択肢を準備しておくこと」「質問の仕方の工夫」も必要である。また、当事者ニーズは人や社会との関係性の中で、また様々な体験の中で絶えず変化していくものであり、柔軟に寄り添うことも重要である。

「当事者ニーズ」を支援する方法は「アドボカシー」「エンパワーリング」「サービス調整」である。アドボカシーは「当事者と家族とのあいだ」「当事者と学校とのあいだ」「当事者と社会とのあいだ」で行われる。「当事者と家族とのあいだ」では、「ひきこもり」当事者のニーズに寄り添い、その体験が持つ当事者にとっての意味や効果を、家族に伝えて協力してもらうことで、「ひきこもり」当事者がエンパワーリングされ、ニーズの実現が可能となった。「当事者と学校とのあいだ」では、アドボケイトした内容について実行する主体が学校であるため、アドボケイトした内容を学校に受け入れてもらえるか否かという構造的な問題が浮き彫りになった。「当事者と社会とのあいだ」では、当事者が社会の中で関わる人たちに対してアドボケイトを行った。また、樋口（2008）は「ひきこもり」当事者の生活を支える現金や社会サービスの「給付」がないことを指摘しており、行政へのアドボケイトの必要を示唆している。また、誰もが「ひきこもり」支援に気軽にアクセスできるよう、アメリカの中学校、高校で教育の一環として取り組まれている「自殺予防プログラム SOS（Sign of Suicide）Program」を例に挙げ、小学校教育からの啓発活動を提案した。

エンパワーリングであるが、最も重要なエンパワーリングは当事者の存在と現状を肯定する関わりである。そのために支援者は予め支援目標を持たず、当事者のニーズに耳を傾けることが必要となる。また「ひきこもり」当事者が、既に生活を楽しんでいる「ひきこもり」経験者と関わりを持つことも大きなエンパワーリングとなる。また、自助グループ活動や、「就労して巣立っていかなければならない」という定時設定のない居場所づくりなど、さらに、「ひきこもり」当事者や「ひきこもり」経験者、家族、そして彼らが望むことを応援する地域の人達と交流できる場所が今後必要とされる。

サービス調整で重要なことは、サービス調整自体を目的化しないということである。就

学、就労、コミュニケーション・スキルの獲得など、社会的にも求められるサービス調整に関しては、特に注意してソーシャルワークを行う必要がある。なぜなら、「ひきこもり」当事者は、社会規範性が比較的強い者が多く、断れないまま、周囲の状況が先行して、当事者の特性に合わないサービス調整に組み込まれてしまうことが起こりやすいからである。サービス調整が上手くいかなかった時、「ひきこもり」当事者は、できなかったことに対して家族や周囲の期待に応えられなかったと自分を責め、これまで幾度となく経験した挫折体験を再度味わってしまう。こうして“支援”によって“挫折体験”が繰り返されることで、新たな体験をすることや生きること自体に絶望してしまいやすくなる。したがって、サービス調整においては、絶えず当事者のニーズに寄り添いながら、当事者の負荷の様子を観察し、持続可能性を検討し、当事者の試みが“挫折体験”とならぬよう慎重に変化に対する対処をし、当事者をエンパワーリングしていく必要がある。また同時に、サービス調整を実施したことによる家族や周囲の人への影響についてもアセスメントして、予想される状況について当事者や家族と共有しておく必要がある。

以上見てきたように、「ひきこもり」ソーシャルワーク実践は、当事者のニーズに寄り添うことを基本としながら、「ひきこもり」という特性に特化した一人ひとりへの援助の側面を持っている。それは、「ひきこもり」当事者の人生に寄り添いながら、「ひきこもり」当事者一人ひとりの特性に合わせた支援であるといえる。第2章、第4章でみてきたように「ひきこもり」当事者や「ひきこもり」経験者たちは、一人ひとり違った個性を持ち、時間と空間の中で様々な内的な体験をし、それぞれの場面において自分や家族、社会に対する想いや、自分なりに生きていくことについての考えを持っている。そういった一人ひとりに寄り添う、今後の「ひきこもり」ソーシャルワーク実践への可能性として、以下の2点を挙げる。一つは、生まれてから一生涯関わる支援の実現である。幼稚園、小学校、中学校など年齢や所属別のソーシャルワークではなく、切れ目のないソーシャルワーク実践を実現するための、生まれてから一生涯、人の一生を一つの時間的単位としたソーシャルワーク実践の提案である。そしてもう一つは、地域に暮らす人の生活すべてを包括するような支援の実現である。学校や病院、会社など、役割別・地域別に区別されるソーシャルワークではなく、一人の人の生活空間を空間的単位としたソーシャルワーク実践の提案である。支援における時間と空間を、一人の人が生活するという視点で、当事者のニーズに添ったソーシャルワーク実践が行える時、一人ひとりに寄り添う「ひきこもり」ソーシャルワーク実践が可能となるであろう。今後も上記のような「ひきこもり」ソーシャルワーク実践への可能性に向けて様々な試みと研究を実践していきたい。

Abstract

Title: Needs of Hikikomori individuals (Socially Withdrawn Individuals) and Social Work:
Case Studies in Hikikomori Support Practice

Haru Fukuzaki

This paper poses a question: in the support efforts for cases of *hikikomori* (severe social withdrawal), what would be the kind of support that attends to the needs of *hikikomori* individuals? Then, from a perspective of a social work practice based on the power transaction model, new possibilities for *hikikomori* support efforts are explored which could overcome the issues surrounding current efforts.

The first chapter analyzed the current state of *hikikomori* support efforts and discussed issues surrounding those efforts.

The number of *hikikomori* individuals is estimated at 696 thousand nationwide (Cabinet Office Survey 2010, wherein the count is for broad cases of *hikikomori* including those who "go out only when hobby-related errands call for it"). To tackle the issue, various methods of supportive intervention have been devised and implemented since early 1990s, each in response to certain challenges posed at the time; e.g. consultations, *ibasho* (a place one can belong to), family support, self-help groups, home-visit support, residential-style support and employment support. By 2013, the efforts have expanded to include 39 Local Support Centers for *Hikikomori* across Japan. However, the age of *hikikomori* individuals, the length of *hikikomori* period, and the age of parents of *hikikomori* individuals are all on the increase, indicating ongoing issues of prolonged *hikikomori* conditions and aging of *hikikomori* individuals and their parents (KHJ Parents Association 2005-2013, Aoki 2010).

According to a Cabinet Office survey (2013), the current support efforts for *hikikomori* cases were found not to be effectively carried out for the benefit of *hikikomori* individuals, in 5 aspects: 1) co-operation between support organizations, 2) network-building, 3) sufficiency of support, 4) matching of support, 5) setting of goals (what to aim for in the support efforts). What was common among inadequacies in these 5 aspects was the failure to attend to the needs of *hikikomori* individuals themselves. Given such a state of current *hikikomori* support efforts, at *Katatsumuri Gakusha* (Snail Schoolhouse), a support organization established by the author, a needs-based support practice for *hikikomori* individuals has been carried out and seen certain positive results (2012). However poor reproducibility was a challenge posed by this particular support method.

Therefore in chapter 2, as an attempt to increase reproducibility of the needs-based

support practice at *Katatsumuri Gakusha*, case histories were analyzed. The power transaction model (Kadota, 2000) was adopted as an analysis perspective. This was because the model had the same view of "support" as that of *Katatsumuri Gakusha*, which focuses on "assessing the individual's needs and conducting supportive interventions that attend to those needs". In this model, power is defined as "an ability to influence the environment to satisfy one's own needs", and the state where this power is lost is defined as the state of "powerlessness". The model calls for assessment of the needs of the individual in the state of powerlessness, and supportive interventions in terms of advocacy, empowerment and service coordination.

When two cases at *Katatsumuri Gakusha* were analyzed from this model's perspective, it was proved that *hikikomori* individuals had actually been in the state of powerlessness. It was also found that not only the assessment of the concerned individual's needs but also the support method at *Katatsumuri Gakusha* could be understood in line with this model, in terms of advocacy, empowerment, and service coordination. The model was originally proposed for school social work practices, but going beyond the realm of schools, it proved to be applicable to *hikikomori* social work practices as well. The *hikikomori* individual was in the state of powerlessness in relation to society in Case I, and in relation to school in Case II. In both cases, the social work practice based on the power transaction model that attends to the needs of the *hikikomori* individual was found to be effective.

Moreover, the case studies at *Katatsumuri Gakusha* indicated a possible resolution of the 5 issues surrounding current *hikikomori* support efforts mentioned in chapter 1. Regarding the issues of 1) cooperation between support organizations and 2) network-building, even without formal cooperation between support organizations, substantive cooperation and network-building became possible when the social work practice "made assessments and managed the whole process, having a comprehensive vision, grasping flows and changes along the way so as to enable the person to receive the support that fits her/his will" (Suzuki, 2004). And the issues of 3) insufficient support and 4) mismatching of support were resolved by assessing the needs of *hikikomori* individuals and conducting the supportive interventions in line with those needs. The issue regarding 5) setting of goals was also resolved as the *hikikomori* individuals began to be able to have clear goals in their own mind, in the process of fulfilling their small needs one at a time.

Incidentally, in both Case I and Case II at *Katatsumuri Gakusha*, it was found that the individuals had been in the state of powerlessness even before they became a *hikikomori*. This posed a further question: is this peculiar to the cases at *Katatsumuri Gakusha*, or are many *hikikomori* individuals actually in the state of powerlessness before they become *hikikomoris*?

To address this question, in chapters 3 and 4, an interview survey was conducted of 4 persons with past experience of *hikikomori*, to analyse when in life they had fallen into the state of powerlessness. This survey also aimed to explore 1) the relationship between the state of powerlessness and the state of *hikikomori*, by examining whether the individuals had received appropriate support in line with their needs at the time they had fallen into the state of powerlessness, and 2) the kind of support that would have been necessary if one were to support those individuals to improve the state of powerlessness. Chapter 3 described the method of conducting the interview survey, and chapter 4 summarized the survey result. The same perspective for analysis as that of chapter 2, i.e. the power transaction model, was used here.

The survey result showed that although the 4 persons with *hikikomori* experience differed in their sex, age, family structure and present circumstances, they had all been in the state of powerlessness before they became *hikikomoris*. It was indicated that the state of powerlessness was caused not only by the interpersonal relationships but also by structural reasons. It was further found that as a result of being forced to stay in the state of powerlessness, they had been caught in a vicious circle: they lost confidence in themselves, which led to suppression of their needs, which in turn led to inability to clarify their own needs, making them no longer able to fulfill their needs.

There are multiple factors which hindered them from receiving appropriate support. One of the major factors is that the kind of support needed to help them had been non-existent in the society at the time. Also, from such comments as "I didn't know I had a choice to consult for help" and "I didn't know where to consult for help", it became apparent that there is a need for awareness-raising activity to increase perceptions of the availability of support.

Chapter 5 drew conclusions and made proposals for the *hikikomori* support efforts. In this paper, the social work practice based on the power transaction model was found to be useful in supporting *hikikomori* cases. The main characteristic of this model is grasping the needs of the individual in question, and this is above all the most important. In order to achieve this effectively, a good relationship with the supporting person is vital, while the allowance to change one's mind easily, the provision of a variety of choices, and creative ways of asking questions are also necessary. The needs of the individual do constantly change in relation to people or society and as s/he goes through various experiences. Therefore it is also important to be flexible when attending to the needs.

The method of supporting the individual's needs is through advocacy, empowerment and service coordination. Advocacy was carried out between 1) the individual and her/his family members, 2) the individual and her/his school, and 3) the individual and society. In

relation to family members, the hikikomori individual was empowered and her/his needs could be fulfilled, when supporting person attended to the hikikomori person's needs, communicated to family members the meaning/benefit of being a *hikikomori* from the *hikikomori* person's standpoint, and requested the family's cooperation. In relation to school, a structural issue emerged; because the school is the party that carries out what the supporting person advocates, whether or not the school accepts the advocated proposals became the issue. In relation to society, the *hikikomori* individual her/himself conducted advocacy towards people s/he came into contact in society. In addition, Higuchi (2008) has pointed out the lack of availability of social benefits i.e. financial or social services for *hikikomori* individuals to sustain their life, and suggested the need for advocacy toward government bodies. Finally, starting of awareness-raising activities in primary school education was proposed, to promote easy access to care and support for *hikikomoris*; the SOS (Sign of Suicide) Program which has been implemented in US secondary and high schools was given as an example of similar initiatives.

As for empowerment, the most important form of empowerment is the interaction which affirms the *hikikomori* individual's existence and current conditions. To this end, the supporting person will need to listen to the *hikikomori* person's needs without any preconceived goals about the support efforts. The *hikikomori* individuals can also get greatly empowered when they get acquainted with ex-*hikikomori* people who are now enjoying their lives. The future calls for more places that allow communication and interaction between *hikikomoris*, ex-*hikikomoris*, or family or community members willing to support lives of *hikikomoris*, such as self-help groups and *ibasho* (places one can belong to) in which there is no such assumption that everyone has to get employed someday and "leave the nest".

What is vital in service coordination is never to make the service coordination an end in itself. Especially in conducting service coordination which is in line with social demands, e.g. starting school, getting employed or gaining communication skills, the social work needs to be carried out with extra care. Because many *hikikomori* individuals have relatively strong sense of societal norms, it is all too easy for them to refrain from saying "no" and be caught up in circumstances, resulting in service coordination not matching the individuals' characteristics. When the service coordination fails to work for them, *hikikomori* individuals blame themselves for failing/not living up to expectations of family or people around them. The experience then becomes yet another "failure", an experience of defeat that has repeated itself so many times. When the experience of defeat is recurred by the very support efforts, *hikikomori* individuals easily end up despairing over having new experience or over life at large. Therefore, in coordinating services, one must always be

attentive to the *hikikomori* person's needs, and empower the person, observing the impact it has on the person, examining its sustainability, and dealing with changes carefully so as not to turn the person's attempt into another experience of defeat. At the same time, it is necessary to assess the influence the service coordination will have onto the family members and/or other people, and share expected outcomes with the *hikikomori* person and the family members.

As seen above, the *hikikomori* social work practice has various aspects specific to the *hikikomori* condition, while attendance to the needs of *hikikomori* individuals is central. It can be said that the *hikikomori* social work practice is a support effort tailored to each *hikikomori* individual according to her/his characteristics, and in tune with her/his life. As we have seen in chapters 2 and 4, *hikikomoris* and ex-*hikikomoris* all have different personalities, go through different inner experiences in time and space and at each given situation hold their own ideas and wishes about themselves, their families, society or life at large. Toward a possibility for *hikikomori* social work practice that closely stands by the *hikikomori* individuals, I would like to make two proposals. First is the realization of life-time support. In order to carry out a seamless social work practice, instead of age-oriented social work practices which are separately carried out in kindergartens, primary schools or secondary schools, I would like to propose a social work practice that takes a person's whole life as a unit in time. Another proposal is the realization of the support which relates to all facets of one's life in community. Instead of purpose-oriented social work practices which are separately carried out at schools, hospitals or companies, I would like to propose a social work practice which takes a person's everyday life sphere as a unit in space. The *hikikomori* social work practice that closely stands by each individual would be possible, when the social work practice based on the individual's needs could be conducted assuming the time and the space of a person living her/his life as the time- and space-frame of support efforts. Towards the possibility of such social work practices, I shall continue to further my explorations and researches.

「ひきこもり」当事者のニーズとソーシャワーク
—「ひきこもり」支援の実践からの事例研究—

目 次

はじめに	1
第1章 「ひきこもり」支援の現状と課題	
1 「ひきこもり」の定義	2
2 「ひきこもり」の統計	3
(1) 人数	
(2) 「ひきこもり」当事者の特性（年齢、期間、開始年齢、父母の年齢）	
3 「ひきこもり」支援の現状と課題	6
(1) 「ひきこもり」支援の歴史	
(2) 「ひきこもり」支援の現状	
(3) 「ひきこもり」支援の課題	
(4) 課題1：連携・ネットワーク構築	
(5) 課題2：支援の不足・ミスマッチ	
(6) 課題3：支援の目標	
4 新たな支援の可能性	16
第2章 「ひきこもり」当事者のニーズと支援	
1 かたつむり学舎の概要	18
2 パワー交互作用モデル	19
3 ニーズとは何か	20
4 インタビューの目的と方法	22
(1) 目的	
(2) 方法	
5 倫理的配慮	22
6 実践例Ⅰ、Ⅱの概要	23
7 実践Ⅰ 山川友里さん（仮名）との関わり —社会と個人との間—	23
(1) 家族の状況	
(2) 友里さんの状況	
(3) 自宅から出たいけど出られない時期（相談開始）	
(4) やりたいことと行き詰まり	
(5) 外出に慣れる（かたつむり学舎での支援開始）	
(6) やりたいことにチャレンジしながら、パンレストランに通う	
(7) 大学を受験してみたいと思い立つ	

(8) ボランティアを続けながら、パソコン専門学校に通い始める	
8 実践例Ⅱ 橋本敬史さん(仮名)との関わり ―学校と生徒との間―	40
(1) 家族の状況	
(2) 敬史さんの状況	
(3) 気づかない間に、高校生活がままならなくなっていた時期	
(4) 居場所としてのかたつむり学舎と、通信制高校への転校	
(5) 様々な体験を試みた時期	
(6) この先何をしたいのか体験して考えた時期	
9 「かたつむり学舎」の実践とパワー交互作用モデル	54
(1) パワー交互作用モデルによる「かたつむり学舎」実践の考察	
(2) 「かたつむり学舎」の実践にみる「ひきこもり」支援の課題の解消	
(3) 「かたつむり学舎」の実践にみる「ひきこもり」当事者のニーズ	
(4) 「かたつむり学舎」の課題	
第3章 「ひきこもり」経験者へのインタビュー調査に向けて	59
1 インタビュー調査の目的	
2 インタビュー調査概要	
3 インタビュー調査研究の方法	
4 調査期間	
5 インタビュー者一覧	
6 インタビュー調査研究の分析方法	
7 倫理的配慮	
第4章 「ひきこもり」経験者の語りの世界	
1 今野良和さんの語りから学ぶ	61
(1) 今野さんが「ひきこもり」に至るまで	
(2) 「ひきこもっている」時の生活	
(3) 今野さんが外に出るようになったきっかけ	
(4) 今野さんの居場所と役割の拡がり	
(5) 今野さんと人との関係性	
2 宮脇健介さんの語りから学ぶ	71
(1) 宮脇さんのライフストーリー	
(2) 友人関係以外の繋がりが無いということ(学校での支援課題)	
(3) 社会的に生きることに対して絶望する時	
(4) 人と一緒に生活を楽しむ	
3 佐藤奈美さんの語りから学ぶ	77
(1) 佐藤さんの満たされない安全のニーズ	
(2) 佐藤さんが話を聴いてもらえる場とアドボカシーの必要性	

(3) 家族の支えを期待できない佐藤さんが社会的に生きるということ	
(4) 佐藤さんがニーズに気づく関わり	
4 吉田雅彦さんの語りから学ぶ	82
(1) 吉田さんが「ひきこもり」に至るまで	
(2) 「ひきこもっている」時の生活	
(3) 吉田さんが外に出るようになったきっかけ	
(4) 社会的に生きるために必要な経済的支援	
5 早期支援の可能性	90
6 直接的な対人関係以外で起こるパワー交互作用	90
第5章 「ひきこもり」経験者から学んだこと	
1 当事者ニーズの重要性	93
(1) 当事者ニーズの明確化、把握の重要性	
(2) 変化していく当事者ニーズに寄り添う	
(3) 当事者ニーズと家族との対話を促す	
2 「ひきこもり」ソーシャルワークにおけるアドボカシー	94
(1) 当事者と家族とのあいだ	
(2) 当事者と学校とのあいだ	
(3) 当事者と社会とのあいだ	
①経済的なこと	
②啓発について	
3 「ひきこもり」ソーシャルワークにおけるエンパワーリング	99
(1) 当事者の現状を肯定する関わり	
(2) 当事者や家族が受け入れられていると感じる場や人の存在	
(3) 当事者ニーズを把握、実現させる関わり	
4 「ひきこもり」ソーシャルワークにおけるサービス調整	100
(1) 当事者ニーズ、当事者の特性との擦り合わせ	
(2) サービス調整による当事者への影響のアセスメント	
(3) 家族や当事者に関係する人への影響のアセスメント	
(4) 社会の中にまだ存在していない必要な選択肢を創造していくネットワーク	
5 「ひきこもり」ソーシャルワーク実践への可能性	101
(1) 時間：生まれてから一生涯に関わる支援	
(2) 空間：家族、学校、社会など生活すべてのフィールドに関わる支援	
6 成果と課題	103
むすびに	105
【引用文献】	107

【参考文献】	115
--------------	-----

【参考資料】	118
--------------	-----

はじめに

本研究は、支援を行う際に密接に関わる当事者のニーズという視点から、これまでの「ひきこもり」支援について見直し、その課題を明らかにすること、および、それに代わる支援のあり方を提案することを目的とする。

先行研究によるこれまでの「ひきこもり」支援、及び、「ひきこもり」経験者の語りから、「ひきこもり」支援のあり方が当事者のニーズとどのように関わっているのかを分析し、さらに筆者の取り組みである「かたつむり学舎」での実践例から、「ひきこもり」当事者への支援に必要なソーシャルワーク的関わりについて言及し、今後の「ひきこもり」支援について社会へ提言を行うものである。

1990年代に、「ひきこもり」が若者の問題となってから久しいが、その捉え方や支援については様々な論があり、それに伴って「ひきこもり」支援についても様々な在り様が伺える。これまで「ひきこもり」支援について様々な議論がなされてきたが、それはどれも「ひきこもり」当事者不在の議論だったといえる。なぜならそれらの支援には「ひきこもり」当事者のニーズが反映されていないからである。

2009年から厚生労働省によって行われた「ひきこもり対策推進事業」は、公の施策として初めて、「ひきこもり」に特化した支援であった。そして、その目的は「ひきこもり対策を推進するための体制を整備し」とあり、「ひきこもり本人や家族等を支援することにより、ひきこもり本人の自立を推進し、本人及び家族等の福祉の増進を図ること」としている。このことは、「ひきこもり」状態は問題であるという文脈の中で、ひきこもりから脱することが支援の目的であり、そのための方向性として、本人の自立を掲げていることを意味する。

しかし、「ひきこもり」において、これまでも議論がなされてきたように、果たして「ひきこもり」状態は問題なのであろうか。仮に、問題であるとすれば、誰にとって、どう問題なのであろうか。また「ひきこもっている」人を「自立」させることが『ひきこもっている』人やその家族にとって福祉の増進につながるのだろうか。そもそも「自立」とはどのような状態を指すのか、さらには「自立を促進」することだけが「ひきこもっている」人や家族への支援なのであろうか。

これらの疑問を、当事者のニーズの視点から見直し、改めて「ひきこもり」支援を問い直したい。

第1章 「ひきこもり」支援の現状と課題

1 「ひきこもり」の定義

「ひきこもり」の定義については、民間支援者や精神科医、政府機関などがそれぞれに定義している。例えば、精神科医の斎藤は「20代後半までに問題化し、6ヶ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの」¹、民間支援者の富田は「コミュニケーション不全に苦悩し、人間関係が強いられる場（学校・職場など）から身を引くことで生活を維持している若者たち」²、新聞記者の塩倉は「対人関係と社会的活動からの撤退が本人の意図を超えて長時間続いている状態であり、家族とのみ対人関係を保持している場合を含む」³、社会学者の井出は「社会的行為の喪失点」⁴とそれぞれ定義している。

また、行政では厚生労働省が「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」⁵（以下、「ガイドライン」）の中で以下のように定義している。

「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念である。なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低くないことに留意すべきである。」

この定義は、他の定義と比べて「ひきこもり」の状態像がつかみやすく、また、他の定義で言及されている内容も包括していることから、本研究では、この定義を採用する。

さらに、「ガイドライン」⁶では、「ひきこもり」と「不登校」との関連について、以下のよう述べている。

不登校とは、もともと学校もしくは登校をめぐる激しい葛藤をともなった欠席状態を意味しています。文部科学省の定義では「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」となっています。

近年の調査で、義務教育年限の不登校から一定の比率、たとえば中学生年代での入院事例の10%ほど（斎藤,2000）に青年期以降のひきこもりが出現していることが明らかとなっていることを踏まえ、このガイドラインでは、不登校のうちには本ガイドラインで定義したひきこもりと関連性が強い一群が確実にあると考えています。そこで、不登校についても、社会的活動（学校生活や仲間との交友）とそれに関連した場（学校）からの回避行動＝社会活動からのひきこもり（withdrawal from social activities）

であるとの視点を強調し、本ガイドラインでは不登校の問題を「顕在性か潜在性かを問わず、学校に参加することへの恐れ、拒否感、あるいは怒りと、欠席することへの罪悪感を持ち、登校せずに家庭にとどまる生活は総じて葛藤的であるといった状態像を伴う長期欠席」であると捉えています。

このように、不登校を「社会活動からのひきこもりであるとの視点を強調」していることから、「義務教育年齢でのひきこもり」と捉えることもできるような定義となっている。

2 「ひきこもり」の統計

(1) 人数

上記「ガイドライン」では、世界精神保健(WMH)調査(WHO 主導による国際的精神・行動障害に関する疫学研究プロジェクト)の一環として、20 歳以上を対象にひきこもりの疫学調査を行った 2004 年(平成 16 年)から 3 年間の厚生労働科学研究を最も信頼性の高いものとしている⁷。

この研究では、国内の 11 市町村ごとに無作為に抽出した地域住民合計 4,134 人(平均回収率 55.1%)を対象に、こころの健康やその関連要因・危険因子等についての構造化面接を実施している。その中で、現在「ひきこもり」の状態にある子どもがいるかどうかを質問し、いと回答した場合はその子どもの年齢を質問している。さらに調査対象者の中の 20～49 歳までの 1660 人に対しては、これまでに「ひきこもり」といえる経験があるか否か、あった場合はその時期(年齢)、期間などについて質問している。その結果、ひきこもり経験を持つ被調査者が 1.2%(生涯有病率)、現在「ひきこもり」の状態にある子どもがいると答えた被調査者が 0.56%(有病率)であった。これを調査当時の平成 15 年度の全国の総世帯数にかけると「約 26 万世帯(95%信頼区間 15 万～36 万)となる」とのことであった。「ガイドライン」ではこの数値に対して「おそらくこれは推定値としては最小限のものと思われます」という但し書きをつけている。

また、内閣府は 2010 年に「若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)」(以下、内閣府調査 2010 という)⁸を行っている。この調査では調査対象者を 15 歳～39 歳に限定している。この調査の「ひきこもり」の定義は、「近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からはほとんど出ない」状態が 6 ヶ月以上続き、そのきっかけが「病気」「妊娠」出産」「育児」「在宅の仕事」ではない人を「狭義のひきこもり」、「趣味の用事のときだけ外出する」人を「準ひきこもり」とし、「狭義のひきこもり」と「準ひきこもり」の合計を「広義のひきこもり」としている。その結果、「狭義のひきこもり」が人口の 0.61%、「広義のひきこもり」が人口の 1.79%であった。そして、2009 年の 15～39 歳人口 3,880 万人から算出した結果、狭義の「ひきこもり」が 23.6 万人、広義の「ひきこもり」が 69.6 万人である、と報告している。

(2)「ひきこもり」当事者の特性（年齢、期間、開始年齢、父母の年齢）

「NPO 法人全国引きこもり KHJ 親の会」（以下、KHJ 親の会）は全国に 39 支部を持つ唯一の全国組織である。KHJ 親の会では 2003 年以降、毎年度会員を対象に調査を行っている 9,10,11,12,13,14,15,16,17。この調査では、全国の支部会・月例会に参加した人の中で調査協力を得られた人に質問紙への回答を求めている。

図表 1、2 は ①「ひきこもり」当事者の現在の年齢 ②ひきこもり始めた時の年齢 ③ひきこもっている期間 ④現在の父親・母親の年齢を示している。

図表－1 「ひきこもり」の平均年齢、平均開始年齢、平均期間、父母の平均年齢

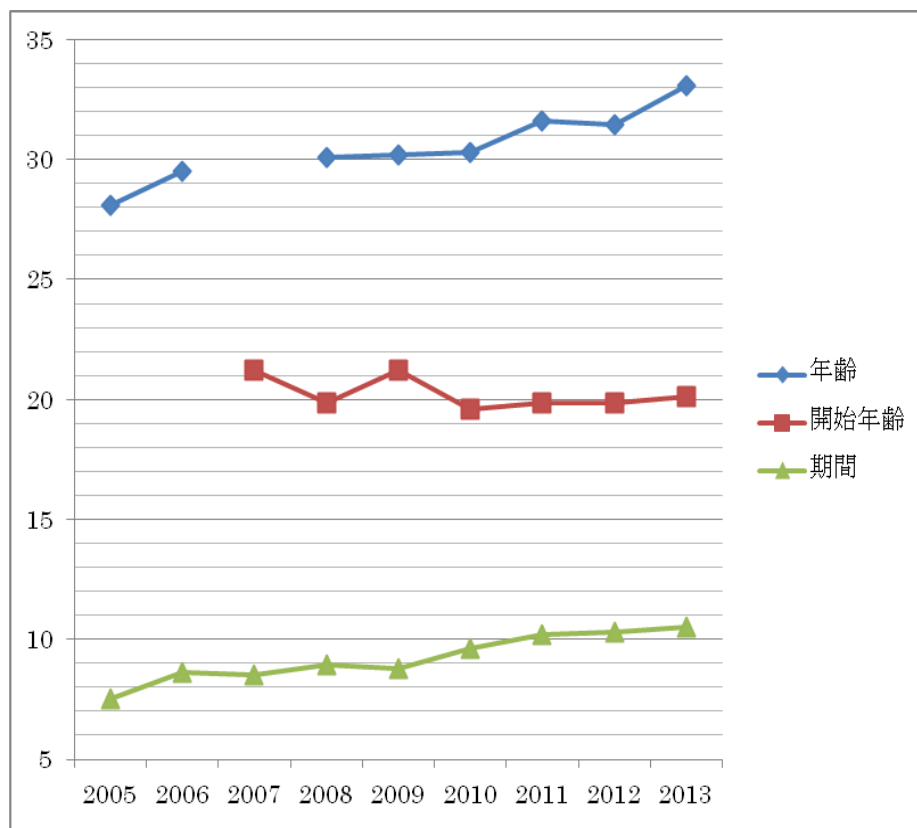
年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
①年齢	28.1	29.5		30.1	30.2	30.3	31.6	31.5	33.1
②開始年齢			21.2	19.9	21.2	19.6	19.9	19.9	20.1
③期間	7.5	8.6	8.5	9.0	8.8	9.6	10.2	10.3	10.5
④父年齢		61.6	62.1	63.2	62.1	62.9	64.4	64.3	67.1
④母年齢		58.7	58.1	58.3	59.5	59.9	60.2	60.1	61.8

* 空白は欠損値

出典：KHJ 親の会 「ひきこもり」の事態に関する調査報告書(2005～2013)より筆者作成

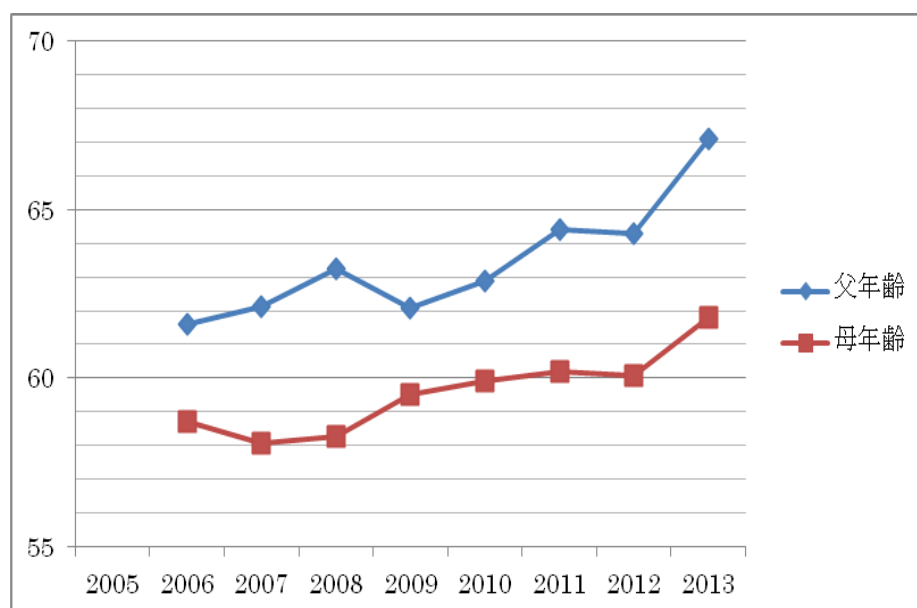
図表 2、3 を見ると分かるように、「ひきこもり始めた時の年齢」以外は全て増加傾向にあり、「ひきこもり」の長期化、「ひきこもり」当事者と両親の高年齢化が進んでいることがうかがわれる（ちなみに、2013 年の結果では、ひきこもり期間 10.5 年、当事者の年齢 33.1 歳、父親の年齢 67.1 歳、母親の年齢 61.8 歳である）。

図表－2 当事者の現在の年齢、ひきこもり期間、ひきこもり開始年齢



出典：KHJ 親の会 「ひきこもり」の実態に関する調査報告書（2005～2013）より筆者作成

図表－3 当事者の父母の現在の年齢



出典：KHJ 親の会 「引きこもり」の実態に関する調査報告書（2005～2013）より筆者作成

青木は、福岡市内で在住の支援機関を利用している「ひきこもり」当事者と家族 124 名に調査した結果、「ひきこもり」当事者の平均年齢 29.2 歳、ひきこもり開始時平均年齢 21.1 歳、ひきこもり期間平均 8.1 年、父親の平均年齢 65.3 歳、母親の平均年齢 59.8 歳であったと報告している¹⁸。

KHJ 親の会の調査と青木の調査は、地域・時期が異なるにも関わらず、全ての数値が近似値を示している。

3 「ひきこもり」支援の現状と課題

(1) 「ひきこもり」支援の歴史

「ひきこもり」が世間に広く認知されるようになったのは、2000 年頃であるが、「ひきこもり」への支援は 1990 年代初期から行われていた。

「ひきこもり」支援の先駆的な存在は富田富士也である¹⁹。富田は当初、「ひきこもり」の親の相談に応じていた。そこから、当事者の相談にも応じるようになった。その中で、「待合室で知り合った人達ともっとゆっくり話したい」という声が出てくるようになり、「フレンズスペース」を開設するに至った。現在は「居場所」としてのフレンズスペースが民間・行政によって全国に見られるようになったが、富田のフレンズスペースが「居場所」の先駆けであると言っても過言ではない。

同様に医療現場でも「家族の相談」に応じていた。また、来所できる当事者に対して「カウンセリング」「個人精神療法」などの支援が行われていた。

これらの富田や医療現場での支援は画期的なものであったが、一方で、「外に出られない当事者へは支援が届かない」という課題があった。そんな中、「外に出られない当事者への支援」として、工藤、ニュースタート事務局²⁰などが行った「訪問支援」が登場した。さらに、「生活の場」としての寮の提供と、就労支援も提供されるようになった。また、当事者同士の自助グループや親の会が自然発生的に結成されていった。このようにして、次節で述べるような現在の支援が確立されていったのである。

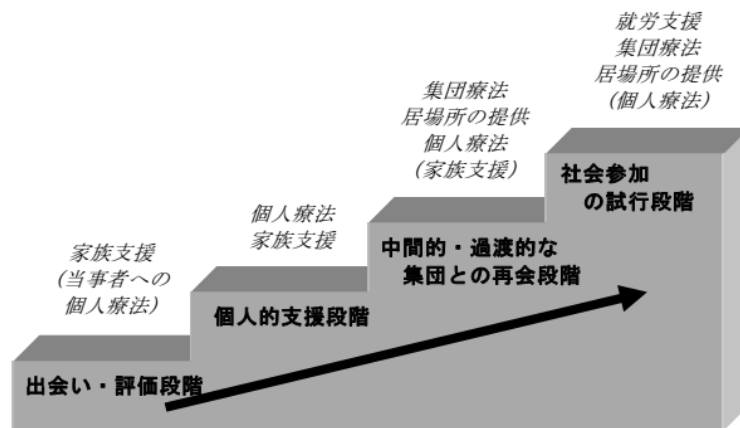
(2) 「ひきこもり」支援の現状

現在、様々な機関団体で多種多様な支援が行われており、整理・分類することは難しい。「ガイドライン」では「ひきこもり」支援を

通常、出会いと評価の段階における家族支援から当事者の個人的な心の支援へ、そして個人的支援からデイ・ケアや居場所のような中間的・過渡的な同世代集団との再会へ、中間的・過渡的集団活動から本格的な社会活動（就学・就労を中心に）へという諸段階を一段一段登っていく過程である。

としている（図表－4.1、4.2）²¹。

図表－4.1 ひきこもり支援の諸段階



出典：ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン（厚生労働省、2007）

図表－4.2 ひきこもり支援の諸段階

-
- 第1段階：家族支援および訪問活動
 - 第2段階：個人相談
 - 第3段階：中間的・過渡的な集団との再会（居場所での活動）
 - 第4段階：就労支援
-

出典：ひきこもりの評価・支援に関するガイドラインをもとに筆者作成（厚生労働省、2007）

また、内閣府が2013年に実施した「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」（以下、「内閣府調査2013」）では、現在行われている支援を図表5のように整理している²²。

図表－5 支援方法の分類



出典：「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」報告書（内閣府、2013）

（３）「ひきこもり」支援の課題

「ガイドライン」では、「不登校・ひきこもりの支援はまだ未確立な部分をたくさん含んだ課題であり、今後も支援の体系が持っている不備を改善し続けて行くことが専門機関とそこの支援にあたる実務家に課せられている義務といえる」と述べ、現状の支援だけでは不十分であることが指摘されている²³。

また、前節で見てきたとおり、「ひきこもり」当事者の平均年齢、親の平均年齢が上がり、ひきこもり期間は長期化の傾向をたどっている。その調査結果からも、現状の支援だけでは「ひきこもり」に十分に対応できない一定の層がいることが読み取れる。

さらに、「内閣府調査 2013」は、「医療支援・福祉支援、就学支援、職業訓練以外の支援（以下、「その他の支援」）に対しては、各支援団体がそれぞれの理念等や独自のノウハウに基づいて支援を展開していることが多く、支援目標・支援方法についての共通理解が必ずしも定まっていない。また、医療支援・福祉支援、学習支援、職業訓練を受けている者の中にも、支援内容やその時期が本人にマッチしておらず、本来ならばその他の支援を必要としているケースも散見される。（中略）支援の現場では、家族に対して様々な支援が行

われているものの、まだ支援目標・支援方法について支援方法が確立されているとは言えない。」という問題意識から行われた調査であり²⁴、調査結果では、様々な課題を報告している。

そこで、以下では「ひきこもり」支援の課題について、整理・検討していきたい。

（４）課題１：連携・ネットワーク構築

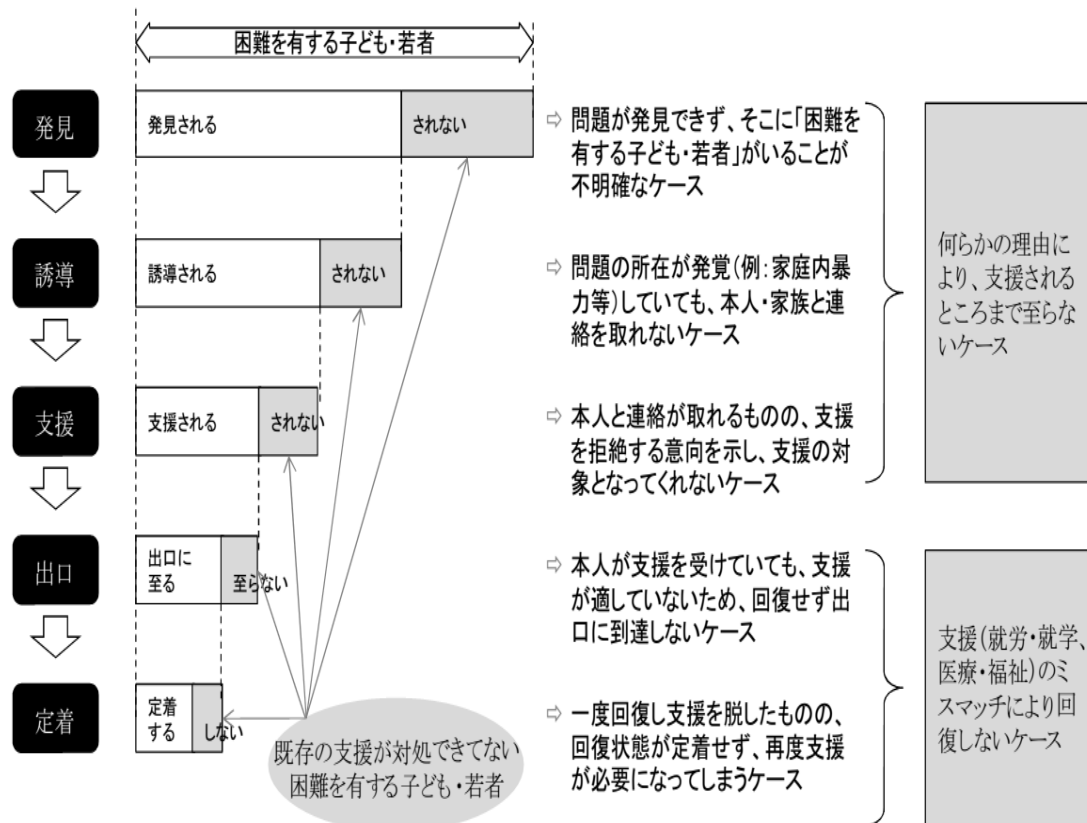
図表５で示されている全ての支援を行っている機関については、全国を見渡しても「NPO 法人わたげの会」「NPO 法人青少年自立援助センターYMC」など、ごくわずかの機関だけである^{25,26,27,28}。したがって、当事者が複数の支援を受けるためには、複数の機関からの支援を受ける必要があることがほとんどである。

そのため、これまでの「ひきこもり」支援の研究では、今後の課題として「複数の支援機関による連携・ネットワークの構築」を挙げる文献が目立つ^{29,30,31,32}。また、「ガイドライン」でも同様の提言が行われている³³。その取り組みの一環が「ひきこもり地域支援センター」の設置である。2013年（平成25年）4月までの段階で、全国39箇所に設置されている。こうした複数の機関の連携やネットワーク構築による成果報告もすでに公表されているが^{34,35}、これらの取り組みはまだ始まったばかりであり、今後の積極的な取り組みが期待される。

（５）課題２：支援の不足・ミスマッチ

「内閣府調査2013」は、「①場・コミュニティにも支援対象にも属さない人の存在、②適した支援が受けられず、適さない支援を受け続けたままで止まる人の存在、③場・コミュニティに適応しないまま放置されている人の存在、④支援後の適した場・コミュニティが与えられず支援対象として止まり続ける人の存在、があると考えられる」と指摘し、NPO法人「育て上げ」ネットの「支援の5原則」を元に、図表6のようにまとめている³⁶。

図表－6 NPO 法人「育て上げ」ネットの「支援の5原則」における
支援段階で見た支援から外れてしまう子ども・若者



出典：「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」報告書（内閣府,2013）

同様に、「ガイドライン」でも「中間的・過渡的な集団での活動にはなんとか適応できるのですが、実際の就労へどうしても踏み出せないという、ひきこもりでも社会的自立でもない群が一定程度現われるはずです。そのため、この中間的・過渡的な集団での支援を延々と続ける必要が出てきます。さらには、この中間的・過渡的集団に参加する段階に至らないまま、個人的支援にだけ参加できるような、あるいはまったくそれも拒んで家庭にとどまるような、ひきこもり状態を続ける群も必ずや存在することでしょう。」と指摘されている³⁷。

また、「居場所」に関する研究において、「居場所から社会に出ていけない人」「社会に出たが、適応できず、居場所に戻ってくる人」「居場所に参加したが、居場所に適応できなかった人」の存在が指摘されている³⁸。

さらに、居場所と就労との「間」について、「ひきこもり」経験者である上山は、『親密な仲間ができた』状態から、『独立した経済生活』へのハードルが一番高い」と述べている³⁹。この指摘は、「ひきこもり」が社会的に注目された 2000 年代初期の早い段階の時点のこ

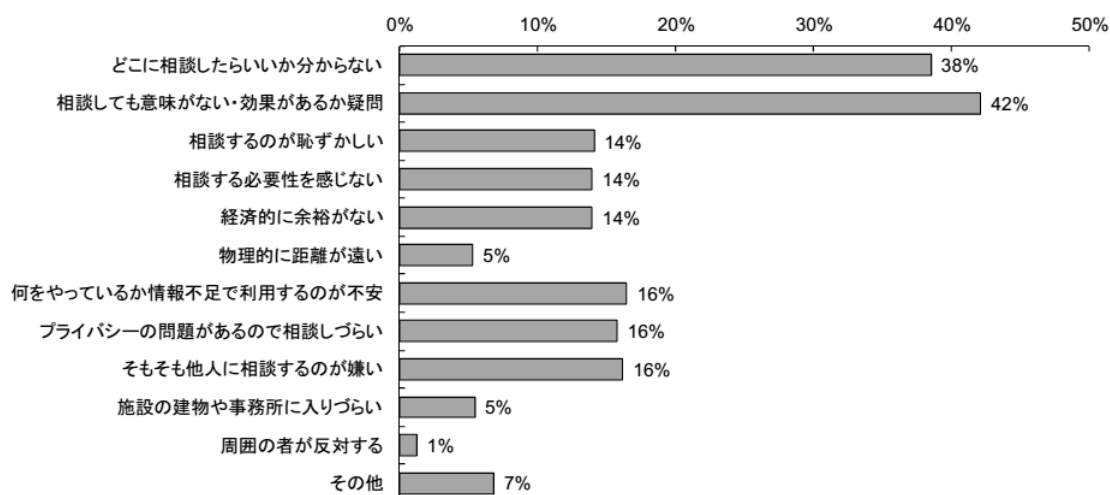
とであるが、解決されないまま現在に至っている。筆者のこれまでの支援経験からも、上山の主張には強く賛同できる。

以上のことについて、「内閣府調査 2013」は「各段階で支援の対象から外れてしまう人がいるという問題を別の角度から見ると、既存の支援が提供できている範囲に漏れがあると見ることができる」と指摘している⁴⁰。

また、この「内閣府調査 2013」では、インターネット調査で、「15 歳以上 40 歳未満で、現在ひきこもり、ニートなど、社会生活を円滑に営む上での困難を抱えている家族がいる」と答えた回答者を「困難家庭」と定義し、困難家庭 1,546 人に対して、様々な調査を行っている。以下に、その調査結果をいくつか転載する。

1,546 人のうち、支援を受けたことがない本人を家族にもつ人は過半数の 53%、819 人もいた。その 819 人に、「回答者が相談していない理由」を尋ねたところ、「相談しても意味がない・効果があるか疑問」という回答が 42%にものぼった（図表 7）⁴¹。

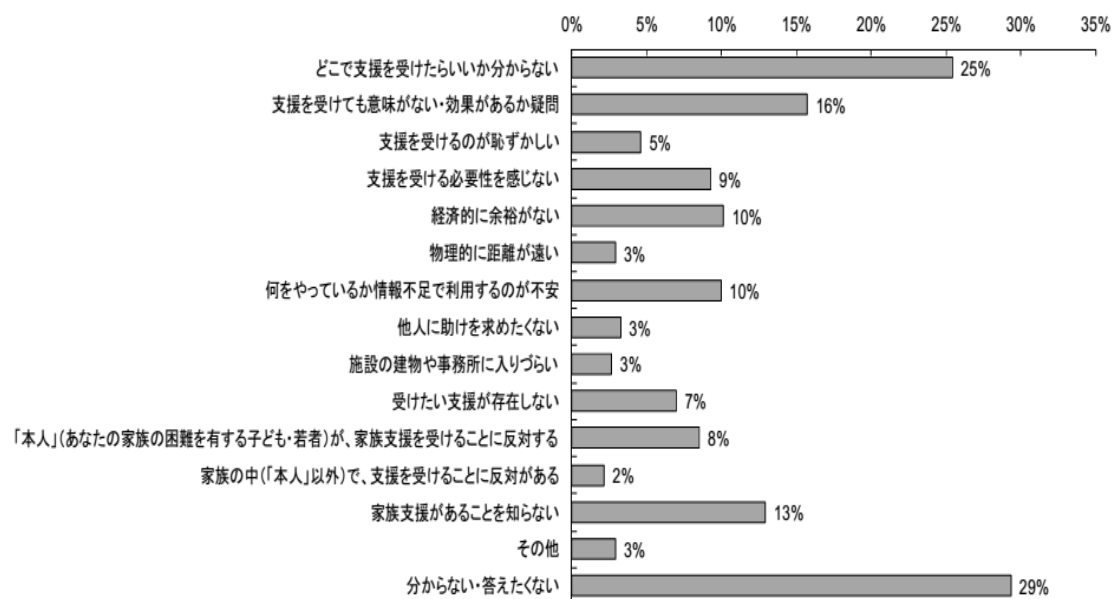
図表－7 困難家庭の回答者が相談していない理由（n=717）



出典：「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」報告書（内閣府,2013）

困難家庭で家族支援を受けたことがない回答者（76%）1,177 人に対し、家族支援を受けていない理由を尋ねたところ、「どこで支援を受けたらいいかわからない」が 25%であった他、「支援を受けても意味がない・効果があるか疑問」が 16%、「受けたい支援が存在しない」が 7%であった（図表 8）⁴²。

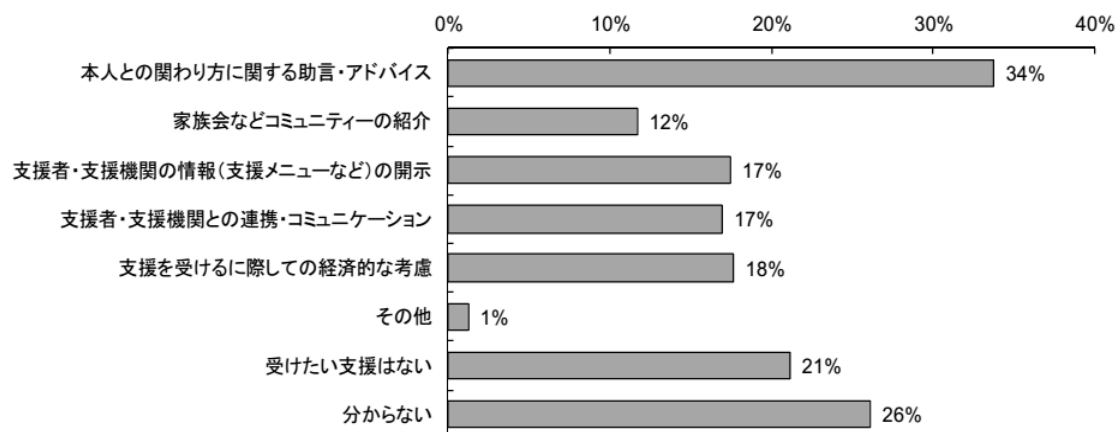
図表－8 困難家庭の回答者が、家族支援を受けていない理由（n=1177）



出典：「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」報告書（内閣府,2013）

困難家庭が「受けたいと思う支援」を尋ねたところ、「本人との関わり方に関する助言・アドバイス」が34%であった他、「受けたい支援がない」が21%と2番目に高かった⁴³。

図表－9 困難家庭の回答者が、家族支援として受けたいもの（n=1546）



出典：「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」報告書（内閣府,2013）

以上のように、「内閣府調査 2013」では、「どこに相談をしたらいいかわからない」「どこで支援を受けたらいいかわからない」などの回答が目立ったため、「支援者・機関の情報をまとめ、アクセスしやすいようにする必要性」を訴えている⁴⁴。

しかし、一方で、この調査結果を見ると、情報が届くようになって、「(家族が) 受け

たい支援がない」状態や「相談しても意味がない・効果があるか疑問」という気持ちが解消されなければ、課題は解決しない。そのため、当事者やその家族が「受けたい」と思える支援を確立することが重要であることが内閣府の調査からも伺える。

（６）課題３：支援の目標

ここでは基本に立ち戻って、そもそも「支援」とはいったいどういうことであるのかを考えておきたい。

今田⁴⁵は、支援を「何らかの意図を持った他者の行為に対する働きかけであり、その意図を理解しつつ、行為の質を維持・改善する一連のアクションのことをいい、最終的に他者のエンパワーメントをはかることである」と定義し、さらに以下のように述べている。

支援される人（被支援者）の意図を理解すること、行為の質の維持・改善、及びことがらをなす力をつけること（エンパワーメントすること）がポイントである。支援行為がどう受け止められているかを常にフィードバックして、被支援者の意図に沿うように自分の行為を変える必要がある。これができない支援は本当の意味での支援ではない。

支援には、他者への「配慮 Care」とエンパワーメントが決定的に重要であり、支援は固定したシステムではうまくいかないし、被支援者が置かれている状況変化にあわせてシステムを変えていく必要がある。また、支援システムはあくまで被支援者の置かれた状況に応じて自らを自在に変化できなければ、効果的ではない。その意味では「自省的フィードバック」が重要である。大切なことは、「支援」は相手の立場に立って自分を変えることが必要という点にある。つまり、支援される人がどういう状況に置かれており、支援行為がどのように受け止められているかをフィードバック（自省）して、支援される人の意図に沿うように自分の行為を変える必要がある。支援したい、助けたいということを自己目的化してはならず、相手のニーズをきちんと汲み取る必要がある。

以上のように、支援では「相手のニーズをきちんと汲み取ること」「支援行為がどのように受け止められているかを自省すること」「システムや支援行為を状況にあわせて変化させること」が強調されている。

また、日置⁴⁶は「地域生活支援」について、「一人ひとりのニーズに寄り添う」ことがいかに重要であるか、ということをも、以下のように述べている。

もっとも重要であることは、徹底的に一人ひとりのニーズに寄り添うことである。言い換えるとそれは、納得や同意がない妥協をさせない、あきらめさせない支援である。

具体的には「悩みや困りごとに向き合う」「できることはすぐに実現する」「思いを受け止める」ことである。(中略) あきらめはニーズを潜在化させる。本当に必要なことをあたかもなかったことにしてしまう。制度がないから、支えるものがないから、無理な希望だからと一方的にあきらめさせることは支援ではない。あきらめるかどうかは本人が決めることであって、支援者側から一方的に押し付けられるものではない。あきらめない、希望を持つことは人間が自分の人生の主人公として主体的に生きていくために必要不可欠な要素である。一人ひとりのニーズに寄り添うことは、「あきらめさせない、希望を支える」という意味で、自分の人生を主体的に生きる主人公を育てることにつながる重要性を持っている。

上記の支援に関する捉え方を念頭に置き、現在の「ひきこもり」支援の状況を検証すると、1つの問題が浮かんでくる。それは、現在行われている支援が「ひきこもり」当事者一人ひとりのニーズに添ったものであるのか、ということである。

東京都が 59 の支援団体を対象に「支援の方向性」を調査したところ、「自己肯定感・生きる力の醸成支援」「社会参加への準備支援」「就労・就学支援」「支援員・支援団体への支援、情報提供」「その他」の 5 つのカテゴリーに分類された⁴⁷。「その他」に分類された団体は 4 団体であり、55 団体は「支援の方向性」が団体によってすでに決定されていることが分かる。なお「その他」の具体的な内容は示されていないため、不明である。

また、竹中⁴⁸は、自身が「ひきこもり」当事者の支援においては、「個別の事情をふまえた、ゆるやかな支援」を目標としている。この「ゆるやかな支援目標」という言葉には、成果を急がず、また、就労や就学、社会関係の形成だけに目標を置かず、広い視野に立って、今の生活より少し自由な生活ができるように支援すること、などが含意されている。「個別の事情をふまえ」「就労や就学、社会関係の形成だけに目標を置かず」という表現には「ひきこもり」当事者のニーズに添うことのようにも思えるが、「今の生活より少し自由な生活ができるように支援する」と述べていることから、「支援者側の支援目標」が完全にはなくなっていないことが伺える。

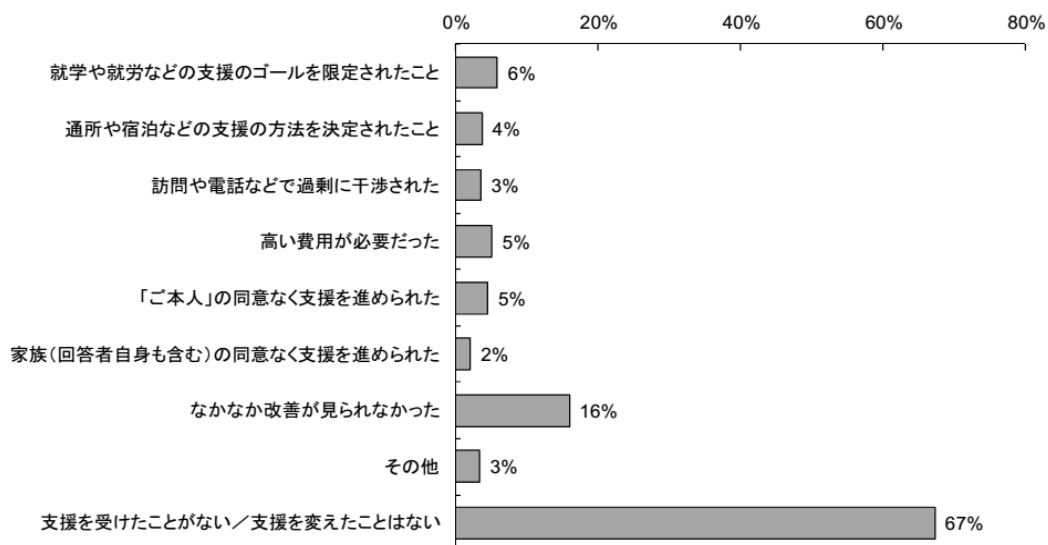
以上のように、現状の「ひきこもり」支援における「目標」は「支援者側」から提示されたものであり、「ひきこもり」当事者と必ずしも合致しない可能性がある。この点については「ガイドライン」でも、今後の課題として「第一の課題は、現在のところ提唱され実践されている支援体系がいずれも基本的には不登校・ひきこもり状態からの脱却、すなわち学校復帰や進学、あるいは就労を唯一のアウトカムとして想定している点ではないでしょうか」と指摘している⁴⁹。

同様に、石川は「どこか一地点を<回復>として設定し、そこに辿り着くために努力すること（および努力を迫ること）が、当事者にとって重圧となっている側面がある」とし、「その人なりに納得のいく生き方を実現していくことや、その可能性に目を向けられるようになることが、何よりも大事にされなければならない」と述べている⁵⁰。以上のことから、

3つ目の課題として、「ひきこもり」当事者のニーズに即した支援の確立が浮上する。

このことは、「内閣府調査 2013」でも明らかにされている。「本人が受けた支援を変えた理由」を尋ねたところ、「就学や就労などの支援のゴールを限定されたこと」が6%、「通所や宿泊などの支援の方法を決定されたこと」が4%、「訪問や電話などで過剰に干渉された」が3%、「ご本人の同意なく支援を進められた」が2%、「家族の同意なく支援を進められた」が2%であった（図表 10）⁵¹。「ゴールが限定された」「方法を決定された」「過剰に干渉された」「同意なく進められた」という言葉には、「当事者や家族のニーズを確認せずに（あるいはそれに反して）」支援が行われていたことが伺える。なお、この質問には「支援を受けたことがない」52%の人も含まれているため、「支援を受けたことがある人」に限定すると、上記の理由の割合はかなり上昇する。

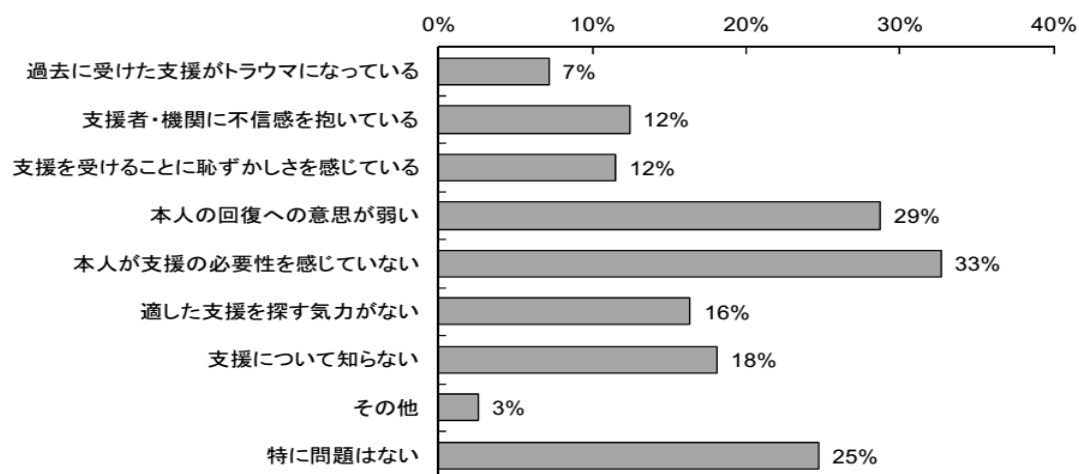
図表－10 本人が受けた支援を変えた理由（n=1546）



出典：「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」報告書（内閣府,2013）

また、「困難家庭」の家族に「適切な支援を受ける上での、本人に関する障壁」を尋ねた質問の結果も興味深い（図表 11）⁵²。「本人が支援の必要性を感じていない」が33%、「本人の回復への意志が弱い」が29%、という結果は、あくまで本人以外の家族が感じていることであるため、本人が本当にそうなのかどうかは分からないが、「支援者・機関に不信感を抱いている」が12%、「過去に受けた支援がトラウマになっている」が7%であった。

図表－11 適切な支援を受ける上での、本人に関する障壁（n=1546）



出典：「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」報告書（内閣府,2013）

支援によって救いを求めている当事者が、支援を受けることによってさらに傷ついている、という現状があることは悲しいことである。このように、「ひきこもり」当事者が「支援によって傷つく」ことをなくすためにも、「当事者のニーズに添った支援」を行うことが重要であろう。

なお、ニーズについては、第2章で検討する。

4 新たな支援の可能性

前節で見てきたように、現在提供されている支援だけでは「ひきこもり」当事者を支援する上で不十分であること、「ひきこもり」当事者が「受けたい」と思う支援がない場合があること、当事者のニーズを汲み取られていない場合があることから、既存の支援を補う新たな支援が望まれている。そこで、本研究では、既存の支援とは異なる新たな支援の提案を行いたい。

筆者は「かたつむり学舎」という支援機関を立ち上げ、これまでの「ひきこもり支援」に囚われない独自の支援を行い、一定の成果を上げている⁵³。「かたつむり学舎」での支援は、その方法だけを見れば図表5（8頁）の分類のいずれかに当てはめることができ、一見、これまでの支援と大差がないように見える。しかし、支援方法は同じでも、そこには大きな違いがある。それは、これまでの支援が、「支援方法」が支援団体によってすでに決まっており、その中から当事者の状態に合わせて支援を提供しているのに対して、「かたつむり学舎」での支援は、当事者のニーズが最初にあり、そのニーズを満たすために様々な支援を提供しているということ、つまり、「ひきこもり」当事者へのオーダーメイドの支援を行っている、という点にある。

「かたつむり学舎」の支援が効果的であった理由を分析した結果は、以下のとおりであ

った。

家族と絶えず連携しつつ、①家族以外の他者が当事者と関わり、②彼らの存在を全肯定し、③社会的規範に囚われることなく対話しながら当事者が行動を決定し、④決めたことを実行できるように援助し、⑤状況に応じていつでも変更・調整し、⑥やりたいこととできることが重なる選択肢を社会の中に探したり創ったりしていった。

「家族と絶えず連携しつつ＝家族と協働して」も1つと数えると、福崎の支援は7つの要素から構成されている。そのうち、②～⑥は「当事者のニーズ」に関連している。筆者はこの支援のあり方に大きな手応えを感じている。しかし、この方法には1つの大きな問題がある。それは「再現可能性の低さ」である。それは、上記7つの要因全てに当てはまる。「家族と絶えず連携する」とは、何をどの程度行う必要があるのか。「①家族以外の他者が当事者と関わる」必要があるのはどうしてか。「②存在を全肯定する」「③社会的規範に囚われない」とは支援者のどのような態度や発言、行動を指すのか。何ををもって、それを行えたと判定することができるのか。「③当事者が行動を決定」するために、どのような支援を行う必要があるのか。「④決めたことを実行できるように援助する」ために、支援者が気をつけるべきことは何か。具体的にどのように援助するのか。「⑤状況に応じて、変更・調整する」とは、どのような判断の下で行われているのか。「⑥選択肢を探したり、創ったり」するために必要なことは何か。他の支援者が筆者と同様の支援を行えるようにするためには、明確にしなければならないことが数多く存在している。

しかし、逆に言えば、上記の問いを明確にすることができれば、新たな支援を誰にでも行える形で提案することが可能となる。

そこで、第2章では、筆者が行っている「かたつむり学舎」での支援を、再現可能な形で分析し直し、新たな「ひきこもり」支援の手がかりとしたい。

第2章 「ひきこもり」当事者のニーズと支援

1 かたつむり学舎の概要

かたつむり学舎¹とは、教育・相談・ソーシャルワーク機能を備えた、「ひきこもり」当事者・家族の支援を目的とする民間組織である（図表12）。その民間組織は、以下のねらいで設立されている。

当事者や家族に寄り添い、当事者のニーズが社会の中で充足するために、一人ひとりと社会とをつなぐための関わりを行っている。それは、社会の中でその当事者が「何をしたいか、そしてどう生きるか」を一緒に考え、当事者の希望や状況に合わせて、当事者が望む必要な力や方法を身につけたり、彼らが生き活きと活動できるフィールドを探したり、創造したりするといった社会とつながるための支援となっている。そのため、かたつむり学舎の支援目的は、社会的な生活の中での当事者のニーズの充足となる。手段としての、また当事者ニーズとしての「就学」や「就労」はあり得るが、それら自体がかたつむり学舎の目的となることはない。

図表－12 かたつむり学舎の概要

設立年：2008年

設立趣旨：社会的な生活が困難になった方と関わり、相談や体験を通して、その人と社会とのつながり方を一緒に考え、橋渡しし、その人のニーズや特性に合った社会的な生活を創造していくための関わりを活動目的とする。

立地：市の住宅街にあり、周辺は交通の便も良い。かたつむり学舎は、10階建のアパートの1階に位置している。

利用者数：現在、4名が利用しており、人数は随時3～6名を推移している。

関わりの方：活動内容はすべてオーダーメイドで、利用時は個別での関わりを行っている。

利用者の年齢：14歳～27歳

スタッフ：専従は筆者のみ。その他、関わりのニーズによって、必要な方に筆者よりコンタクトを取り、随時関わってもらっている。

利用金額：3,000円～32,000円（利用頻度や関わり方によって異なる）

出典：筆者作成（2014年2月現在）

支援方法としては、当事者や家族との相談、自宅訪問、活動・利用施設・ボランティア・アルバイト先などの開拓・調整・同行・連携、学習サポート、外出訓練、様々な人間関係場面でのサポート、当事者が企画したイベントの実施など、当事者・保護者からのニーズにできる限り応じている。学習サポートやカウンセリングなどを行う場所として、アパー

トの 1 室を賃借している。なお、専属スタッフは筆者一人であり、必要に応じて臨時スタッフ 5 名（臨床心理士資格保有者もしくは教員免許保有者）の協力を得ている。

2 パワー交互作用モデル

「かたつむり学舎」での実践の再現可能性を高めるための分析を行うためには、分析するための視点が必要である。そこで、分析を行う視点として、門田が提案した「パワー交互作用モデル」を採用した。なぜなら、このモデルは「当事者のニーズ」を把握し、そのニーズに添った支援を行うという、筆者の「かたつむり学舎」での実践と同様の視点を持っているためである。以下で、パワー交互作用モデルの概要を説明する。

門田²は学校ソーシャルワーク実践の独自性とその必要性を示すために、「パワー交互作用モデル」を提案した。ソーシャルワークと学校ソーシャルワークについて、門田は以下のように述べている。

ソーシャルワークは伝統的に社会的不公平や環境的争点の解決をその使命としてきた。社会的公平とは、「社会のすべてのメンバーが同じ基本的権利、保護、機会、義務、社会的恩恵を得ている理想的な状態」を言う。ゆえに、ソーシャルワークの対象となるクライアントは社会的に不公平な“状況にある人”であり、実践の目的はその“状況を改善すること”である。よって我が国での学校ソーシャルワークの使命と目的は、“学校教育を受ける権利及び機会において、社会的に不公平及び不平等な状況にある児童生徒への状況を改善していくことにある”と考える。

以上を踏まえた上で、「パワー交互作用モデル」とはどのようなモデルであるかを見ていきたい。

門田³は、3 年間の学校巡回相談で受けた 121 件の事例分析を行った結果、75.1%の 91 件が「生徒－学校（先生）間」「生徒－家庭（親）間」「学校－家庭間」「生徒間」等の交互作用において、教育上不公平な状況に置かれており、その状況改善が求められていることを見出した。

交互作用とは「お互いのパワーがぶつかり合い、交換し合い、相互に影響を及ぼし合い、変化する関係性」のことである⁴。また、パワーとは「自分のニーズを充足するために環境に影響を及ぼしていく能力」であり、子どもたちは潜在的にこれらの個人的パワーと強さを保有している。

パワー交互作用には、2 つのパターンがある。1 つ目は「受容的な、あるいは互いを尊重するパワーとの交互作用」である。このパワー交互作用は、両者に良好な影響をもたらし、人間関係が良くなり、集団がまとまっていく。2 つ目は、「権威的・権力的パワーとの交互作用」であり、このパワーを片方が行使していった場合、もう片方はパワーが減退し、状況改善に対して無力化し、さらに、人間関係で自己の自尊心を低下させ、人間関係への不

信を深めていくことになる。このようにして、パワーが減退することを「パワーレスネス」と呼ぶ。なお門田は、権威を「人に承認と服従の義務を要求する精神的・道徳的・社会的または法的威力」、権力を「他者をおさえつけて支配する力」と定義している⁵。

以上のように「権威的・権力的パワーとの交互作用」によってパワーレスネスな状態に置かれた児童・生徒に対するソーシャルワークとして、アセスメントと介入が行われる。

アセスメントのポイントは以下の2点である。1つ目は「学校－家庭間」「学校－子ども間」「家庭－子ども間」のパワー交互作用の状況を把握することである。ただし、これはあくまで「スクール」ソーシャルワークの場合である。このモデルを「ひきこもり」当事者への支援に応用するためには「学校」を「社会」に置き換え、「社会－家庭間」「社会－当事者間」「家庭－当事者間」のパワー交互作用の状況を把握する必要がある。そして2つ目は、「子どもがその状況をどのようにしたいのか」というニーズの把握を行うことである。ニーズについては、次節で詳述する。

介入の中心には、①アドボカシー ②エンパワーリング ③サービス調整、が据えられている。アドボカシーは定義が一致していないが、門田⁶は Sosin&Calum の「アドボカシーは決定者よりも弱いパワーの立場にある人の福祉や利益のために、決定に際して個人やグループが別の個人やグループに影響を及ぼしていく試みである」という定義と Mickelson の「アドボカシーは社会的公平を保証し、維持する目標をもって、一人以上の個人、グループ、コミュニティのために、直接に代表し、擁護し、介入し、サポートし、または一連の活動を薦める行為」という定義を採用している。本研究でも、この定義を採用する。

次にエンパワーリングであるが、門田⁷は「パワー交互作用モデルでは、パワーが減退したパワーレスネスな状態からパワーな状態に向かっていくことをエンパワーと捉える」と述べている。そこで、本研究では、アドボカシーとサービス調整以外で「パワーレスネスな状態からパワーな状態に向かっていく」ため、介入は全てエンパワーリングと捉えることにする。

最後に、サービス調整であるが、この代表例としてはネットワーキング、つまり「家庭・学校に地域内の関係機関を繋いでいく」ことが挙げられている。

3 ニーズとは何か

「パワー交互作用モデル」は、「当事者（子ども）のニーズ」に応じて介入を行うため、「当事者ニーズの把握」は必要不可欠である。では、ニーズとは何か。ニーズについては、これまで様々な観点で分類、定義されており、①そのニーズが個人の何を充足するのかというニーズの役割的視点で分類された Maslow⁸ のニーズ階層論、②ニーズが認識される経路によって分類された Bradshaw,J.R⁹ のニーズ論、③ニーズの主体（当事者か第三者）とその顕在度によって分類された上野¹⁰ のニーズ論、④ニーズを構成する要因（デマンド、デザイア、ニード）の視点で定義された上田¹¹ のニーズ論、などがある。

門田¹² はパワー交互作用モデルを提案するにあたり、ニーズについて「ウエルビーイン

グ状態に向けて個人が必要とするものへの内的状態」という Norlin&Chess¹³ の定義を採用し、その理論的基盤を Maslow¹⁴ のニーズ階層論（生理的ニーズ、安全のニーズ、帰属のニーズ、承認のニーズ、自己実現のニーズ）に据えている。マズローの欲求階層論については、実証性についての課題や、欲求論を展開しながらも「自己実現」という究極の価値を示していることへの批判¹⁵ など議論の余地がある。しかし、それでも今なお、経済学、社会学、教育学、心理学、医学、社会福祉学など様々な分野で多くの先行研究によって採用されていることから^{16,17,18,19,20,21,22}、本研究でも、このニーズの定義を採用し、以下にマズローのニーズ階層論（図表 13 参照）の 5 段階を列記する。また、そのニーズの主体は、パワーレスネスな状態に陥っている「ひきこもり」当事者とし、ニーズ把握とは、当事者のニーズを把握することを意味する。実践例の中では、状況に応じて家族のニーズにも対応している場面があるが、その際にも、当事者ニーズが何よりも優先されるべきものであるという認識に立つ。家族のニーズに対応する際には、介入が当事者のニーズと相反しないことを常に念頭に置きつつ、「ひきこもり」当事者のパワーレスネスな状況をエンパワーリングする目的で行い、「ひきこもり」当事者を取り巻くサービス調整という位置づけで捉えている。

図表－13 マズローの欲求階層論

5 段階：自己実現の欲求（自己実現のニーズ）

自分の持つ能力や可能性を最大限発揮し、形にしたいとするニーズ

4 段階：承認の欲求（承認のニーズ）

自分が価値のある存在と認められ、尊重されることを求めるニーズ

3 段階：所属と愛情の欲求（帰属のニーズ）

家庭・学校・職場などに所属し受容され、友情や愛情を得たいとするニーズ

2 段階：安全の欲求（安全のニーズ）

経済的安定、恒常的な生活など、危険から自分の身を守り、安全を求めるニーズ

1 段階：生理的欲求（生理的ニーズ）

生命維持のための呼吸・飲食・睡眠・排泄などのニーズ

出典：田嶋誠一著「現実介入しつつ心に関わる－多面的援助アプローチと臨床の知恵－」P101

図 1 マズローの欲求階層を参照、Maslow, A. H (1954) Motivation and Personality. Harper and Row.

小口忠彦監訳(1984)「人間性の心理学」産能大出版より補足し筆者作成

4 インタビューの目的と方法

(1) 目的

インタビュー調査を実施したのは、かたつむり学舎の利用を既に終了した当事者についてである。2つの実践例ともに、ひきこもる以前から筆者が勤務するクリニックでクライアントとして関わりがあり、ひきこもった後、かたつむり学舎での関わりを通して社会につながっていくまでの変化の過程が明らかになった事例である。

インタビュー調査の目的は次の二点である。かたつむり学舎では、当事者と一緒に様々な活動を行っているが、①その時、当事者の中では何が起きていたのか、②また効果的だった関わりと改善が必要な関わりについて明確にするためである。これにより「ひきこもり」の特性とその特性に合わせた効果的な関わりを明らかにする手がかりを得たいと考えている。

(2) 方法

実践例に関しては、関わりごとの筆者の記録をもとに、保護者の発言、電話、メールのやりとりの記録などを合わせ、時系列にまとめた。それを彼らの変化の過程ごとに区切り、それぞれの変化の過程ごとに、考察を加えている。また当事者たちが社会とつながり、かたつむり学舎を利用終了後、筆者がまとめた事例記述を当事者たちに披瀝し、記述に齟齬がないかの確認をとった。さらにそれぞれ 2 回ずつ当事者へ、記述した事例をもとに半構造的面接によるインタビュー調査を行った。両者に許可を取って、インタビュー内容は録音し、トランスクリプトを作成し、共通理解を図った。

5 倫理的配慮

本研究は、かたつむり学舎の支援が既に必要なくなっている当事者 2 名に対して行っている。調査に先立ち、インタビュー調査への協力は任意であり、拒否しても何ら不利益がないことを書面及び口頭で対象者に説明した。また得られたデータは本研究の目的以外に使用しないこと、個人名等のプライバシーを厳守することを明示した上で、口頭及び書面にて同意を得た。

またインタビュー開始後も、質問内容に関して話しにくいものは無理に応えなくて良い旨を事前に伝えた。また話している途中であっても中断を申し出てよいことを伝えた。こちらからもインタビューの表情が曇ったと感じた時は、インタビューを続けても差し支えないかどうか適宜確認を行った。また希望があれば研究論文を開示することができる旨を伝え、インタビューを開始した。

6 実践例Ⅰ、Ⅱの概要

以下に示す2つの実践例は、実践Ⅰ 山川友里さん（仮名）、実践Ⅱ 橋本敬史さん（仮名）とかたつむり学舎スタッフとしての筆者の関わりである。実践Ⅰと実践Ⅱはともに、不登校という「ひきこもり」の状況からそれぞれに模索しながら社会へつながっていく過程を示している。しかしそこには、山川友里さんと橋本敬史さんそれぞれが持つ独自性があり、その特性に合わせた関わりを行っていったため、関わり方にも相違点が生まれた。実践Ⅰと実践Ⅱの相違点は、それぞれの「ひきこもり」方、「ひきこもっている」時の様子（過ごし方）、「ひきこもり」状態が持続することへの困り感、「ひきこもり」状態時の困っている内容、社会へのつながり方など、様々な場面でみることができ、それぞれの場面における関わり方も異なっている。

実践Ⅰでは、山川友里さんが主人公である。彼女は興味や好みがはっきりしており、比較的行動的で何事も自分で体験し選択し決定することを望む。高校1年のある時点で、彼女の選択したいものが自身の置かれている環境の中になく状況に直面したところから筆者との関わりが始まっている。彼女には「やりたいこと」や「好きなこと」があるが、それは「親が望むもの」や「社会の中で自分ができること」や「経済的に自立できること」と異なっていたために、社会とのつながりが持てなくなっていた。実践Ⅰは、そんな彼女と社会との間で、彼女がやりたいこと、且つ行うことのできる新しい選択肢を一緒に探していくという関わりを続けていった実践例である。

また実践Ⅱでは、学校から求められたことに対して、やらなければいけないこととして必死に頑張ってやってきた橋本敬史さんが、高校1年のある時点で、精神的・身体的にやり続けられない状態になったところから関わりが始まっている。当初、彼の望むことは「やらなければいけないことができるように、みんなが普通にやっていることを自分もできるようになること」だった。学校に行けなくなった彼には他にやりたいことも夢もなかった。実践Ⅱは、彼と学校との間で起きていることに関わりながら、彼自身が体験を積み重ねる中で、これまでは考えなかった新しい方向性を見つけていけるよう関わった事例である。それでは、実践Ⅰ、実践Ⅱについて、パワー相互作用モデルの視点をういながら順次みていきたい。

7 実践Ⅰ 山川友里さん（仮名）との関わり ―社会と個人との間―

（1）家族の状況

父親、母親、友里さん、弟、父方祖父、父方祖母の6人家族。父方祖父が入院され、弟は施設に入所し、X-1年2月以降、4人。

〈父親〉仕事にでている。〈母親〉パートに通いながら家事全般を行なっている。〈父方祖母〉家事手伝い。〈弟〉友里さんより2歳年下で、軽度の知的障害と広汎性発達障害がある。友里さんが中学3年生の時、知的障害児施設に入所し、生活訓練を受け、現在も施設から

特別支援学校に通い、土日やゴールデンウィーク、盆、正月などの休日に、時々自宅へ帰省している。

（２）友里さんの状況

中学２年生の３学期より、弟からの暴力や友人間のトラブルをきっかけに、不登校になり、集団の中で人と付き合うことが苦手になった①。弟は施設で生活することとなり、その後、弟から暴力を受けることはなくなった。また中学３年進級にあたり２年時にトラブルがあった友人とは別のクラスにしてもらった。中学３年時５月の修学旅行を機に週１～２回は登校するようになった。その後も登校頻度は変わらず、全日制高校を受験し合格した。

中学校を卒業後、「高校からは不登校にならず、毎日登校して友人も作って勉強を頑張ろう」と決意し高校へ入学した。しかし、高校の授業の早さや量に圧倒される中、また新しい環境で高校には知っている先生や友人といった人間関係も全くないまま、勉強についていけないことや学校に馴染めないこと、毎日登校するしんどさを感じながら、それらを誰にも言えず、緊張して登校した日々が続いていた。そして入学一週間後に限界がきて登校できなくなった②。不登校になって、高校の担任が家庭訪問に来てくれたが「高校にはもう行けそうにない」とのこと、友里さんはほとんど自宅で過ごし、自室のカーテンはいつも閉めきっていたとのことだった。その後、高校からの紹介で、公的相談機関へ母親が相談に行くことになり、そこでサポート校やフリースクールを紹介され③、友里さんも見学に行った。しかし集団の中で人と付き合うことが苦手であったため、紹介先の場の雰囲気にも馴染めず、サポート校やフリースクールに行くことを希望しなかった。その後、自宅では、母親に「学校に行かなければいけないのに行けない」と泣きわめいたり、家事を行う母親の後をずっとついてまわったりしているとのことだった。

【この時点でのアセスメント】

以上の情報から、友里さんの状況を分析し、この時点での友里さんのパワーlessnessに陥っている状態について明確化したい。

①弟からの暴力や友人間のトラブルをきっかけに不登校

中学２年生の時点で、弟からの暴力や友人間のトラブルによって、家庭では弟との関係、学校では友人との関係でパワーlessnessの状態になったことが分かる。そしてその結果として友里さんは不登校という行動様式を選択せざるを得なくなっている。

②高校に馴染めず、入学一週間後から登校できなくなった

中学２年生の時点で起こった弟からの暴力や友人間のトラブルによる不登校は、弟や友人が友里さんの近くからいなくなったことで、中学校３年生から週に１～２日登校し、さらに本人の希望で全日制高校を受験するといった行動がみられ、不登校自体は部分的に改善していることが分かる。しかしそれは問題となる事態に関わる人が、友里さんの前からい

なくなっただけで、友里さんのパワーレスネスな状態が完全にエンパワーリングされたわけではなかった。そのことは、中学3年生卒業の時点まで週に1～2日しか登校できていなかった状態で、高校に入学した友里さんの状況から明らかになっている。

- 1) 友人間のトラブル以降も集団の中で人と付き合うことが苦手なままであったこと
- 2) 新しい環境の中で、困難に直面した時、誰にも相談できなかったこと
- 3) 上記のような環境の中で、緊張状態が続いていたこと

以上の3点について、友里さんのパワーレスネスな状態が、アドボケイトやサービス調整などによってエンパワーリングされないまま、友里さんは高校生活をスタートさせている。集団の中で人と付き合うことが苦手なまま、新しい環境で、気軽に相談できないという高い緊張状態にさらされ過ごすこととなった。そして友里さんは希望に胸を膨らませて入学した高校であったにも関わらず、1週間後、とうとう行けなくなってしまうという事態に陥っている。

③公的相談機関からのサポート校やフリースクールの紹介と見学

この状況をなんとか改善したいと思い、次の所属先を探そうと母親は公的相談機関に相談に行き、友里さんも見学に行っている。このように公的相談機関からサポート校やフリースクールの紹介が行われているにも関わらず、友里さんに対して、その紹介がうまく機能しなかったのはなぜだろうか。それは上記に挙げた3点のパワーレスネスな状態が改善されないままであったからであると推測している。そもそも紹介した公的相談機関の相談員は、友里さんがパワーレスネスな状態にあることに気づいていない可能性が高い。もし気づいていれば、複数の人が集うサポート校やフリースクールを紹介することはなかったであろう。また紹介したとしても、エンパワーリングの手だてとともに紹介されたであろう。このように、当事者のパワーレスネスな状態が支援者に気づかれることなく、状況改善のため支援先や方法論を紹介されたり実行されたりすることは、その支援や方法が不履行になる可能性を高く秘めている。なぜならアセスメントが不十分なため、当事者の特性やニーズに合ったサービス調整になる可能性が低いからである。そして、結果として、支援機関や支援者から紹介されたり実施されたりした支援がうまく機能しないということが起こるのである。しかし残念なことに、当事者のパワーレスネスな状態に気づかないという支援者のアセスメントの不十分さと当事者に合っていないサービス調整は、支援者側の反省としてフィードバックされる以上に、当事者や家族の挫折体験として、自信喪失²³や支援に対する不信感²⁴といったさらなるパワーレスネスな状態を引き起こしている。

アセスメントによる状況分析、ニーズ明確化、アドボカシー、エンパワーリング、サービス調整といったパワー相互作用モデルによるソーシャルワークの欠如が、結果として、母親に対して「学校に行かなければいけないのに行けない」と友里さんを泣きわめかせた

り、家事を行う母親の後をずっとついてまわらせるといった、一見すると個人や家族関係に内在する問題の様相を呈するかのような行動に追い詰めているのである。

「ひきこもりを中心とした困難を有する子ども・若者及びその家族」に対する長谷川の調査²⁵では、「ひきこもり」当事者の心理特性として「自信を失っている」「将来に対して大きな不安を抱えている」「どうすれば良いのかわからないでいる」としている。当事者たちは、社会規範に沿うように試みる²⁶も度重なる「挫折体験」や「つらい体験」を経験し²⁷、それを打開するための自分に合った方法が分からずにいる。そのような状況に置かれたら、人は誰でも自信を失い、将来に対して大きな不安を抱え、どうすれば良いのか分からなくなるだろう。つまり、長谷川のいう“当事者の心理特性”とは、当事者が必要とする時に、当事者のニーズに合う適切な支援が行われなかった結果として、そのような心理特性になったと考えることもできる。

また同様のことが、他の調査研究からも明らかにされている。東京都青少年・治安対策本部による調査研究²⁸では、「ひきこもり」当事者は、「人間関係などに困難を感じている者が多く、孤立しがちであるため、孤独感を感じ、ストレスに弱い者が多い」という結果が出ている。これは、「ひきこもり」当事者が現状において、孤立していることを意味している。孤立とは、人に内在する特性を表す言葉ではなく、他者や社会との関係性があることで初めて起こる状況をさす言葉²⁹である。つまり「ひきこもり」当事者が孤立しがちであるということは、「ひきこもり」当事者と社会との間に問題があることを意味している。そして「ストレスに弱い者が多い」とあるが、そもそも人は孤立すれば、誰もがストレスを感じ、逆に人との関わりやソーシャルサポートが多く受けられればストレスは軽減されるものである³⁰。上記の研究はどれも、「ひきこもり」当事者と社会との間に問題があるにも関わらず、当事者が孤立しないで済むような他者や社会からの十分な関わりが得られず、それによってストレス下に置かれている「ひきこもり」当事者の状態を示した調査結果といえよう。ここにパワー交互作用モデルによるソーシャルワークの必要性が伺える。

（３）自宅から出たいけど出られない時期（相談開始）

【相談内容】 X年5月下旬（高校1年）、筆者の勤めるクリニックで母親と来談した。友里さんが困っていることは、「このままの状態（学校にもどこにも行けず、自宅で何をしてもいいかも分からない状態）でいることが辛い。けれどどうしていいか分からない」、また「ずっと自宅にいと気が滅入るが、かといって行ける場所もない」というものだった。母親はそのような状態の友里さんに対してどのように接していいか分からず困っているとのことだった。そこで、相談では、友里さんが望んでいることに対して一つ一つ話し合っていくことにした。

【自宅での過ごし方をなんとかしたい】

話をしていくうちに「自宅で何かやることがあったらいい」という意見がでた。友里さ

んとお母さんに「やりたいこと」「やれること」「やってほしいこと」を出してもらい、友里さんがどんなことなら自宅でやれるか話し合った。その結果、食事の準備をしたり、洗濯や掃除をするなど家の手伝いをするように決まり、それらに取り組んだ。（家庭における帰属のニーズの充足）

【自宅以外の居場所が欲しい】

「ずっと自宅にいと気が滅入るが、かといつて行ける場所もない」とのことだったので、友里さんの条件に合う自宅以外の出掛ける場所を探すこととなった。友里さんの条件とは、

- ① 知り合いに合わず
- ② 多くても2～3人くらいの少数で
- ③ 派手で他者に配慮のないギャル系の人がおらず
- ④ 不登校状態の自分が責められず
- ⑤ 自宅から通いやすいところで
- ⑥ 自分の得意な活動が楽しくできる

ところだった。既存のフリースクールや不登校を対象とした支援施設などは複数の生徒を対象としており、上記の条件に合うところはない。

同年7月、月に1～2回開催されていた発達障害の子どもが通う民間のパソコン教室を筆者が見つけた（サービス調整）。友里さんはパソコンが得意であり、時間帯も日中であつたため、「ここなら知り合いにも合わず、時間帯も行けそう」とのこと、通うこととなった。（家庭以外の帰属のニーズの充足）

【何かを学びたい】

家庭教師は、中学時に来てもらっていたことがあつたが、非常によくない印象があつたことから強く拒絶した。また、塾や習い事、その他イベントなどには、実施されている時間帯も夕方であつたことから、学校からの帰宅途中の生徒が街にいる時間帯と重なるため「知り合いに会いそう」で人目が気になつて行けるところがなかった。そのような選択肢のなかで、上記のパソコン教室は「何かを学びたい」という彼女の希望を叶えることにもなつた。（サービス調整）

【高校をどうするか】

同年6月の時点で、現在の高校の留年が確定したため、友里さんは「留年してまで高校を続けない」と決めたが、代わりに何をするかはまだ決まらずにいた。「やりたいことが決まるまでは、どこかに所属先があつた方がアルバイトをするにも転校するにもメリットが

大きい」ことが話し合いで明らかになり、休学という形をとることになった。休学手続き後は授業料が発生しないということで、しばらくの間、友里さんも母親も復学の期限に急がされることなく、友里さんのペースで「やりたいことを探す期間」が保障された状態となった。(サービス調整)

友里さんは、学校に行っていないことに負い目を感じて、日中は他者の目が気になり、また知り合いに合わせる顔がなく、外出できずにいた。石川は、「ひきこもり」の当事者自身の「強い規範意識が、悪循環を形成している」³¹ことを指摘している。つまりこの状態では、登校や就職を目標にする社会的規範に添った働きかけをすることが「当事者の精神的苦痛を助長させる」³²ということである。したがって、このような状態の時には、ひきこもる現状を肯定し、安心してしっかりひきこまれるような関わりが望まれる。

芹沢は、「ひきこもり」を「存在論的自己が、自己－自己の連続性、同一性－をそれ以上の損傷から守ろうとして、その環境を離れ、連続性が保てそうに思える新たな環境（多くは両親、家族のいる場であり、そこにおける安心を保障された自室）へと移動しよう」と³³した状態だと捉えている。

自分と同世代の人たちのほとんどが学校に行っている状況で、自分だけが学校に行っていない時、「人にどう思われているか」と誰もが「人目を気にする」であろう。しかしなぜ友里さんは「人目を気にした」時、自室や自宅へ「ひきこもる」という行動を起こすのであろうか。存在論的自己を守るために「連続性が保てそうに思える新たな環境へと移動」する、つまり「多くは自室へと移動」するという芹沢の論に加えて、筆者は、「連続性が保てそうに思える新たな環境」を自らが社会の中に創り出せる状況にないからであると考ええる。つまり当事者にとって当事者の自己の「連続性が保てそうに思える新たな環境」が必要な状況にも関わらず、その新たな環境を自分一人の力では社会の中に創造していけない状況になり、唯一存在する環境である自宅へ「ひきこもる」という行動を引き起こしているのである。自分に必要な環境が社会の中にある場合に、それを自分の力で社会の中に創造するということは、自分の力で社会的生活を創造するということである。そして自分の力で社会的生活を創造していけない状況とは、パワーlessnessな状態であり、社会的な生活からその人が断絶を余儀なくされている状態、すなわち社会的に孤立させられている状態であるといえる。かたつむり学舎では、この社会的な生活を、友里さんのニーズを中心に据えて、彼女と一緒にどう創っていくかについて取り組んでいった。

(4) やりたいことと行き詰まり

【やる前から「できない」と決めつけないでほしい】

同年7月～10月、これまでの母親の話から、友里さんの重要な特性の一つが明らかになった。友里さんは、自分がやりたいことが（能力的に、もしくは現時点ではまだ）できないということを自分で実感するまで、直接的な体験を多く必要とする人だった。例えば、友里さんは母親に「東京でアルバイトしながら一人暮らしすれば、すべてが解決するから

東京に行かせてくれ」と頼んでいた。これまでアルバイトも一人暮らしもしたことのない友里さんの経験や能力を知っている父親や母親は「(友里さんに) できるわけないでしょう」と言い (パワーレスネス)、友里さんが考えを変えるように説得を試みるが、友里さんはまったく聞く耳を持たず、最終的には「誰も私のことをわかってくれない」と言って、何の結論も出ずに話し合いが終わってしまう膠着状態が続いていた。

そこで、母親と友里さんに上記の友里さんの特性を伝え、お互いの考えを言い合うというこれまでのやり方の代替案として、友里さんのアイデアを実際にやってみることを勧めた。そして「友里さんが自分で納得して答えを出すまで、母親が友里さんと一緒に、友里さんがやりたいと思っている体験を重ねることが必要である」と伝えた。さらに「何でも思ったことができるとしたら何がしたいか」友里さんに尋ねると、「東京に行ってお笑い芸人の裏方で働く人になりたい。東京でアルバイトをしつつお笑いのスクールに行きたい」と言った。いつものように呆れ返っている母親に対して、筆者が「これは友里さんが次のステップに進んでいく大事な経験であり、これを行っていくことが現実を理解することに繋がる」と説得し、友里さんと一緒に東京に行き、家賃やバイトを調べてくるようお願いした。(アドボケイト)

そして母親の協力を得て、東京での過ごし方について計画を立て、実際に母親と一緒に東京へ行き、友里さんが自分で一人暮らしできる家賃やバイトを調べたり、お笑いの劇場の裏方を観に行ったりした。その結果、友里さんは「今の時点で東京に行って一人暮らしをするのは無理」だと納得し、「いつか東京で一人暮らしができるようになるために、今できることをしよう」と考えるようになっていった。

【介護ボランティアに行きたい】

【毎日行ける場所が欲しい】

「今していること」と「できること」の希望として次に出てきたのは、「介護のボランティアに行きたい」「毎日行ける場所が欲しい」ということだった。そこで筆者が友里さんの自宅近くの介護施設に受け入れをお願いし (サービス調整)、人目が気になって公共の交通機関には一人で乗れないので、母親が介護施設まで車で連れて行くことになった。しかし、施設に到着しても「行きたくない」と言って、車から降りず、ボランティアの時間に行かないということが続いた。母親は、「私と一緒にだと友里がぐずって、甘えて困ります。自分から『やる』って言っていたのに、しなかったり。ぐずぐず言って……、で、『こうしてみたら?』と提案するんですが、それも嫌みたいで。こっちの言うこともきかないので、『もう勝手にしなさい』ってなるんです」と話していた。

(5) 外出に慣れる (かたつむり学舎での支援開始)

【母親以外の共に行動できる支援者が欲しい (かたつむり学舎設立)】

友里さんの家族の中で、時間的にも質的にも友里さんに一番よく関われるのは母親だっ

たが、その母親も家事や家計補助のパートをしていた。場面によっては、母親以外で友里さんとともに行動できる支援者が欲しかったが、父親は仕事が忙しく、またコミュニケーションが不得手で、祖父は入院中、祖母は祖父の介護や家事に手一杯だった。また友里さんの家族は、友里さんのことを母親の代わりに頼めるような人との繋がりを持っていなかった。さらに友里さんのニーズに寄り添い、友里さんと一緒に行動して友里さんを社会につなげていく関わりをしてくれるような社会サービスもなかった。しかしサービス調整を行う上で、新しい人との人間関係を作ったり、新しい場に馴染むまでの間、共に行動する支援者が必要であった。

そこで、同年 11 月、上記の事情と筆者の限界を友里さん親子に説明し、これまで通り相談をしながら、母親の関わりが難しい場面では、代わりに筆者が友里さんと一緒に社会とのつながりを探していくという役割を追加することを提案した。友里さんと母親はその提案を希望し、それをうけて筆者は「かたつむり学舎」を設立し、「かたつむり学舎」のスタッフとして友里さんに関わることとなった。このことにより、友里さんと一緒に必要な場所へ同行できるようになった。

その後、友里さんの希望であった介護のボランティアには、筆者と一緒にいき、高齢者の方との会話、デイケアの掃除、入浴介助の手伝いなど、三日間友里さんとともに体験することができた。その結果「イメージと違った。別のことをしたい」という要望が友里さんから出てきた。

【高卒の資格を留年せずに取りたい】

「働くことが大変だ」ということを実感した友里さんが出した次の希望は、「高卒の資格を留年せずに取りたい」ということだった。これまでの相談業務の中で、高校 1 年時に不登校となり、全日制高校の留年が確定したが「みんなと同じ年（18 歳）に高卒の資格を取りたい」と希望していた高校生の相談に複数応じた経験が筆者にはあり、高校 1 年時の遅い時期でも編入でき留年せず進級できる通信制高校を調べて知っていた。またそのような若者の中には、神経性頻尿で外出恐怖があったり、対人恐怖があり自宅以外での学習が非常に困難であるが「なるべく自宅で学習して、高校卒業資格を取りたい」と希望している高校生が少なからずいた。そのためそのようなほとんど外出できない人でも進級可能な通信制高校を知っていた。友里さんは、高等学校卒業程度認定試験に合格するための学力をつける自信もなく、外出も一人では難しかったので、スクーリングの日数が限りなく少なく、インターネットを利用して容易に進級できる通信制高校を筆者が紹介し、友里さんと両親もその高校を希望したため、転校手続きを行った。（サービス調整）

同年 12 月、全日制高校 1 年生から通信制高校 1 年生となる。通信科へ転校して、高校の課題が送られてくると、友里さんは自宅で課題をどんどんこなし、約 2 ヶ月で、一年分を終わらせ喜んでいた。

【通える場所がもっと欲しい】

【数学を教えてほしい】

【一人で外出できるようになりたい】

「同年代の人がいない場所で、どこかもっと通える場所が欲しい」と希望した。既存の不登校を対象とした支援センターや塾などは「複数の同年代の人が出入りするため行きたくない」と言うので、かたつむり学舎へ通うこととなった。かたつむり学舎で何を行うかということについて話し合ったところ、通信制高校の課題で「一人では数学が難しい」とのことだったので、数学を教えられる人のかたつむり学舎のスタッフとしてお願いし、そのスタッフと一緒に数学を学ぶことにした。(サービス調整)

また、以前から「一人で外出したい」という希望があったが、「人目が気になってできない」ため、保留となっていた。そこで自宅からかたつむり学舎への往復を利用して、外出訓練を段階的に行うことになった。かたつむり学舎は、自宅から離れたところにあり、知り合いに会う可能性がないため、友里さんのペースで段階的にバスを利用して外出訓練を行うことができた。かたつむり学舎へは、バスを 2 回乗り換えて来る必要があったため、①両親に車で送ってもらう ②2 回目の乗り換えのバス停まで車で送ってもらい、最後のバスに乗って来る ③1 回目の乗り換えのバス停まで車で送ってもらい、バスを乗り継いで来る ④家から一人で来る、という 4 段階で少しずつ外出訓練を進めた。外出訓練 1 ヶ月後には一人でバスに乗ってかたつむり学舎に通えるようになった。またその頃には人目があまり気にならなくなっていた。(エンパワーリング)

【スクーリングに行きたい】

こうして友里さんが少しずつ外出に慣れてきた中で、12 月末の通信制高校のスクーリングが近づいてきた。今の段階では「スクーリングは難しいかもしれない」と筆者は考えていたが、友里さんは「絶対行きたい」と言っていたので、そのための準備をしていった。スクーリングでどんなことをするかを通信制高校へ問い合わせ、具体的なイメージが沸くように友里さんに伝えた。さらにスクーリングの一週間前に母親と一緒に同じ電車で会場まで下見に行くことを勧めた。(エンパワーリング)

スクーリングに対して出来る限りの準備を行っていたが、初日は友里さんが風邪を引いて行けなかった。その日の夜、友里さんから「風邪はよくなったけど、明日もスクーリングに行けそうにない。でも行かないと留年になる。どうしよう」と泣きながら電話があったので、「無理して行かなくていいよ。留年しても大したことない。大丈夫。私は明日、山登りに行くから、スクーリングに行けなかったら、一緒に山登りに行こう」と対応した。スクーリングに行けずに、自宅にいと気が滅入って母親に当たったり泣きわめいたりするのではないかと考えたからである。それならば気分転換にもなる山登りに一緒に行くのはどうかと思い誘った。しかし 2 日目は、スクーリングに行くことができた。引率した母親と会場最寄りの駅で、はぐれてしまうハプニングはあったものの、友里さんは無事スク

ーリングを終えることができた。翌日、「昨日はありがとうございました。スクーリングに無事行けました。山登り行けなくてすみません」とメールが来た。

【人との関わりを増やしたい】（サービス調整）

X+1 年 1 月、「人との関わりがもっと欲しい」と希望したので、1 ヶ月に 1～2 度、自宅に訪問してもらえ、無料で利用できるメンタルフレンドという公的な支援を紹介し、利用しはじめた。「話し相手として楽しかった」とのことで、その後約 1 年継続した。高校 2 年生への進級が決まり、バスで外出することができるようになったこともあって、友里さんは自信が付き、意欲的になっていった。

また友里さんは一人で外出できるようになったため、もともと好きだったお笑いのライブやコンサートなどを見に行くようになり、自分で時刻表を調べ、ライブのチケットを予約し、バス・電車などの公共交通機関を利用して度々出かけていくようになっていった。

以下、友里さんのインタビューのなかで、「嬉しかったこと」の中で語られた「バスに乗れるようになった」という部分を紹介する。

…バスに乗れるようになったこと。

——どうやって？

最初は嫌だったけど、時間が午前中だったので、誰もいないということが分かったんで、それで乗れるようになりました。

——乗れない理由は？

ただ同級生と逢うのがいやだったから。

——どうやって乗れるようになったの？ 時間帯をずらしたことで

それと、最初はなんか途中まで送ってもらって、こっから絶対同級生は乗らないっていうところまで、送ってもらって、それで、それからそこまで迎えにきてもらったり、練習して。

他者の目を気にする友里さんの状況について、石川は、「直接的に『ひきこもり』を非難したことがないとしても、そうした価値観（働いていないことを過度に貶めるような価値観）によって形作られている社会で生き、自らもまたその価値観を程度の差こそあれ共有

している以上は、誰もが全くの無関心ではあり得ない。(中略) 人々を引きこもらせないような社会を作っていくことが最も広い意味での『ひきこもり』支援であり、それは私たち一人ひとりが、自分の中にある『ひきこもり』を白眼視させるような価値観を見直すことから始まる。」と言及している³⁴。

（６）やりたいことにチャレンジしながら、パンレストランに通う

【英検を受けたい】

同年２月に入ると、「英検も受けたい」と希望したため、かたつむり学舎と一緒に筆者と英語の勉強をはじめた。(エンパワーリング) また、将来どんなことをしたいか、やりたいことを尋ねると、「オーロラを見に行きたい」「TV局に勤めて、企画やプロデュースするようなことをしたい」「やっぱりお笑いしたい」など、この頃からさらにいろんな夢が語られはじめた。

【アルバイトがしたい】

人目が気にならなくなってから、バスや電車に乗って自分の好きなどところに出かけるなど友里さんの行動範囲が広がっていくにつれて、以前に比べ友里さんの出費もかさんでいった。そこで同年３月、「どこに行くにもお金があるので、アルバイトがしたい」と友里さんが希望した。これを受けて、公的な若者対象の専門相談員にアドバイスを受けながら友里さんの希望するアルバイトを筆者と一緒に探した。アルバイトはしたいものの、いざお店に入ると物怖じしてしまっていて言いたいことが言えなかったり、怖くてお店自体に入れない様子も見られた。また友里さんの条件に合うアルバイトもなかったため、まずは経験を積むためにもボランティアから始めることとなった。アルバイトではパン屋やレストランスタッフを希望していたことがあったため、筆者が障がい福祉サービス事業所で行われているパンレストランのボランティアを紹介した(サービス調整)。最初は、筆者のみが施設に伺い、友里さんの様子をお伝えし、受け入れをお願いした。その後、友里さんと一緒に施設のスタッフと顔合わせをし、同年５月(通信制高校２年)からの受け入れが決まった。パンレストランのスタッフとして、障害のある他の利用者の方と一緒に、珈琲を入れたり、パンを出したり、レジも任された。できる範囲で少しずつ始め、友里さんの体力の状態に任せ、週２～５日の範囲で、９時から１４時まで通うことになった。

【自分の意見を上手く言えるようになりたい】(サービス調整・エンパワーリング)

【文章を上手く書けるようになりたい】(サービス調整・エンパワーリング)

【色々な人と関わりたい】

同年６月、友里さんが「自分の意見を上手く言えるようになりたい。文章をうまく書けるようになりたい」と希望した。そこで、小論文を指導することのできる臨床心理士をかたつむり学舎のスタッフとして新たに迎え、月に２～３回のペースで、このスタッフから小

論文の指導を受けながら、友里さんと対話する時間を設けた。

この頃から「いろんな人と関わりたい」という要望がさらに語られるようになり、全日制高校を辞めてしまったことを後悔し、自分を責めるような発言もあった。「制服を来た高校生を見たら羨ましい」と言うので、「え〜？ あの時はい制服も嫌だし、絶対学校行きたくないって言ってたのに？」と応えると、「そう。あの時はいそうだったんだけど、辞めて楽になると自分も普通に学校に行っていたら友達とも遊べたのになぁと思う。ちゃんと最後まで続けられないで情けない」と言っていた。「学校に行っていたらよかったというか、友達を多く作って一緒に遊びたいって気持ちがあるんやね」というと、「そうです」と応えた。

学校や正規の仕事を何らかの理由で辞めざるを得なくなった時、社会の中にはないオルタナティブな自分独自の道を作っていかなざるを得ない。しかし、そのような選択肢を選ぶ者は少数派であり、社会的な支援も少なく、多くの困難さがつきまとう。自分なりに頑張っている、その困難さゆえに希望が叶う前に挫折感を感じやすい。そして多くの人たちが新たな道に挫折を感じた時や希望通りにならなかった時、学校や正規の仕事を辞めてしまった過去の自分を責める発言をしているのを、これまでも筆者はよく耳にしていた。この時の友里さんにも同様のことが起きていた。「多くの友人が欲しい」「友達と遊びたい」という希望が叶えられないことで、学校生活が辛くて続けられなかったにも関わらず、続けられない自分を責める発言をしている。そして友里さんが学校に行けない状況にあるということは、裏を返せば、学校に行っている多くの人と遊べないということも意味している。これは友里さんだけの問題ではなく、10代の若者にとって、友達を作る選択肢が学校へ登校する以外にない、またはかなり難しいことを意味している。そのような中、友里さんは「過去の自分が弱くて学校を辞めたから、今も友達ができない」という社会的規範に沿った考え方で苦しんでいたので、「学校に行けること」と「友達が欲しいこと」はニーズとして別なものだということを友里さんに自覚してもらうために上記のような言葉かけを行った。（ニーズの明確化とエンパワーリング）

【人の役に立ちたい】

その後、パンレストランのボランティア活動で、同世代のおしゃべりできる仲間が出来た。また障害を持つ利用者さんをサポートする役割も担うようになった。パンレストランには、利用者として精神障害者の方や知的障害の方もいて、友里さんといろいろ話をしていくとのことだった。週に1回、友里さんがかたつむり学舎に来て、筆者や小論文を担当しているスタッフに、パンレストランであったことや一緒に働いている障害者の人たちとしたいろんな話を聞かせてくれた。また文章をパソコンで作成するかたつむり学舎の仕事があった際に、パソコン入力の得意な友里さんにアルバイトとしてその仕事をお願いした。またバスの乗り方がわからないかたつむり学舎のスタッフや利用者の方へ、バスの乗り方を調べたり教えたりしてくれた。

友里さんとの関わりと同時に、月に1回程度、電話や手紙、面談などで、筆者は母親と

やりとりをしていたが、その中で母親は友里さんの変化を実感する発言をしている。「家でもほとんど私に付きまとわなくなってきた。一人で何か勝手にやっているみたいです」と友里さんとの関わりが以前に比べ楽になった報告があった。友里さんがボランティアに通いだしてから半年後の、同年 12 月のことである。またかたつむり学舎の小論文に関わったスタッフからも「以前は友里さんの猫背がひどかったが、今は背筋が伸びて、顔つきもしっかりして明るくなった」と報告があった。

【自分に合うことをできるだけ長く心地よく続けたい】

その後、パンレストランでのボランティア活動は 2 年近く続けることとなり、友里さんにとって有意義な体験となった。パンレストランでのボランティアが長期に渡り、充実感をもって続けられた秘訣についてインタビュー調査で友里さんに尋ねると、以前から「障害者のサポートをしたいと思っていた」、「事務作業ではなく、接客など話したり動いたりする方が好きだったから」、「やることがあり、困った時は（レストランの）スタッフがどうしたらいいか具体的にアドバイスをくれた」という答えが返ってきた。

以上のことから、友里さんが何らかの活動を社会の中で長く続けていくためには、

- (1) 希望や夢、やりたいことにつながっていること
- (2) 得意な（もしくは好きな）活動であること
- (3) 何をやっていいか分からない時間がないこと
- (4) 友里さんが困っている状況をその場で把握してもらえ、随時、行動面で具体的に、友里さんにとって可能な選択肢を提案してくれる人が傍にいること

が分かった。社会の中で何らかの活動を行おうとする時、まずニーズを明確化してそれに合ったサービス調整を行うのだが、友里さんが常に安心して活動を続けていけるためには、友里さんが活動を行う場に「困った時にいつも相談できる人がいること」が必須となっていたことが分かる。この「いつも相談できる人がいる」というのは、友里さんにとってアドボケイトが必要ない状態であり、かつ友里さんの特性を理解し、権威的でなく、何でも話し合うことができる人が常にいるということである。そのような環境を調整することが、友里さんを常にエンパワーリングしていることとなり、これによって友里さんは 2 年という長い期間、他者と一緒に社会の中で活動することができたのである。このことは、他の「ひきこもり」当事者への支援にも共通するものかもしれない。

【社会の中で人に必要とされたい】

さらに「どういう時に調子がいいか」という話題から、パンレストランのボランティアについて語られたインタビューを以下に紹介する。

——それで、調子がいい時と悪い時について……

人に必要とされてると思っていたらよくて、それがあんまり感じられなくなったら悪くなります。

——人に必要とされてるってどんな感じ？

頼られてるっていうか……、そんな感じ。パン屋さんのボランティアとか、かたつむり学舎の仕事手伝ったりとか……。そういうふうに誰かの役に立つ。それが。

——そうすると調子がいいんだ。

はい。

——それ気づいたのいつごろ？

それは高2でボランティアはじめてから。(中略)

——ボランティアいきはじめて

はい。中2の前も、そんなこと全然感じずに、とりあえず楽しければいいみたいな。

——中2から高2までは？

なんか、そんなん全然。あんまり……。死にたいじゃないけど、なんか、そんな感じ。でも……ずっとたぶん……そう思ってたんで、それが、そうなった感じ。

——ずっと思ってたのはいつぐらいから？

たぶん中2のころ……。心の中にはずっとあったと思います。

芹沢の自己の二重性理論に当てはめて考えると、「人の役に立つ」という社会的自己（する自己）が、存在論的自己（ある自己）を脅かすことなく、その優先性を保てている状態と言えるだろう。自己の二重性について芹沢³⁵は次のように説明している。

社会的自己と存在論的自己という2つの言葉によって人間存在のあり方を把握しようとしている。(中略)「する」は「できる」を含んでいる。他者の比較・評価のま

なごしに介在されるという意味で「する自己」は、社会的自己になる。(中略) またこの「する自己」の価値すなわち役割・位置・重さ・行動などが、自らの判断で決まるのではなく、他者の比較・評価のまなごしによって決められている。(中略)「ある自己」とは「する・しない、できる・できない」ということとまるでかわりなく、「いま・ここに・自分が自分として・存在している」自己のことである。同一性として存在する自己である。

社会的自己が存在論的自己を脅かすことのない場の例として、もう一つ挙げる。かたつむり学舎の以前の利用者が遠方から帰ってきた際に「カレーの集い」をした。「カレーの集い」には、新しくかたつむり学舎に入った利用者也参加しており、スタッフ 4 名、友里さんも含む当事者 3 名の 7 名が集まった。

友里さんは、インタビューの中で「もっとあるといい場所」について次のように話している。

こないだのカレーみたいに、仲間じゃないけど、集まりみたいなのがたくさんあったらなあ…とかいいかなあって思います。

——集える場

はい。

——カレーの集いのどういうところが良かった？

やっぱりなんか、だいたいみんな自分と同じだから。なんとなく分かるというか。何もしゃべらないでも分かり合えるというか。

友里さんのように「ひきこもった」当事者が再び社会へつながるためには、社会的自己が存在論的自己を脅かさない場、つまり「他者のまなごし」による「比較・評価」が「その人の存在を否定しない」と当事者が感じる場が、社会の中に存在する必要があるのではないだろうか。

(7) 大学を受験してみたいと思い立つ

X+1 年 12 月の冬休みには、郵便局のアルバイトを行い、初めて 3 万円稼ぐという体験をした。「友達と一緒にいったのと、2 週間限定というところが良かった。合っていてやりやすかった」と話していた。このアルバイトは友里さんが自分で探してきたものだった。

かたつむり学舎のスタッフと小論文に取り組んでいた友里さんは、X+2 年 1 月に、ある

企業の作文コンクール（一般の部）の応募を自分で見つけてきて、小論文のスタッフに指導してもらいながら応募した。その作品は入賞し、5万円の賞金をもらうことができた。そのコンクールでは会場を設けて表彰式まであったとのことで、友里さんはそのことをかたつむり学舎のスタッフに嬉しそうに話っていた。それを聴いて、筆者やスタッフもみんな喜んで喜んだ。友里さんはコンクールで入賞して冊子に掲載されている作文を見せながら、とても嬉しそうに「自信ができました。お金までもらえて嬉しいです」と話していた。

【大学に進学したい】

同年2月には、ほぼ毎日ボランティアに行けるようになっていた。さらに進路について、「大学進学したい」と言い、京都大学出身のお笑いコンビが京大に入学した経緯を筆者に話してくれた。またその本を読んで影響を受けて、『東大か、京大に行きたい』と家族に言ったら、『行けるわけないだろう』と家族全員に否定された」と、友里さんは怒りつつもしょんぼりして話していた。そこで、筆者が母親に連絡を取り、そのことについて話を聴いたところ、母親は「お笑い芸人になるって言ったり、東大に行くって言ったり。『無理やろう』って言うのと怒るし、もうどうしていいか。私は『あの子の好きにしたらいい』と思っています」とやや困りながら話していた。これまでの経緯から「友里さんは経験しないと納得しない」ということを改めて母親と確認した後、「大学受験のことについて、友里さんと一緒に調べてみますね」と伝え（アドボケイト）、筆者と一緒に本屋の入試コーナーへ行って、入試問題や勉強用の参考書を見た。「これ、全部勉強するの、大変ですね」と受験に対する印象を話していた。また、かたつむり学舎のスタッフと一緒に大学説明会に行った。「まずは、春に模試があるので、入試がどんなものか一度受けてみてから、やれそうだったら一緒に取り組んでいこう」と伝えた。

【勉強を教えてほしい】（エンパワーリング）

同年4月、通信制高校3年になり、模試を受けてみるが、結果は大学受験自体がかなり難しい点数だった。しかし友里さんは「諦めきれない」と言うので、行きたいと思う大学のパンフレットを自分で取り寄せてもらった。その後、「受験勉強をしたいけど、一人では難しいので、勉強を教えてほしい」と希望したため、行きたい大学の入試科目を調べ、筆者やスタッフに教わりながら、入試科目の受験勉強を始めた。どの教科も友里さんにはとても難しかったので、勉強すること自体がストレスになり、受験勉強中はいつもため息を漏らしていた。筆者やスタッフたちもそんな友里さんを見ていて「つらかったらいつでも好きなように変更していいからね」と声をかけながら、勉強を教えていた。友里さん自身もずっと悩んでいて、体調も悪かった。こうして約2ヶ月間受験勉強を続けた後、友里さんと話し合った結果、大学受験を辞めて友里さんが得意なパソコンの専門学校に行くことにした。母親と筆者がその選択について話した時、両親もその選択に安堵したとのことだった。

（８）ボランティアを続けながら、パソコン専門学校に通い始める

パソコンの専門学校は、高校卒業を待たずに 7 月から通えることが分かり、X+2 年 7 月から週 2 日通い始めた。その後、友里さんはパンレストランのボランティアとパソコンの専門学校で忙しくなり、友里さんのやりたいことが軌道に乗ってきたため、同年 8 月をもって、かたつむり学舎の利用を終結することとなった。かたつむり学舎としての利用は終えたが、必要な時にはいつでも相談して良いことを伝え、終了後もメールと電話で相談に応じていた。また、かたつむり学舎でのイベント（忘年会、おはなし会、カレーの集いなど）があるときに、友里さんも参加してくれて会うこともあった。

メールでは「専門学校で、ほかの人みたいにうまく話せません。どうしたらいいですか？」「コミュニケーション力をあげるには、どうしたらいいのでしょうか？」「今日、調子に乗って、よけいなことを言って、人に嫌な思いをさせたかもしれません。どうしたらいいのでしょうか？」など、人間関係に関する相談が多かった。それらの相談に対して、筆者は「うまく話している人のそばにいて、その人がどんなふうに受け答えしているかを見ることがコミュニケーション力アップに役立ちます。うまく話している人の横でこにこ相槌を打ちつつ、感じのいい聞き役をしながら、コツをさぐりましょう」など、具体的にアドバイスをしている。返信後、数日以内に、「あれからなんとかやれています。ありがとうございました」など近況を知らせるメールが届くこともある。

かたつむり学舎を終了した当初は、週に 2、3 回ぐらいの頻度でメールが来ていたが、1 ヶ月後には月に 1 回に減り、2 ヶ月に 1 回、数ヶ月に 1 回、という形で減少していった。

最後にインタビューの中で、友里さんにとって、「筆者はどんな存在か」を尋ねた。

困ったときに頼りになる人。

——困ったときって、どんなとき？

困るっていうか、どうにも動けなくなる感じ。

——お母さんも対応してくれてるよね。お母さんと福崎との違いは？

お母さんは、ん〜……「こうしたらいいよ」って、いう感じだけど、福崎さんは、話し合っていくような感じ。

——お母さんと話しあうのは難しいの？

家族だからか……なかなか話し合いにくい。

家族の関わりは大切であるが、家族がすべてを担えるわけではない。また言葉では表現されない当事者のニーズを明確化し把握することや、そのニーズの裏にある当事者のパワーlessnessな状態に気づくことは専門性を要する。「存在を否定することのない」安心できる相手が、相談しながらニーズを明確化し、エンパワーリングしながら傍にいることの必要性を、友里さんとの関わりから実感した。

8 実践例Ⅱ 橋本敬史さん（仮名）との関わり ―学校と生徒との間―

（１）家族の状況

父親、母親、姉、敬史さんの４人家族。〈父親〉時間が不規則な仕事。日中自宅にいることもある。〈母親〉公務員、家事全般を行なっている。〈姉〉敬史さんの２つ上で、敬史さんが中学３年の時期から、自宅を出て寮生活を始めている。X-2年に姉が不登校になった際、筆者が相談に乗り環境調整をした後、姉の不登校が解消した経緯があり、母親は筆者を知っていた。

（２）敬史さんの状況

「言葉を文字通り受け止め、状況に合わせて適当に行うことができない子①だった」とのことで、母親は「子育てがとても大変だった」と語っていた。性格は、真面目で穏やか。物静かで余計なことは言わないが、尋ねられれば自分の思っていることは率直に言葉にするためか、いじめに遭うことはなかった。地元の公立小学校卒業後、姉の通学していた中高一貫の私立学校へ入学した。小学、中学時代は特に問題はなく、高校もそのまま進級した。

（３）気づかない間に、高校生活がままならなくなっていた時期

【敬史さんの健康状態が心配だが、病院に連れていけない】

X年7月下旬（高1）母親がクリニックに来院し、「どうしたら敬史を診察へ連れてくることができますか？『一緒に病院へ行こう』と言っても『自分は病気ではない』と言って行こうとしません。このままだとずっと寝ないで病気がひどくなってしまいます」と相談された。そして今日こちらへ相談にくるまでの経緯を話された。

高校入学後、敬史さんは、集団宿泊訓練や全校集会、ホームルームなどで高校の先生方から言われた「高校生としての心得」を忠実に守ろうとした結果、睡眠もままならない状況にあり②、最近では奇異な行動が目立つ③ようになったにも関わらず、夏休みの講習を受けるため休まず学校へ行き続けている④とのことだった。高校の先生方が、敬史さんを含めすべての高校生に指導した「高校生としての心得」とは、「1.毎日学校に来ること、2.宿題をすべてやってくるのが学校に来る条件であること、3.宿題などの問題で分からない

ところがあっても答えを見たり人に聞いたりせず自分で考えてやってくること」であった。敬史さんは、出された宿題を毎日取り組み、完全に仕上げて学校へ通っていた。英語の授業では英語の先生から「単語を調べる際、辞書にある最初の日本語訳だけ適当に写すのではなく、他にはどんな使い方をしているのか、いろんな意味を調べたり、調べて分からない表現や日本語については国語辞典をひくようにして学習するよう」言われ、敬史さんも毎回そのようにして予習をしていた。しかしだんだん学習がすすむにつれ、10 個の単語を調べるのに 3 時間近くもかかる①ようになり、母親がノートを覗くと、英語の辞書をそのまま写してもう一冊辞書を作っているかのようにノートにびっしりと書いてあったとのことだった。さらに英語の辞書に出てくる表現の中でわからない言葉については、国語辞典をひき、それも写していて、その作業量は膨大になっていった。また数学の授業では、ある問題を解いてくる宿題がでたのだが、敬史さんは解くことができず固まっていた。それで母親が「分からないところは答えを見なさい」「考えたけど分からなかったと先生に明日いいなさい」などと言ったが敬史さんはその通りにせず、解けない問題を前に何時間もずっと考えていたとのことだった。「宿題をしていかないと学校にいつてはいけない」しかし「学校を休んではいけない」しかし「問題が分からず時間をかけても宿題ができないのでできるまで眠らないで取り組む」という状態を続けていた。

高校が目指す「高校生としての心得」が、敬史さんにとっては上記のような三すくみの状態を生み出し、結果として、宿題ができるまで眠らない毎日を過ごす①ことになってしまっていたのだ。そして敬史さんは自分の“意志”で眠らない日が続けた結果、自宅で人形やぬいぐるみを揉んだり、空笑したり、小声の独語などの奇異な行動がみられる③ようになっていた。

そのような敬史さんに対して母親がどんなに説得しても彼は学校を休もうとせず、また宿題や予習が終わるまで寝ようとしない①ため、母親は敬史さんの身体が心配でならなかったのである。

【この時点でのアセスメント】

以上の情報から、敬史さんの状況を分析し、この時点で敬史さんがパワーlessnessに陥っている状態について明確化したい。

①言葉を文字通り受け止め、状況に合わせて適当に行うことができない

敬史さんは小さな頃から、「言葉を文字通り受け止め、状況に合わせて適当に行うことができない子」だったと母親が語っており、また今回、高校でも「高校生の心得」や、それぞれの授業の先生が言うことを忠実に守り毎日長時間宿題に取り組み続け、母親から見て心配せざるを得ない状況になっても休まず登校を続けるという、同様のエピソードが起きている。このことから、敬史さんは、彼の周りに起こる状況についてフエジーな対応ができない何らかの特徴があった可能性が高い。

②睡眠不足で健康を害する状況だったが、生理的ニーズより規範意識を優先している

母親をエンパワーリングする形で関わっているが、それはそのまま敬史さんの生命維持のための睡眠の確保という生理的ニーズを充足することに影響している。そして敬史さんが抱える一番大きな問題点は、全欲求の底辺となる生理的ニーズが過度に不足しているにも関わらず、それを抑圧せざるを得ないくらい学校の先生に言われたことを優先していることである。ただし、この状態はある特定の先生との間で起こったことではなく、すべての教科の先生との間で起きていることから、おそらくこれまでの小・中学校での学校生活の体験によって培われてきたものだと考えられる。

このことは、学校の先生と彼との間でパワーレスネスの状態に陥っていることを示している。なぜなら、睡眠という自分の生理的ニーズである「したいこと」の充足を抑圧し、学校の先生が指示した従う「べきこと」、つまり規範^{36,37}を自らの欲求より優先する敬史さんの有り様自体が、「パワー、つまり自己のニーズを充足するために他者や社会環境に働きかけている能力」³⁸を上手く使えていないことを意味しているからである。

すなわち「しなければならないこと」は分かるけれど、「したいこと」が分からないといった、規範に従う一方で自らのニーズが明確でない、もしくは規範意識以上に優先されない状態は、パワーレスネスな状態であるということが出来る。「ひきこもり」経験者の多くは規範意識が強く³⁹、そのため自責の念と焦りによって悪循環を起こしている⁴⁰。

また別の見方をすれば、「～しなければならない」という規範意識を超えて、「～したい」と自らのニーズが鮮明になる時、そこにはパワーレスネスな状態の人をエンパワーリングする機会が存在している⁴¹ともいえる。支援にとって当事者ニーズの把握が必要不可欠な所以である。

③奇異な行動がみられる

人形やぬいぐるみを摔んだり、空笑、独語など、統合失調症の様相を呈する状況がみられるが、これは上記②の結果、睡眠不足によって引き起こされたものと思われる。

上記のアセスメントから、母親のニーズに寄り添いつつ、母親へアドボケイトを行うことによって敬史さんの生理的ニーズを明確化し、結果的に敬史さんをエンパワーリングし、サービス調整したいと考えた。それで、筆者は「どんなふうに話したら敬史さんが納得して負担なく来てくれるか」について母親と話し合った。

母親からこれまで語られた敬史さんの特性から、

1. 専門家の意見を強く信じる傾向がある（学校の宿題や授業など学校に関しては学校の先生の指示しか従わない、健康に関しては医師の指示を聞くなど）
2. 思いやりがあり、人のために協力をお願いされたら断らない（姉思い、クラスメイト思いなど）

3. 自分が納得しないことに関しては、親からどんなに言われても言うことをきかない
(敬史さんが納得しなければ、たとえ叩かれても脅されても言うことをきかない)

が浮かびあがった。そこで、まずは母親に「今日、私（母親）が姉のことでクリニックに行ったら、弟の敬史さんにもお姉さんの様子について話を聞きたい」と筆者がお願いしていると伝えてもらった。さらにクリニックに来てもらう日、夏休みの課外を休めるか、事前に母親から担任に打診してもらって、担任から敬史さんに「学校を休んでクリニックに行くこと」を勧めてもらった。また同時に学習に関して「その日休んだ分については配慮するので、敬史さんは心配しなくていい」旨も担任から伝えてもらった。

【敬史さんの健康が心配】（母親のアドボケイト、敬史さんの生理的ニーズの明確化）

【睡眠時間を削っても、課題が終わらない】

翌週、その方法が功を奏し、敬史さんは母親と共に来院した。2ヶ月近く睡眠不足が続いていたせいか、敬史さんは憔悴しきっていた。しかし「学校を休んではいけない」と思っ

てずっと登校を続けていた。
まずは予定通り、敬史さんにお姉さんのことを伺い、いろいろと応えてもらった。ひと通り応えてもらった後、筆者から敬史さんへ今日来てくれたことに感謝を述べ、続けて、敬史さんの顔色や体調が悪そうに見えることを指摘し、思い当たる節があるか尋ねた。敬史さんは、「高校入学後から宿題や予習などに時間がかかり、睡眠時間が少なくなっているからかもしれない」と答えた。しかし「眠れない」のではなく、「やらなければならないことがあるから眠らない」のだと付け足した。「今の敬史さんの健康状態で大丈夫かどうか」せっかくクリニックに来たので、ついでに医師の診察を受けてみるよう促した。その提案に敬史さんが同意したので、同クリニックの医師に筆者からこれまでの経緯と敬史さんの現状や特性を伝えた上で、敬史さんの診察をしてもらった。医師の診断は、睡眠不足とストレスによる「統合失調症疑い」と「広汎性発達障害」だった。（「統合失調症疑い」という診断は1ヶ月後にはなくなった）。それで、このまま睡眠不足が続くと様々な健康被害が起こり、いずれ学校に行きたくても身体の機能が停止して行けなくなる旨を説明してもらい、敬史さんに休養の必要性を伝えてもらった。説明に納得した敬史さんに、医師は休養のための入院を勧め、翌日、近隣の病院へ敬史さんの同意を得て入院となった。入院してからは、ゆっくりと睡眠も取れ、統合失調症様症状も徐々に消失していった。入院1ヶ月後、退院し、自宅でも睡眠が取れるようになった。

【学校に敬史さんへの対応の仕方を説明してほしい】

母親は敬史さんの入院中も、1～2週間に一度のペースで相談に来られ、敬史さんを見守る姿勢を続けていた。

同年9月、退院後すぐ、敬史さんの強い希望で2学期の初日から通常通り登校し始めた。

筆者は学校側に、これまでの経緯や宿題や予習のやり方が独特のため時間がかかり過ぎ睡眠不足となって夏休みに入院したこと、今後授業や宿題、課題を出す際に敬史さんの受け取り方によって過度なものとならないよう事前に配慮してもらいたいこと、入院中に検査した WISC の結果をもとに敬史さんが広汎性発達障害であることが診断されたこと、また広汎性発達障害の特性などを事前にお伝えし、具体的な配慮をお願いした。(アドボケイト)しかし担任の先生は、「学校では敬史さんは通常の生徒と変わりなく、ちゃんとやれていて特に問題ないですよ」という返事が返ってきた。改めてお願いすると「高校は先生が教科によっていろいろ変わりますし、教科ごとの先生のやり方もありますから、全部は把握できませんし、こちらもどこまで出来るか分かりませんが見ておきましょう」との返事だった。この出来事は、筆者が敬史さんのニーズに関してアドボケイトをしようとしたものの、敬史さんの行動に影響を及ぼすことのできる立場である担任の先生が筆者と共通理解を図れず、敬史さんをエンパワーリングするようなサービス調整に至らなかったことを意味している。

そのため2学期10月頃には、また睡眠が取れない日が出始め、2学期後半になると時間割の準備もできなくなった。その様子を見ていた母親が心配して、担任に配慮してもらおうと思い、その都度、敬史さんの自宅での様子を報告していたが、担任は学校での平静な敬史さんの様子をみて、母親の報告を過度なものとし、「お母さん、高校生だから自分で行動させないとダメですよ。何かあったら本人から私(担任)に言うように敬史さんに言って下さい」と担任から母親が注意されたとのことだった。こうして敬史さんをエンパワーリングしていた母親はパワーレスな状態に陥っていった。その結果、敬史さんが宿題をしすぎて睡眠不足にならないようにするための、これまで母親が行ってきた具体的な配慮(学校から宿題が出された場合はどの程度まですればいいのか、分からない時はどこで止めていいのかを敬史に細かく説明してほしい、母親にも同じ内容を FAX で知らせてほしい)や母親の要望が、担任の先生に通りにくくなり、敬史さんは自宅で睡眠不足の日が増えるようになり、母親は困った。

それで母親より筆者に「学校へ出向いて(筆者が)直接説明し、学校側に敬史さんのための配慮をお願いしてほしい」と依頼された。筆者が学校に出向くにあたって、筆者から事前に学校へ連絡し、「このままの状態が続くと近い将来、敬史さんが学校に行けなくなる可能性があるので敬史さんへの特別支援的な配慮について説明したい」と伝え、さらに「担任だけでなく教科や学年など学校全体のことに関わるので、敬史さんに関係される先生方はなるべく同席していただきたい」という旨を伝えた。学校訪問の当日、敬史さんの母親と筆者と一緒に学校に出向くと、管理職、学年主任、担任が同席してくれて話し合いの場をもつことができた。その場で敬史さんの発達障害の特徴を説明し、自宅での困難さ、学校での様子をそれぞれの立場から伺い、母親、学校、筆者の三者で、敬史さんがよりよい学校生活をおくるためにどうすればいいかを話し合った。この時には、前回お願いした宿題に関して各教科担任に敬史さんの特徴を伝達し、宿題が分からなかった場合のことや言

葉かけなど配慮の仕方を職員で共有することが確認された。(アドボケイト、サービス調整)

その後も、母親からの要請があった時には、筆者が学校との調整を随時行っていった。「何も言ってこないし、普通だからどこまで声かけていいのか分からない」と思っている先生方へ、敬史さんへの対応で困っていることを伺い、お母さんが見ている家庭の様子と擦り合わせて、声のかけ方など対応策を練ったり、「お母さんが甘やかすから家で何もできなくなるんじゃないか、本人のペースで納得いくまでやらしていたらいいんじゃないか」など母親の対応について先生方が疑問に感じられる点について筆者から具体的に説明したりした。睡眠不足で余裕がない状態であっても、敬史さんは表情や態度に出ないので、学校でみていると分かりにくいいため、敬史さんの家での状況や感じている困難さを説明した。そして具体的な支援として、各教科から課題のプリントや宿題を出す際は、「ここまでしてもできない時は止めていい」という宿題を止める時の基準を時間の長さで提示してもらうようお願いした。他には、先生が生徒たちに対して、冗談や発破をかける目的などで誇張した表現を使った際には（「この問題解き間違ったら学校辞めないといけんぞ！」など）、授業後、敬史さんと呼んで、その表現が誇大であり本当ではないことをこっそり伝えてほしいとお願いした。また何を真に受けて、敬史さんががんばりすぎるか分からないこともあるので、放課後必ず職員室に呼んで、担任の先生に「今日の学校生活や宿題、課題のことで心配なことはないか」確認してもらうようお願いした。学校も担任の先生も忙しいので、実際、すべてにおいて徹底されることはなかった（パワーレスネス）が、それでも以前よりは配慮ある関わりが、敬史さんに対して増えていった。こうして、徐々に学校生活での混乱は少なくなり、以前より順調に登校することができるようになった。

9月以降、母親とは1週間に一度、相談や電話での連絡を取り合い、敬史さんとは1〜2ヶ月に一度、学校や家庭での生活の様子や居心地について、話をしていた。2学期は、9月初旬までの状況と比べると、睡眠も通常通り取ることができ、穏やかに過ごすことができた様子だった。

【クラスメイトへの対応の仕方が分からない】

X+1年2月、敬史さんから「友人関係の悩み」が語られた。敬史さんの方から筆者に悩みが語られたのは今回が初めてだった。悩みとは、ある生徒に敬史さんが会う度、「この前、なんで学校休んでいたの？」と質問され、なんと応えていいか分からず困っているということだった。黙っていても失礼だと思うが、なんと応えていいか分からないので、その生徒に会うかもしれないと思うと緊張して辛かったとのことだった（パワーレスネス）。しかし、そういうことを親や先生に言うと、その生徒が叱られて嫌な思いをしてはいけないので、誰にも相談できず黙っていたとのことだった。そして「どうなるといいの？」とニーズを聴いたら、『「なんで学校休んでいたの？」と聞かれなくなる」といいと敬史さんは応えた。そこで、その生徒が嫌な思いをせずに、かつ、その生徒が敬史さんへ声をかけないように、筆者が担任にお願いすることを敬史さんに提案したら、敬史さんが同意したので

実施した（サービス調整）。担任の先生がその生徒に上手に対応してくれたことで、それ以降、その生徒が敬史さんに声をかけることはなくなり、「先生が上手く話をして分かってもらったので、その生徒は怒られたりしてないから心配しなくて大丈夫だよ」と担任の先生からも敬史さんに伝えてもらった。

その後、同年 4 月下旬（高校 2 年）までは、登校できていた。母親は 2 週に一回程度の相談を行い、敬史さんは、1～2 ヶ月に 1 度、継続して筆者に会っていた。

【父親に説明してほしい】

【自宅以外に敬史が穏やかに過ごせる場所がほしい】

同年 5 月（高校 2 年）連休明けから敬史さんは休みがちになった。そしてその後、全く学校に行けなくなったことから、進級が懸念され、母親は全日制高校以外の進路（通信制高校や発達障害児対応の高校）を考えるようになった。

また父親は、登校できず自宅にいる敬史さんに対して、「寝過ぎじゃないか」、「学校に行け！」、「将来のことも考えろ」と叱咤激励したり、疲れ果てて休んでいる敬史さんを誘って一緒に山登りや農業をさせようとしたりと、不適切な対応が目立った。父親に叱咤激励される度に、敬史さんは「自分はダメなヤツだなあ」と思ったとのことだった。

日中、母親が仕事で不在の間、「自宅に敬史さんを父親と置いておくのが心配。父親をクリニックへ連れてくるので、筆者より敬史への対応を父親に説明して欲しい」と母親から依頼があり、クリニックにて父親に敬史さんへの理解を促すような説明を行った。（アドボケイト）。

また、母親の要望で、自宅以外に敬史さんが穏やかに日中過ごせる場を探した。しかし敬史さんが暮らす地域はかなり農村部で、高校生対象の公的支援施設がなく、同様の機能を持つ場所も見つからなかった。母親は、発達障害児対象の高校と寮を見つけ、両親で見学にも行ったが、場所が遠方のため敬史さんは行きたがらなかった。

かたつむり学舎利用終了後、当時を振り返って、敬史さんに全日制高校に通っていた時の話をきいた。

高校に行っていたけど、その高校に所属しているという所属感がなかった。自分も形だけはそこに入っているのだけど、自分だけは心の面では、高校の生徒になれてない感じです。それは高校のみんなが悪いとかそういうことではなくて、みんなも自分を排除しようとしてたわけでもなかったんですけど。みんな置き去りにしようと思っていないけど、自分からしたら置き去りにされているみたい。「世界の終り感」を感じていました。

——「世界の終り感」というのはどういう感じ？

未来にも今にも全く希望がもてない。そしてこれから何も楽しいことがないという感じです。楽しくない日常の中でも周りのみんなは笑っている。楽しくないのに、なんでみんなは笑っているのだろうと。自分だけが取り残されて、みんなできるのに、自分だけができない。自分にとっては辛い大変なことも、みんなは何事もないように颯爽としている。とても辛かったけど、みんなが何事もないようにしているのに、自分だけ辛いと言えなくて辛かったし、辛いといえば自分の情け無さを露呈するのでよけい辛いですね。

「弱音を吐けない」「〇〇しなきゃいけない」という言葉がでてくる時点でパワーレスネスな状態にすることが示唆される（規範意識）。つまりニーズが言えないということが、パワーレスネスに陥っていることを意味しているのである。

高校に所属していながらも「所属感がなかった」と敬史さんは感じていた。所属感とは、学校という社会の中で誰かと何かを共有することで生まれる体験を伴う現実感である。誰とも何も共有できないために高校にいても現実感がなく、「私」というものが成立しなかったと敬史さんは語っている。この敬史さんの語りは、「自己」から出発しても構築することのできない「世界」があることを表している。さらにその状況について、「辛いこと」を「辛い」と言えない社会、「辛い」と言っても、共感できる他者がいない社会に、自分が身を置いていることを、敬史さんは語っている。

芹沢（2011）は、存在論的自己が脅かされる時、「しっかりとひきこもらなかったら、精神疾患になる」ことを示唆している。実際、「高校を辞めたい」とも、「行きたくない」とも言わず、学校という「行かなければならない場所」に行き続けた結果、敬史さんは、統合失調症用の症状を呈して、入院せざるを得ない状況となった。

（４）居場所としてのかたつむり学舎と、通信制高校への転校

筆者はこれまでの敬史さんとの関わりの中で、個人や家族の変容を目指すカウンセリングよりも、個人と環境との間を調整したり、個人に合う環境を用意したりするような「かたつむり学舎」として関わっていった方がより効果的であるだろうと考えるようになっていた。

そのような中、同年 6 月中旬、「所属している限りは学校に行かなくてはいけない。けれど行けない」ということで、敬史さんは自宅にいても休めずにいた。しかし、学校を退学したとしても、この先どうするかというプランが何も立っておらず、十分な環境もエネルギーもまだなかった。そこで具体的な方向性が決まるまで、敬史さんが休める形で保留する方法として、全日制高校を休学することにし手続きを取った。また日中、学校の代わりに通う居場所として、かたつむり学舎に週に 2、3 回通うようになった（環境調整）。かたつむり学舎では、本人と話し合って、スタッフに勉強を教えてもらうことになった。

【敬史さんに合った学校に行ってもらいたい】

同年7月下旬、再び、発達障害児対象の高校へ母親と敬史さんが見学にいった。しかし、前回同様、遠方だという理由で、入学は希望しなかった。敬史さんは休学している高校を辞めることに強い自責の念を語っていたので、「今行っている高校が敬史に合わなかったから、合う高校へ転校するのよ」と母親が敬史さんを説得し、同年9月、自分のペースで学習することのできる幾つかの通信科の中から、一番進級が容易な通信科へ転校した。かたつむり学舎では、通信制の課題をスタッフと一緒に行っていった。

全日制高校を辞めた時期のことについて、当時を振り返って以下のように語っている。

———全日制高校の居心地がよくなるために

自分からもっと意見を言えればいい。意見を言えればいいんでしょうけど、そしたらちょっとは変わる。でも意見をいうということは、情けない自分を見せることになるので、それがつらいですね。だから言えませんね。（ラジオ番組を聞いていて、その中では）「生徒（リスナー）が幸せになるなら、逃げてもいい」って言っていました。（全日制）高校辞める時、自分はこんなくだらなことで、なんで学校やめたんだろうって。でも実は重要なことなんですけど。でも逃げちゃって大丈夫かなと思いました。他の人達は何事もないように高校へ通い、颯爽としているのに、同じことが自分にはできない。できない自分は情けないと思っていました。

※（ ）は筆者補足。

学校を辞めることが、存在論的自己にとって重要なことだと気づきながらも、社会的規範に沿わないことに対して心配になっている様子が伺える。そして敬史さんが好きなラジオ番組の言葉によって、学校を辞めてしまった自己が支えられていた様子も語られている。

【敬史さんを一緒に見守ってほしい】

全日制高校から通信制に転校したことで、ようやく自宅にいても休める状態となり、これまでの疲れがどっとでたのか、同年10月にはかたつむり学舎にも来ることができなくなり、自宅から全く出る元気がなくなった。通信制に転校して、通信制の課題が敬史さんのもとにたくさん送られてきたが、とても課題ができるような状態ではなかったので、「それはいつやってもいいよ」と筆者が敬史さんに伝えて、ゆっくり休んでもらった。その後、半年近くほとんど外出しない日が続いた。その間、母親から様子を伺いながら、かたつむり学舎のスタッフや筆者が、本人の了承を得て、時々短時間、自宅へ顔を見に行ったり、電話で話をしたりした。自宅ではほとんど横になって寝ていたとのことで、充電している

ような様子だった。

同年 12 月末頃、通信制高校のスクーリングに、母親と行くことができた。しかし、まだ敬史さんは定期的に人に会うエネルギーがない状態だったので、母親と電話で連絡を取り合って、敬史さんの生活の様子を伝えてもらったり、父親への対応や敬史さんの今後のことなど、母親の心配ごとについて随時相談に応じたりしていた。

同 10 月から X+2 年 2 月頃までは、夜早く寝ても朝 10 時くらいまで起きることができなかった敬史さんだったが、同年 3 月になると、好きな TV を観るために毎朝 7 時に起きてくるようになり、リビングで過ごすことが増え、自宅から出かけて姉の引越しの手伝いをするなど少しずつ動きがでてきた。

（５）様々な体験を試みた時期

【敬史さんに関わり続けてほしい】（エンパワーリング）

X+2 年 4 月（高校 3 年）、これまでゆっくり休んだのがよかったようで「少しずつ元気が出てきたようだ」と母親から報告があり、敬史さんと久しぶりに電話で話すことができた。敬史さんは「人と会う元気がでてきた」とのことで、敬史さんに「自宅に行ってもよいか」を毎回確認して、週に 1 回かたつむり学舎のスタッフや筆者が、家庭学習サポートとして自宅に行って一緒に学習をしたり、敬史さんの好きなオセロをしたり、話をしたりした。敬史さんから積極的に来てほしいという依頼はなかったが、「来る回数が増えても構わない」とのことだったので、母親の依頼で、次第に自宅訪問の回数を増やしていった。

敬史さんは同年 4 月から聴き始めた「school of lock」というラジオ番組をととても気に入っている、と楽しそうに話すようになった。「自分は school of lock の生徒だ」と言い、ラジオ番組内の「学校」への所属感を話していた。敬史さんによって語られるラジオ番組の「学校」では、「生徒」想いの「先生」が登場し、「先生」は「生徒」の悩みに絶えず耳を傾け、「先生」役のお笑い芸人たちが社会規範を笑いに変え、「生徒たち」を絶えず応援している。このラジオ番組によって、敬史さんの中で、「行かなければいけない、辛い学校」から「自分に合う、楽しい学校」へと、これまでの学校に対する価値を相対化させていったのではないかと筆者は考えた。

【やりたいことはないが、退屈】（エンパワーリング）

同年 8 月、元気はあり、体調は本調子とのことなので「どう過ごしたい？」と敬史さんに尋ねると、「これまではやらなければいけないことをしてきた。やらなければいけないことがなくなって、毎日することがなく退屈だが、やりたいことは特にない。退屈はしているが、それも寝ていればいいので大丈夫です」とのことだった。母親は「このまま寝ていても何も変わらない気がする」と話し、「どう思う？」と敬史さんに尋ねると、敬史さんも「このまま寝ていてもずっとこのままだと思います」と答えた。

そこで「こちらからいろんなことを提案するので、やりたくないことでなければ、やっ

てみよう。無理強いはしないし、途中で変更してもいい」と伝えて、敬史さんから了承を得た。このように提案したのは「やりたいこと」を見つけるには、様々な活動を体験することが必要だと考えたからである。このことについて、**Skinner** は「直接的体験による随伴性が人を正しい方向（生命にとって良い方向）へ導く」と述べ、**Kolenberg** もその著書の中で直接的体験を勧めている⁴²。

具体的には、かたつむり学舎で通信制のレポート課題をしたり、英語や数学、論文の学習をしたりした。かたつむり学舎のスタッフと勉強したり対話したり出かけたりしながら、これまで感じたことやこれからのことを話していった。また週に 1 回、農的な体験（稲刈り、柚子搾り、種取りなど）を行っていった。他には、陶芸をしたり、美術館へ絵を見に行ったり、温泉に行ったり、図書館で調べ学習をしたり、文学記念館へいたり、環境活動のワークショップに参加したり、調理実習をしたりした。

活動に関しては、筆者のネットワークの中でできること、思いつくことは何でも取り入れていった。基本的には、より多くの直接的な体験をすることを目的に活動を提案していった。提案した活動に関して、敬史さんがやりたがらなかったものとしては、保育園や高齢者施設での子どもや高齢者に関わるボランティア活動、販売のアシスタントなど、対人援助や接客を必要とする体験だった。これらは紹介してもやりたがらなかった。

農的な体験や陶芸の体験、環境活動のワークショップに関しては、筆者やかたつむり学舎のスタッフ以外の方が敬史さんと関わった。敬史さんの特徴を分かってくれて、押し付けずに穏やかに関わってくれる人で、これまでも筆者と交流があり、農的暮らしや陶芸、環境活動などそれぞれの分野の活動に誇りを持ち、その活動が大好きな人たちをお願いをした。調理実習に関しては、かたつむり学舎のいろんなスタッフと一緒にいたり、かたつむり学舎の他のメンバーと一緒にいたりして、楽しい時を過ごした。正しい料理の作り方を学ぶというよりは、人それぞれいろんなやり方や教え方があって、それぞれの味があることを経験してもらうことを意図して取り入れた。

また論文や調べ学習では、敬史さんが興味を持っているお笑いコンビの取り組みやラジオ番組について調べ、自分の意見を述べていった。

また同時に、自宅でも家事を敬史さんが手伝えるよう、母親に協力をお願いした。そうしてこれまでしたことなかった味噌汁を作ったり、洗濯をしたりすることが敬史さんの自宅での活動として日常的になっていった。

そのような中、同年秋頃には、「どうしたら人に興味が持てるか」「どうすれば人と上手くつきあえるか」と、敬史さんの方から筆者に尋ねてくるという変化が起こった。

（6）この先何をしたいのか体験して考えた時期

【これからどうしていきたいかわからない】（エンパワーリング）

同年 10 月、この先の生き方として、敬史さんは「どうしていくのがいいのか、自分は何がしたいのか決まらない」とのことだった。一般的な時期としては、高校 3 年生も残りわ

ずかとなって、多くの高校生が自分の人生の進路に向けて何かしら決断する時期なのだろうが、敬史さんの人生の時間には、まだその時期が来てないと言っているのだと筆者は解釈した。そこで、高校卒業してから自分のやりたいことが決まるまでの間、どんなふうに過ごしていくかということについて、かたつむり学舎や保護者の印象、希望、これまでの体験をもとにいろいろと提案し、敬史さんが嫌でないものはまず体験して、自分に合いそうか何となくでよいので将来とつながりそうかどうか体験を重ねていくことにした。

敬史さんは母親に対して反発はなかったが、母親が「今後の進路についてどう感じているか」と尋ねても、「さあね」と言って、自分の考えていることや感じていることをほとんど言うことがなかった。母親は、何を考えているのだろうと不安になったり、先に進むためにどうしたらいいか心配になったりしていた。そこで、かたつむり学舎で敬史さんから聞いたことを敬史さんの了承を得て、随時母親に伝えていった。

X+3年1月、母親には、以前見学した発達障害児の寮制の大学も選択肢にあったが、敬史さんが希望しなかった。これまで敬史さんは自分のお小遣いを全く使わず、洋服や靴なども欲しがらず、自然災害に遭った人に寄付したり、お小遣いの値上げを要求する姉に「僕使わないから」とあげたりするような人だった。それで、敬史さんのような欲のない人は、禅の僧侶に向くのではないかと思い、敬史さんに提案し、どのような事情でも受け入れてもらえ徳のある和尚さんを筆者が探し、禅寺に2週間ほど修行にいった。さらにそのお寺のご縁で、お寺の近くの別な一般大学を受験することとなり合格したが、敬史さんは「自分のような何も受験勉強してない者が合格して通っては申し訳ない」と、この大学には行かなかった。禅寺で一緒に過ごしたお坊さんたちから「敬史さんは僧侶に向いている」と歓迎されていたが、2週間の修行後、敬史さんは「自分はやっていけそうにない」と継続することを希望しなかった。

母親は「敬史さんが家にいると、つい私も世話を焼いてしまうし、父親は叱咤激励して口を出してしまうので、できれば敬史が家から出られるような場所がよい」と希望があり、敬史さんも「同じ県であれば家から出ても構わない」とのことだったので、同じ県内にあり、寮制で、将来何かをやっていく前の準備をしていくような場所を筆者が探したところ、NPO 法人が若者自立支援として運営しているところが見つかった。まず筆者が見学に行き、その団体の代表者と敬史さんのことについて話した。そこには小学生高学年から20歳くらいまでの若者が男性のみで10数名生活しており、不登校経験者や対人関係が苦手な発達障害、将来どうしていくか決まらない若者が既に利用しているとのことだった。

みんな家族のように和気あいあいと生活していて、代表者がお父さんのような役割をされていて、10数名がその代表者の子どもたちのような関係性だった。多くの利用者は、1年でその場所を去って、大学進学や就職など社会の中で自分のやりたいことを見つけていくとのことだった。生活の中で行うことは、基礎的な学習と体力をつけるような様々な運動、マラソン大会やボランティアなどの地域活動への参加、そして生活的自立のための全般的な活動だった。食事は数人が当番制でみんなの分を作り、難しい料理は代表者が作っ

たりしていた。また何かトラブルがあると代表者が話を聞いて調整したり、他の職員が相談に応じたりしていた。筆者が見てきたものや写真に撮ったものを見せながら、敬史さんに説明し体験してみるかどうか相談したら、体験してみるとのことで、1週間その寮に体験入所することとなった。体験から帰ってきて、敬史さんに「どうだったか」尋ねたら、「みなさんいい人だったけど、ちょっと全体的に体育会系で自分には合わない」とのことだったので、利用をしなかった。

そしてまた他の選択肢を探し、遠方ではあったが筆者の知り合いで徒弟制度を行っている馬の牧場があり、同年2月、筆者は事前にその牧場へ見学に行った。その代表の人と話す機会を得て、敬史さんのこれまでの状況を伝え、敬史さんのような若者が馬の牧場でどのように変化していくのか、その方の経験をもとに教えていただいた。

これまでその牧場では、不登校で昼夜逆転している中学生や、将来を決められない10代から20代の若者などを預かって、一緒に生活して馬の世話をする中で、生活のリズムを取り戻したり、自分のやりたいことを見つけたり、発達障害や知的障害を持つ人のコミュニケーションの質がより良い方向へ変化したりする経験を持っていた。また馬に乗ることや馬の世話をすることが発達障害自体へのアプローチとしても有効であり、感覚統合を発達させる機能を持っていることも教えていただいた。そして日々の活動は馬に合わせる必要があるものの基本的にゆっくりで、特にこなさなければならないカリキュラムもなく、自分のできるペースでやっていくようになっていた。

それで敬史さんにも合うかもしれないと筆者が思い、同年3月、写真やインターネットで馬の牧場の状況や一日の様子、代表者の人との話を敬史さんと母親に伝えた。敬史さんは「牧場が遠方であること」で気乗りしなかったが、「やめてもいいのでとりあえず体験に试试看ませんか」と勧めると「行ってみる」と言い、道中は母親と一緒にいき、その馬の牧場へは敬史さん一人で1週間体験に行き、帰りは一人で帰ってきた。

1月から3月までの間に、「高校卒業後どこでどのように過ごしていくか」という試みの中で、敬史さんの家庭での行動が少しずつ変化していった。具体的な行動の変化としては、敬史さんが子どもの頃からずっと部屋に飾っていたぬいぐるみを全部自分で処分したり、「これからは『敬史ちゃん』じゃなくて、『敬史』、もしくは『敬史さん』と呼んでくれ」と母親にお願いしたり、馬の牧場の体験から帰ってきた後は、これまで「嫌いだから食べない」と言っていた食べ物を食べるようになったりしていると母親から報告があった。母親の印象としては、敬史さんが「自分を大人として扱って欲しい」というメッセージを感じるとのことで、母親もそのようにしようと心がけているとのことだった。

さらに敬史さんの変化は家庭の中だけに留まらず、かたつむり学舎での筆者やスタッフとのやり取りの中でもみられた。以前は、こちらから敬史さんに話しかけた時、それに敬史さんが応えるということが多く、話が盛り上がることはほとんどなく、敬史さんと一緒にいても、「敬史さんは楽しいのかな?」「話題や状況に退屈してるんじゃないかな?」と思うことが多々あった。しかし、この時期には、敬史さんの会話の仕方にも変化が見られ、

敬史さんからこちらの興味を質問してくれたり、敬史さんが事前に知り得たこちらの興味に関連する情報を、次回逢ったときに提供するような話し方をしたりすることが増えていった。そのような敬史さんのコミュニケーションの変化によって、筆者を含め、かたつむり学舎のスタッフたちは、敬史さんと一緒にいて以前にも増して楽しいと感じるようになった。

さらに高校卒業間近の3月には、「友達が欲しいです。どうしたらいいですか？」と筆者に尋ねることがあった。敬史さんにとって、「友達とはどういう人か」「友達ができたら一緒に何をしたいか」などを尋ねた。敬史さんにとって、「友達」とは何なのか、どういうことを期待して友達が欲しいと言っているのか、それによってどんな場所に行ってどんな体験をどんな人たちとすればいいか知る手がかりになると思ったからである。まずは、他の人たちの「友達に関する体験」について敬史さんが共有することから始めることで「友達が欲しい時、どうしたらいいか」を敬史さんが見つけていく手がかりになればと伝え、「他の人はどうやって友達になるか聞いてみよう」と提案した。

また筆者やスタッフの人となりや生き方にも興味を持ち、「***さんは、小さい頃どんな子だったんですか？」「どうしてカウンセラーになったんですか？」など、これまでにない話題が増えていった。敬史さんが、一緒にいる人に興味を持っている様子が伝わってくる言動が増えており、かたつむり学舎の集いや新しい場所で知り合う人たちと会話を重ねる中で友達ができることを望んでいた。

同年4月、これまでの体験をふまえて、今後どうするか検討してきたが、敬史さんは、この時点でも具体的にしたいことは特になかった。しかし、これから何かするならば、ゆっくりと自分のペースに合わせて関わってくれる人との活動を希望していた。そして何かしら活動をしていきながら、親元を離れて生活的な自立も試みたいと考えていた。同様に、敬史さんの両親も、敬史さんが親亡き後もいろんな人と関係を持ちながら自立して生活していけるような準備となる活動がこれからできたらいいと希望していた。それは一般の大学生活では難しいだろうと考えていたし、いきなりアルバイトや就労でもうまくいかないだろうと予想していて、敬史さんも同じように考えていた。

これまでのことを振り返り、敬史さんと話し合い、馬の牧場が敬史さんの希望する条件に一番合っているのではないかということになった。それで同年5月から自宅を出て、馬の牧場へ行くことになった。

最初の2ヶ月間は、1～2週間に1度、筆者やかたつむり学舎のスタッフに「牧場での仕事ができないことで、みんなに迷惑をかけているから辞めたい」と電話がかかってくるため、その都度その内容を牧場の担当者に伝え、対応してもらった。しかし、その後は敬史さんから電話もなく、順調に過ごしている。牧場の担当者からも「少しずつ馴染んできているようだ」と連絡があった。

同年9月、長期休みで自宅に帰ってきた際、「かたつむり学舎に来たい」と筆者に連絡が

あったため、かたつむり学舎のスタッフや敬史さんが様々な体験をする中で関わった方々、かたつむり学舎の参加者に呼びかけ、「カレーの集い」を企画した。敬史さんは、台所でお土産の果物を切って、皆にふるまってくれた。その時の敬史さんの果物を持つ手を見て、以前、農的な体験と一緒にしていたスタッフが、「敬史さん、良い手してるね」と言った。敬史さんも嬉しそうに「そうですか」と言った。毎日、外で馬の世話をしている敬史さんの手は、以前の手に比べ、日に焼けて厚みのあるしっかりした手になっていた。

敬史さんが切り分けてくれた果物を食べながら、馬の乗り方や世話の仕方など、敬史さんが体験したことについてみんなからも沢山質問があり、そこから連想が広がり思い思いのおしゃべりをして 3 時間ほど楽しい時間を過ごした。その後、敬史さんが自宅に帰省する度に、かたつむり学舎では「カレーの集い」を開いている。

X+6 年 12 月現在、敬史さんは、徒弟制度のもと、馬の牧場でそこで働くスタッフやその家族の人たちと寝食をともにしつつ、時にスタッフの子守りをしたり遊んだりしながら、自分のペースでゆっくりと仕事を続けている。

9 「かたつむり学舎」の実践とパワー交互作用モデル

(1) パワー交互作用モデルによる「かたつむり学舎」実践の考察

本研究では、「かたつむり学舎」で関わった山川友里さん、橋本敬史さんの実践を、パワー交互作用モデルによって分析した。その結果、「かたつむり学舎」による「ひきこもり」支援は、パワー交互作用モデルによって説明することができた。また、パワー交互作用モデルはソーシャルワークのモデルであることから、「かたつむり学舎」で行っている支援はソーシャルワークであることが証明された。以上のことから、「ひきこもり」支援についてもパワー交互作用モデルによるソーシャルワークが有効であることが明らかになった。

「ひきこもり」支援は、当事者がパワーレスネスな状態に陥っている時に行われるが、このパワーレスネスな状態は、当事者ニーズが充足されないことで、当事者に何らかの不快または不都合な出来事が起こるところから始まっている。そしてこの不快または不都合な出来事の出現によって、家族、支援者など当事者と関わる人々は、当事者がパワーレスネスな状態に陥っていることを認識する。

「かたつむり学舎」の実践では、日常に起こる様々な出来事の中から、当事者や家族がパワーレスネスな状態に陥っていることに気づき、ニーズを把握し、そこに関わるところから支援を始めていった。パワー交互作用モデルにおけるソーシャルワークでは、状況分析、ニーズ把握、アドボカシー、エンパワーリング、サービス調整を行っていくが、「かたつむり学舎」の実践を見て分かるとおり、それらは階段上に一つ一つステップを上がっていくようなものではなく、状況分析、ニーズ把握、アドボカシー、エンパワーリング、サービス調整といった、ある一つのソーシャルワーク活動を行うごとに、他のソーシャルワーク活動（状況分析、ニーズ把握、アドボカシー、エンパワーリング、サービス調整）に

も影響を及ぼす流動的なものである。それはマクロな視点から眺めると、当事者ニーズという軸を中心に据えて、他のソーシャルワーク活動がその周りを螺旋状に回りながら進んでいくといったような性質のものである。

例えば、ニーズ把握をするための相談が当事者をエンパワーリングすることもあるし、サービス調整を行った結果、これまで気付かなかった潜在的なニーズが顕在化することもある。またアドボカシーがサービス調整の一端を担い、エンパワーリングするためにアドボケイトすることもある。そして当事者はエンパワーリングされればされるほど、自分に自信を持ち、自分の感覚や欲求、考えをより肯定的に捉えるようになり「〇〇をしたい」という新たな当事者ニーズが生まれやすくなっていく。さらに一つの支援の中に、複数のソーシャルワーク活動（状況分析、ニーズ把握、アドボカシー、エンパワーリング、サービス調整）が含まれる場合もある。

以上、筆者⁴³がまとめた「かたつむり学舎」での支援の8つのポイントをパワー交相互作用によるソーシャルワークという視点で改めて表現すると、「1.家族と絶えず連携」することは、「ひきこもり」当事者と共に暮らし彼らの生活を支えている家族を支え、家族と協働することで、「ひきこもり」当事者のニーズを充たすサービス調整をより円滑にする効果がある。また「2.家族以外の他者が当事者と関わる」ことは、「ひきこもり」当事者のニーズに添う中で、家族が担うことのできない役割や関わり方を家族以外の支援者が行う必要性を述べている。

次に「3.彼らの存在を全肯定し」とは、当事者・家族に「問題がある」とみなさないソーシャルワークの視点をさし、「4.社会的規範に囚われることなく」とは、「就労」「対人関係」など支援者がゴールや目標を設定しないことを意味している。また「5.対話しながら当事者が行動を決定し」とは、当事者からニーズを聞くことの重要性と、当事者が潜在的なニーズしか持ち得ない時にそれを顕在化させるための手段の一つとして、多くの選択肢を提示し、当事者に決定してもらうことである。さらに「6.決めたことを実行できるように援助し」とは、当事者のやりたいことをできるようにサポートすること、つまりそのための家族や周囲、社会へのアドボケイト、エンパワーリング、サービス調整をさす。

「7.状況に応じていつでも変更・調整し」とは、当事者ニーズに添うことをさす。当事者ニーズに添うとは、当事者の気持ちや状況の変化に柔軟に対応することであるので、一度決めたことでも変更はいつでも可能な状況を絶えず整えることである。そして「8.やりたいこととできることが重なる選択肢を社会の中に探したり創ったりしていった」というのは、サービス調整後の状態を指し、当事者のニーズを出発点としてソーシャルワークが動き、社会へのアドボケイトやサービス調整の結果、既存の社会にはなかったオルタナティブな環境が生まれることを意味している。このオルタナティブな試みは、「当事者のニーズを叶える場がないなら作ろう」という「ひきこもり」当事者の居場所支援や、わたげの会などでも見られ、その活動には終わりなどなく、当事者の数だけ多様に社会の中に創られていくべきものである。

実践例Ⅰは「社会とのあいだ」、実践例Ⅱは「学校とのあいだ」を生きる当事者が難渋する時、そこにパワー交互作用によるソーシャルワークを行うことによって、当事者ニーズに添った支援が可能であることを明らかにした。

（２）「かたつむり学舎」の実践にみる「ひきこもり」支援の課題の解消

また、このモデルの支援は第１章で述べた３つの「ひきこもり支援の課題」の解答も導き出している。１つ目の課題は「支援機関の連携・ネットワーク構築」であったが、全ての機関同士が連携しなくても、「かたつむり学舎」が必要な機関と連携することで、その問題は解消された。鈴木⁴⁴は、「様々なリソースを活かしてケースを成功させていくには、ケース全体を見通し、流れや変化を把握しながら、本人の意志に添った援助が受けられるよう、アセスメントをし、全体をマネジメントすることのできる、いわば中心機関が必要となる」と述べているが、まさにそれを「かたつむり学舎」が実践したことになる。

２つ目の課題は「支援の不足・ミスマッチ」であった。この課題は「支援が不足している」ことに加えて、「何が不足しているかが不明確である」ことも課題となっていた。しかし、「ひきこもり」当事者のニーズや家族のニーズを聞くことで、その時点で「ひきこもり」当事者や家族が求めている支援が明確になり、そのニーズに応じるソーシャルワーク実践を行うことで、支援の不足を補うことができた。

３つ目の課題は、「支援目標」について、である。これは２つ目の「支援の不足・ミスマッチ」の課題とも関連している。「支援目標」を支援者側が決めてしまっているため、その目標に応じた支援しか行われなくなってしまう。そのため、家族や「ひきこもり」当事者が他の支援を求めても、そのニーズに応えられる支援を提供できないのである。しかし、この課題についても支援者側が支援目標を定めることなく、家族や「ひきこもり」当事者から出てくるニーズに対しての支援を一つ一つ積み重ねていくことで、「ひきこもり」当事者は生き生きとしてきた。そして「ひきこもり」当事者から「こうなりたい」という目標が出てくるようになり、その目標が達成された時点で「支援の終結」を自然に迎えることができた。

以上のように、パワー交互作用モデルによるソーシャルワーク実践を行うことで、現在のひきこもり支援で「課題」とされていることを全て解決することができる可能性が示唆された。

（３）「かたつむり学舎」の実践にみる「ひきこもり」当事者のニーズ

「ひきこもり」当事者のニーズ把握の重要性、及びニーズについては第２章２、３で述べたが、改めてここで実践例を通して、「ひきこもり」当事者のニーズについて考察したい。

まずは当事者のニーズという視点から、芹沢の論について考察する。芹沢は人間存在のあり方を社会的自己と存在論的自己という２つの言葉によって表し、社会的自己を「する自己」、存在論的自己を「ある自己」と説明している（第２章７（６））。当事者ニーズの視点

から、社会的自己「する自己」、存在論的自己「ある自己」を把握するならば、社会的自己「する自己」は、承認のニーズと自己実現のニーズに関連し、そして存在論的自己「ある自己」は、生理的ニーズと安全のニーズに関連している。また帰属のニーズについては、帰属している場所がありのままの自分であることのできる居場所として機能している時、存在論的自己「ある自己」と繋がり、またその帰属場所が役割や身分の保障、義務や責任を伴うものとして機能している時、社会的自己「する自己」と繋がっているとみることができる。

芹沢はその著書「引きこもるという情熱」の中で、「社会的自己からの撤退を果たした上で、正しくひきこもる」ことを勧めており、これは「社会規範」から外れていることを強く責める社会的風潮へのアンチテーゼとしては機能しており、「ひきこもり」当事者の苦しみをこれ以上拡大させないための「ひきこもり」状態そのものに対する肯定が提案されていると捉えることができる。しかし当事者のニーズという視点からみると、この提案もまた不十分であることが分かる。なぜなら「ひきこもる」のか「ひきこもらない（学校や職場などパワースナな状態が起こっている場所に居続ける）」のかという、一次元のパラダイム上の議論に留まっているからである。これでは「ひきこもり」当事者が、「ひきこもり」状態の是非をめぐって究極の選択を迫られている構造を超えることはできない。「今いる場所からひきこもる」のか、「今いる場所に居続ける」または「既存の別の場所に行かせる」のか、といった他者や社会から与えられた二択の選択肢の中から選択させることを止め、当事者のニーズを出発点にした選択肢を探すという新たなパラダイムでの議論をここに展開したい。

実践を通して、「ひきこもり」当事者のニーズは、マズローの欲求階層論に添うことが分かったが、ニーズの中には潜在的なものと顕在的なものがあり、潜在的なニーズは、相談を通してエンパワーリングしていく中で言語化され顕在化されていくプロセスがあることが示唆された。しかしここで疑問が残る。そもそも潜在的なニーズがありながら、それが顕在化されていないのはなぜだろうか。

一つには、「ひきこもり」当事者が望むサービスが社会の中になからだと言える。「ひきこもり」当事者が「〇〇したい」というためには、「社会には〇〇がある（もしくは、〇〇をする可能性がある）」という認識を「ひきこもり」当事者自身が持っている必要がある。社会に「ひきこもり」当事者の望む選択肢があると、ニーズはより顕在化しやすくなるのである。

二つには、多様な選択肢があることを「ひきこもり」当事者が知らないからである。多様な選択肢が社会の中に存在していたとしても、そのことを当事者が知らなければ、ないのと同じである。ここにも啓発の必要性が求められる。

三つには、多くの「ひきこもり」当事者の傾向として、彼ら自身が「社会規範」と相反するニーズを持つことを抑圧されているからである。実践例Ⅱの敬史さんは、生理的ニーズでさえも気づけないほど、「社会規範」によってニーズが抑圧されていた。つまり「社会

規範」に従順であればあるほど、「社会規範」と相反するニーズが顕在化しにくいということである。社会の中で人と調和して生活するための「社会規範」によって、自らのニーズが顕在化できなくなり、逆に社会の中で生活していけなくなっているという逆説的な事態が起こっているのである。以上、当事者ニーズが顕在化しにくい三つの環境要因をふまえ、当事者のニーズがより顕在化しやすくなるよう、どのような生き方も肯定される社会を構築していかなければならない。

（４）「かたつむり学舎」の課題

上記の課題を意識してもなお、「かたつむり学舎」におけるすべての実践が万全であるわけではない。そこには筆者のネットワークを超える当事者からのニーズがでて、ネットワーク構築まで時間がかかり、良いタイミングで当事者のニーズに応えられないこともあったり、筆者を含めスタッフの理解不足による当事者や家族との支援目標に関する齟齬が生じ、何度も話し合いをしたが上手く対応しきれないこともあった。また「かたつむり学舎」を利用するための費用は、全額家族に負担して頂いているので、経済的理由で利用が制限されるケースもあった。

ネットワーク構築については、「かたつむり学舎」が閉ざされた活動体として動くのではなく、今後、実践を「ひきこもり」支援や社会福祉的なフィールドに限定せず、様々な場で発信していく方向性が必要と考えている。また理解不足を解消するためには、一対一だけの関わりではなく、スタッフミーティングを頻繁に行い絶えず多面的な視点で当事者と関わることが必要と考えている。経済的な負担に関しては、現存する公的な福祉サービスとの重なりを見つけ、少しでも負担が少なくなるような方向を模索していきたい。これらの課題を踏まえつつ、今後も当事者ニーズを中心とした支援を行っていきたいと考えている。

第3章 「ひきこもり」経験者へのインタビュー調査に向けて

1 インタビュー調査の目的

第2章で、「かたつむり学舎」で支援した実践例Ⅰ、Ⅱともに、「ひきこもり」以前からパワーレスネスな状態に陥っていたことが判明した。このような状態は、「かたつむり学舎」の実践例に限ったことなのであろうか。それとも「ひきこもり」当事者の多くが「ひきこもり」以前からパワーレスネスな状態に陥っているのであろうか。

そこで第3章、第4章では、4名の「ひきこもり」経験者にインタビュー調査を行った。そして「ひきこもり」経験者たちが人生のどの時点でパワーレスネスな状態に陥っていたのか、またその時、適切な支援を受けられたかどうか、パワーレスネスな状態と「ひきこもり」状態との関係性について明らかにすること、及び、パワーレスネスな状態を改善するための支援を行うとすれば、どのような支援が必要であったのかを検討していくことを目的とした。

2 インタビュー調査概要

本論文における「ひきこもり」経験者とは、A市の若者支援施設に「ひきこもり」として相談に来ている（または利用したことがある）方で、自らを「ひきこもり」である（または、「ひきこもり」だった）と認識している人をさす。

「ひきこもり」始めた時期に、義務教育や高等学校等で学校へ所属していた場合は、一般的に「不登校」とカテゴライズされることが多いが、本論文では、状態像としての共通性と厚生労働省の「ガイドライン」に基づき、「不登校」時期も「ひきこもり」時期と分類し明記した。

3 インタビュー調査研究の方法

インタビューは、「ひきこもり」経験者でインタビューの同意が確認された4名に行った。インタビューの長さは個人差があるものの約60～120分である。若者支援機関の一室をお借りして行った。またインタビューでは、予備面接によって、「ひきこもり」状態になるまでの様子、「ひきこもり」状態時、「ひきこもり」状態でなくなった時の様子、家族の関わり、望む支援など、予め用意した幾つかの質問を元に、半構造化面接を行い、「ひきこもり」経験者の方がなるべく自由に話せるよう心がけた。インタビュー時に、「ひきこもり」経験者に事前に了承を得た上でICレコーダーに録音し、トランスクリプトを作成した。

4 調査期間

調査は2010年7月から2011年7月にかけて行った。

5 インタビュー者一覧

図表-14 インタビュー者 一覧

仮名 性別(年齢)	「ひきこもり」 開始年齢	「ひきこもり」 期間	現在の状況
今野良和さん 男性(32)	11 歳	10 年	NPO 法人で常勤スタッフとして働いている
宮脇健介さん 男性(28)	15 歳	11 年	週 5 日 8 時間アルバイトをしていたが、最近 は不況で週 3~4 日に減らされている
佐藤奈美さん 女性(22)	14 歳	5 年	絵画教室や自助グループ活動などに週一回程 度参加
吉田雅彦さん 男性(45)	25 歳	18 年	就労支援施設に週一回利用者として参加

出典：筆者作成（2011 年 7 月現在）

6 インタビュー調査研究の分析方法

- ① 「ひきこもり」経験者に半構造化面接¹を行ったものを元に、トランスクリプトを作成した。
- ② さらにそのトランスクリプトを元に、時系列に内容を再構成し、なるべく「ひきこもり」経験者が使用している表現を使って記述した。
- ③ トランスクリプトを元に、筆者が解釈する「ひきこもり」経験者の希望を【 】で表記した。
- ④ トランスクリプトを元に、「ひきこもり」経験者の世界観が著されている箇所を抜き出して、先行研究を参考にして考察した。
- ⑤ 「ひきこもり」経験者がパワーlessnessな状態に陥っている部分について、必要に応じて下線を引き、考察を加えた。

7 倫理的配慮

本研究は、調査に先立ち、インタビュー調査への協力は任意であり、拒否しても何ら不利益がないことを対象者に説明した。また得られたデータは本研究の目的以外に使用しないこと、論文として出版される可能性があることやインターネット上で公開を予定していること、個人名等のプライバシーを厳守することを明示した上で、口頭・書面にて同意を得た。また希望者には、調査研究のまとめを配布できる旨を伝えた。

第4章 「ひきこもり」経験者の語りの世界

第2章では、かたつむり学舎の実践例を用い、「ひきこもり」状態になることによって当事者の問題が顕在化した後の効果的な関わりについて、パワー交互作用モデルをもとにみていった。その結果、パワーレスネスの状態である人のニーズを把握し、エンパワー、アドボケイトしていく過程をソーシャルワークとしたパワー交互作用モデル¹は、学校ソーシャルワークのみならず、「ひきこもり」ソーシャルワークにも応用できることが確認できた。

さらに第4章では、「ひきこもり」経験者のパワーレスネスな部分を明らかにすることによって、「ひきこもり」状態に至る潜在的な課題について言及していきたい。これによって、「ひきこもり」経験者がパワーレスネスに陥るような関係性が、どこにあるのかをみていくことを目的とする。

それでは、「ひきこもり」経験者の今野良和さん（仮名）の語りから順にみていくことで、パワーレスネスに陥るような関係性がどこにあったのか、その時、ニーズを把握し、エンパワーし、アドボケイト、サービス調整していくためにどのような関わりが必要であったのか、検討していく。

1 今野良和さん（仮名：以下同じ、今野さんと省略）の語りから学ぶ

「ひきこもっていた時っていうのは、ほんとに“外”っていう感覚がないっていうか。えっと、“外に出る”とかっていうのが、もう“世界がそこにはない”っていう、……ないですね。」

（1）今野良和さんが「ひきこもり」に至るまで

今野さんはやや小柄で中肉の32歳の男性である。インタビュー当時(2010年7月現在)、NPO法人に所属し、スタッフの一員として働いていた。柔らかな物腰と優しい笑顔でゆっくりと考えながら話す態度からは、穏やかで誠実な印象を受ける。今野さんは、父親（63歳）、母親（56歳）、弟（30歳）、弟（27歳）の5人家族で、一番下の弟は結婚して現在、自宅を出ているとのことだった。

今野さんが「ひきこもっていた」時期は、小学校5年生から中学校3年生までの不登校期間と16歳から21歳までの10年間。「幼稚園のスクールバスから泣きながら逃げた記憶がある」と語った。小学校1年の頃から学校が好きではなかった。小学校4年までは、30日以上は休まなかったのも、定義上は「不登校」ではなかったけれど、行ったり行かなかったりしていた。学校について「特定の何か」が嫌だったわけではなかったが、学校に行くと緊張が激しかったので、家に居たい気持ちが強かった。仲の良い友だちはできるけれど、対人関係は苦手と感じていたという。

小学校5年になり、休む日が増え、学校を休むことをめぐって両親と揉めながら休むよ

うになった。今野さんが弟を連れて家出したことをきっかけに、「弟を巻き込むくらいなら、休んでいいから」と両親に言われ、そこから学校に全く行かなくなった。小学校 6 年の 1 学期に予定されていた修学旅行に向けてしばらく学校に行ったが、修学旅行後、再び全く学校に行かなくなる。

中学生になり、入学式から 1 学期の期末までは登校したが、その後、また不登校となる。3 年間合計して、3 ヶ月くらい登校した。1 ヶ月いくとエネルギーが切れるような感じだった。中学校の卒業式は出席できず、不登校の子を受け入れている全寮制の高等学校に入学した。高校 1 年生の 5 月連休ごろまでは行き、先輩や友達とも仲良くなっていたが、いけなくなり自宅へ帰り、16 歳で退学した。その後、ボクシングジムに通いながら、大検の予備校に所属するも、ボクシングも予備校もだんだん行かなくなり、自宅から出なくなった。16 歳から 21 歳まで自宅で過ごした。

「ひきこもり」当時、どのように世界を見ていたのかを尋ねた。以下、今野さんの語りを記す。

そうですね。ひきこもっていた時っていうのは、ほんとに“外”っていう感覚がないっていうか。えっと、“外に出る”とかっていうのが、もう“世界がそこにない”っていう、ないですね。僕の中ではもう僕、自分の世界だけで完結している感じなんで、僕の世界っていうのは、居間と自分の部屋と、あとまあ生活が必要な家の中だけ。後は全部、外っていうのはないですね。TV とかで見るくらいで、そうですね。

「ひきこもり」という言葉は、外から内へ撤退し、そして内へ居続ける様が、消極的に継続している印象がある。これまでの調査・研究においても、「ひきこもり」定義の共通性として、①家から出られない、②対人関係からの撤退、③社会的活動からの撤退、を中核的なイメージとして、さらに補足的なものとして、④精神障害がその背景にない、⑤（当人の意図を超えて）6 ヶ月以上当該状況が続いている、⑥青年期までに問題化した、と工藤・川北²がまとめている。実際、厚労省の「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」でも上記と同様の定義をしているが、「外から内への撤退」という見方が、既に外にいる人（もしくは自宅の外に世界がある人）の視点で記述されている。しかし、上記のインタビューから分かるように、今野さんにとって、外には「世界がそこにない」のであって、唯一の世界である自宅で、ただただ生活しているのである。

このことは、支援のあり方を考える際に大きな手がかりとなる。「どうして外へ出ないのだろう」と「外へ出ることを」を目的化し、外出訓練を行う以前に、まずは「ひきこもり」当事者にとっての外側に「世界」を創る必要があるということを示唆している。そして「どうして外へ出ないのだろう」という疑問は、彼には「どうして外の世界がないのだろう」

という疑問へ取って代わる。外の世界が構築できなかったことを今野さんは、次のように語っている。

なんか、あの頃、たぶん人間関係をあんまり持ちたくないっていうのが結構強かったんだと思うんですよ。だから人間関係を、とりあえず、まあ処世術じゃないけど、仲良くなるっていうのが、一番こう、えっと、なんですかね、その場においていいっていうか。その、僕、間を持たすっていうのが苦手なんですよ。間を持たすには、人と話しているとかそういうのがいいから、人と仲良くするんですけど、場所の確保っていうか。そういうのでするんだけど、だけどやっぱ、いろいろ遊びに誘われたりとか、いろいろし始めたら、えっと、わずわらしくなってくるっていうか。なんかそういうのありましたね。期待されるとだめですね。だいたい期待され始めたりとか、頼られ始めたりすると身を引くっていう。なんか期待されている空気があるなあと思ったら、なんか、こう、なんかそういうのは、うーんと、めんどくさいな。

——何を期待されているのでしょうか？

向こうは仲良くなりたいたいっていう感じで寄ってくると、そういうのは、なんですかね、まあ、真剣に自分と向き合いたくないっていうのもちょっとあるんだと思うんですけど。話してるとだんだん濃い話しになるから。自分のことを理解されると考えてなかったから。自分の考え方が一風変わってると、すりあわないことがあったんで。それは小学校の時に、友達に「何で学校にいかんといけんのかね」という投げかけをした記憶がある。あんまり他の人には聴いたことないけど、その子は小学校2年生だったんですけど、大人な返答したんですよ。「将来困らんように学校に行くんよ」と言われた記憶が。「あっそっか」と納得はしたんですけど。真面目に返してくれる友達です。なんか、そんなあったんです。よくわからないですけどね。なんかちょっと、なんでしょうかね……。たぶんコミュニケーションとりたくなかったのかなあ。あ、でもあとそのころボクシングもやってたんですよ。まあこれは自分から言ったんで、1年間くらい続いたんですけど。そこでもやっぱり、あっ、期待されたら、いかんくなった。トレーナーとかから。なんか「お前、真面目に來いよ」とか、こういろいろ声かけられるようになったりとか、名前を覚えられたりとかしたら、なんか重たいとか。期待されると弱いですね。

今野さんのいう「仲良くする」ことというのは、社交辞令的に適度な距離感で、発展性

無くその場限りで付き合うことを意味していた。そこから、さらに相手に興味や好意を持たれ、人間関係が深まりそうになる「ライン」（今野さんが「ライン」と表現）の一手手前で、今野さんは会わなかったり行かなくなったりして、いつも「ライン」を超える関わりを止めていた。その理由の一つとして「自分が理解されると考えてなかった」と言っている。このことは、今野さんが、他者と違う考えを持つ自己を表現したり、他者と違う自己が認められたりする機会が家以外で皆無だったことを物語っている。また「ライン」の手前で関わりをやめることで、自己を映す鏡である他者と、そして他者と自分とによって創られる世界が消失してしまい、結果的に自己と向き合うことや自己を知る機会、そして自宅以外の外の「世界」がなくなってしまっていたと考えることができるだろう。

また他の理由としては、期待されたら「自分が（期待に）応えないといけないと思ってしまう、その結果、頑張って、「自分の願望とは違う方向に行」ってしまう。さらには、「自分のしたいことが分からなくなり、自分が混乱してくる」と語っていた。今野さんの『『ライン』から先は人と関わらない』という関わり方は、自分の世界を創る他者が消えてしまうという一方で、「まだよく分からない自分の願望」が他者によって方向づけられてしまうことを回避する役目も担っていた。木村³は、「日本人にあっては、自己は自己自身の存立の根拠を自己自身の内部に持っていない」と日本人の自己について言及している。このような日本人の自己のあり方と今野さんの状況を擦り合わせると、今野さんが「まだよく分からない願望」＝当事者の潜在的なニーズを明確にできるためには、関わる側からの方向性・恣意性のない、つまり無条件の関わりというものが必要であったと考えられる。

（２）「ひきこもっている」時の生活

今野さんがボクシングジムと予備校に行かなくなってから「ひきこもっている」間の生活について語ってくれた。

その後、ひきこもった。出るのが億劫だったというのもあるんですけど。家でずっと過ごしてましたね。そのころはTVとか漫画とか映画とか観たりして。その頃から読書グセがついたんで、それとTVとか映画とか、……

——本は自分で買ったりとか？

本は親が借りてきたですね。図書館で適当に選んできてもらって、とりあえず、本が面白くなりはじめた。本借りてきて、近所のおばちゃんとかが本持っていたりして、「あ、これ貸して」って、その本読んだのがきっかけで読み始めたんですけど。「白い牙」っていう、狼のネイティブアメリカンの話だったんですけど。

だいたい本読んだり、その頃は真剣にひきこもりながら生活することを考えはじ

めてた。漫画家になろうって。絵描き初めて、そのときは絵をいっぱい描いていましたね。ほんと下手だったんで。デッサンから、デッサンの書き方という本を通販で買って、あと漫画の模写をしたり、結構描いてて、まあそれで、結構もった部分はありますね。それで、もててた（なんとか過ごせてた）んじゃないかな。

——ほとんど人と逢うことはなかったんですか？

予備校入ってたんですよ、先生とかが心配して来てくれてた。家族、母親以外とはあってない。家の中にいる時に荒れてたんで。予備校あたりまでは、荒れてたんで、弟とかに暴力振るってたり、そういうのあったんで、爆発したり。父親とか、声がすごく大きい人で、大雑把な人なんですよ。なんかあったらとりあえず、父親も説明できないと思うんですけど。気は良い人だと思うんですけど、あんまり不登校とかひきこもり分らないんで、ふれたくないんですよ。だから話しづらかった。ちょっと怖い方だったから、こっちも緊張するんで話せない。

——どういうきっかけで、爆発したり？

きっかけは特になしって感じです。ほんと些細なことで、自分が不安とかがあって、瞬間的に爆発するみたいな。なんか、溜め込んだ後に。

——いつもイライラしてる感じ？

そうですね。自分でもその時には分からないんですよ。途中からすごい冷静になるんですけど。4〜5分わあってなるんですけど。後には引けないから、とりあえず続けるって感じですけど。でも弟には傷みたいなのを残したような感じで。

——どんなふうにおさまったの？

所属が完全になくなって、煩わされることなく。その後は自分が、なんかこう、まあ、やれることにしばらく集中して、それがダメなんだと思うまでは穏やかに過ごせた。17以降はピタっと。ただ口はありましたけど。禅問答みたいなことをよく聞いたなあと思います。

——どんなことを聞いたの？

“生きる意味”とか。ずっと前からそんなことは言っていたんですけど。途中で、

手はでなくなったんですけど、口は、時々もうほんと、すごい溜まった時に、母親とかと話すというか、一方的に「うん」と（母親が）聴く感じです。

※（ ）は筆者補足

今野さんは、対人関係での怖さや不安が強まり、それが溜まって抱えきれなくなった時、家族に対する暴力という形になっていた。今野さんはそれを“爆発”と表現している。暴力は、対人関係によって生まれる怖さや不安が溜まりに溜まった結果としての行為であり、“爆発”しないで済む手段が分からないまま“爆発”してしまう SOS としての、潜在的なニーズともとれる。17 歳以降、所属がなくなり、対人関係による怖さや不安がなくなると同時に、暴力行為はおさまっている。

“爆発”しなくてはいけなくなるほどの怖さや不安を対人関係において日常的に抱えているということは、まさに今野さんがパワーレスネスな状態に置かれていることを意味する。ボクシングジムや予備校に所属していることで起こる対人関係を怖さや不安なく対処できていたら、もしくは対処できない間は怖さや不安を伴う対人関係を完全に回避することができていたら、“爆発”も起きなかったであろう。

（3）今野さんが外に出るようになったきっかけ

16 歳から「ひきこもっていた」今野さんは、「20 歳になったら、自分なりに自立して生活して行かなければいけない」と考えていた。外に出ることなく自宅で出来る仕事はないかと思い、考えた末、「漫画家になって、自宅で過ごそう」と思い、絵の練習を本気でしていた時もあった。しかし、その夢は叶わず、かといって、外にも出られず、どうしていいか分からなくなり、20 歳を超えたころから焦りが強くなって、死ぬことを考えていたという。

やっぱ 20 が区切りだったんですけど。二十歳までに何とかすると思ってたんですけど。計画が狂った。計画はないけど、自分の夢はかなわなかったんで。漫画家になろうと思ってたんですけど。二十歳超えたころから焦りが強くなって。夜に精神的に追い詰められたことがあって、すごい頭が重くなって、ちょっと怖くなって。このままだとやばいっていう。あ、そうそう、そうですね。生きるっていうのは難しいと思っていたから、死ぬっていうかそういうことを考えていた。期限は二十歳って決めてたので、いろいろ考えてみたんですけど、実行できるかなあ、できんなあと思って。そうしてたら頭が重くなって。それで外に出ようとして。それで外に出ようとしても、出れなくなって、二十歳になった時は、もう終わったなあと考えて、考えた末に。家じゃあれだから、外に出ようと思って出たら出れなかった。緊張感が強くて出れなくて。あつ出れないっていうことが分かって。ちょっと落ち込んだんですけど。ほんと、どうしようと。記憶にある

のは、すごく怖かったこと。なんかおかしい話になるんですけど、そういうことを考えているのに、病気になったらどうしようと。

今野さんは、二十歳までに自分の「ひきこもり」状況を改善して仕事ができなければ生きていくのが難しいから自殺するしかないという結論に達した。そのことを「もう終わったなあ」と表現している。二十歳にして、自分の人生は取り返しがつかない、もうどうしようもない状況にあると思っているのである。これもまたパワーレスネスな状態であるといえる。さらに、今野さんは自宅で自殺することを懸念して、外で実行しようと試みるが緊張感が強く外に出ることができなかった。外出しようと思ったのにできなかったこの体験によって、自殺を考える以上に外出できない恐怖を感じるようになった。これが幸いして、結果的に自殺をする代わりに外出訓練をすることとなっていく。

さらに同じ頃、新潟事件⁴やバスジャック事件⁵などがTVで報道され、自分と同じような生活をしている人が犯罪を犯したことを知ってショックを受けた。「自分は普通だと思っていたが、もしかしたら自分もいつかそんなことをしてしまうかもしれない」と思って怖くなり、「医師に診てもらいたい」と母親に相談した。すると母親が往診してくれる精神科医師のS先生を探してきてくれた。さらに同時期、以前より母親が入っていた「支える会（不登校の子どもを持つ親の会）」のスタッフであるYさんが、母親を通じて「今野さんがいいなら訪問したい」との旨を伝え、Yさんと医師が今野さんに逢うようになった。その二人の関わりの中で、少しずつ外に出られるようになり、行動範囲も広がり、行動内容も増えていった。その当時の様子を以下のように語ってくれた。

そうですね。頭が痛いじゃなくて重たい。今まで感じたことのない強い不安感。自分で、母親に「病院で、誰か来てくれる人おらんかなあ」と。母親が区役所に行って。ちょうどS先生（医師）が「（病院に）来れないんやったら、往診してやるから」って。ほんとにおかしい話なんですけど、「20歳（はたち）になったら死ぬ」というのが、脇に置かれていて。外にずっと出てなかったから。そういうので「練習したらいいよ。」って（S先生に）言われたので。そこは素直に、ちょうど散歩とかし始めた。散歩っていつでも近くに自販機があったんですよ、薬を一錠飲んでそこまで歩くっていう。ほんとに出方を忘れてたっていう。

——散歩したり…

そのころはもうYさんは（家に）入っていたりしたと思う。S先生とかは、ドライブとか連れてってくれて。その二人の（関わり）ですね。手伝ってくれる人がいて、僕は運がいいほうだと思う。そういう運が。

——どれくらいで外に…？

自販機までの次が、坂の下まで。出るのは、この辺、結構記憶が曖昧なんですけど、えっと、うん、一人で出ていく分の練習に関しては、2、3ヶ月くらいですかね。なんかこう、ある程度は出ていけるようになって。いろいろこう。当事者会とか、誘ってくれて。「そういう人集めて、話す場があるから来ないか」って（Yさんが）誘ってくれて。ぼくがちょうど出る練習をしてたから。歩いては結構、出ていけるようにはなっていた頃で。ちょうど自分ひとりでは歩いているけど、「人とコミュニケーションとれんなあ」という感じで。わざわざ本屋にいった店員さんと話したりしてたんですよ。ちょうどそんな時、声がかかって。そこでまあ話をできるようにするまでに、だいぶあったような気がしますね。Yさんとは話せよったかなあ。首振るとか、頷きとか、家ではしゃべるんですけど、あんまり話してなかったかなあ。

※（ ）は筆者補足

今野さんが動き出すきっかけになっているものは、今野さんの恐怖や不安による困り感だった。「20歳までには、なんとかする」と思っていた今野さんが、20歳になっても現状を変えることができないどころか、TVの事件をみて、ますます不安になり、自分の中に沸き起こる状況を、自分一人で対処できなくなったところから始まっている。

さらに、そんな今野さんへの支援の状況を見てみると、今野さんのニーズに寄り添うように行われているのが分かる。そのことを今野さんは「自分は運がいいほうだ」と表現している。病院のことを相談したら、母親が往診してくれる医師を探してきて、医師のS先生は今野さんの困り事に合わせて、アドバイスをしたり、一緒に時間を過ごしたりしている。さらに、以前から不登校の親の会に相談していた母親は、動き出した今野さんの様子を、会のスタッフYさんに伝え、今野さんの了承を得て、出来る範囲の関わりを少しずつ行なっていっている。今野さんの母親、S先生、支援者のYさんが連携して、今野さんのニーズを把握し、今野さんのタイミングでサービス調整を行っている様子が伺える。

（4）今野さんの居場所と役割の拡がり

自宅以外の場所へ向けて、動き出した今野さんに対して、今野さんの潜在的なニーズを掘みながら、「もうそろそろ」と今野さんが思う絶妙なタイミングで、支援者のYさんやS先生が「居場所」と「役割」を提供し続けている。その過程を今野さんの語りからみていきたい。

だんだんそういうので話していった。カラオケとかにいった、とか連れてってもらって、だんだんそういう。その頃にはちょっと話せるようには、なった。そ

ういえば他の人と話していた記憶もあるんで。ちょうどそのころ Y さんが働きに出られて、(それまでは) ずっと (今野さんの自宅に Y さんが) 送り迎えしてくれていたんですけど。「自分で出てきて、自分で帰る」っていう。Y さんに、そう言われて第一声で「困ります」っていったそうなんですけど (笑)。そこからバスとか、そういうので行く練習始めた。自分にとっては。全部タイミングが「もうそろそろそうせんといけんな」っていうタイミングで、自分で探索して街に出かけたりとか。S 先生が「R 会の納涼会に来んね」っていったら「はい」って行ってみたりとか。誰かと仲良くなるというのではなくて、とにかくうろちょろして、行ってきました。そのころ、Y さんの主催する当事者会で参加者を待つ人というか、そういうのを任されて。T 会場を借りてやり始めて。その年、いろんな人が来はじめて、T 会場に移した時点でいろんな人が来るようになって、全部 Y さんが話して大丈夫そうな人を連れてくるって感じだったんですよ。仲良くなる人もおったりとか、ちょっと人数が増えてって、えっと。まあそういうところで仲良くなってって。その頃から仲良くなるっていうのが大丈夫になってきました。

※ () は筆者補足

せっかく外の世界に向けて動き出しても、安心してありのままの自分でいられたり、弱みを見せられたりする「居場所」がなければ、自宅の外に「世界」を構築することはできない。「世界」とは、「自分の生の意味を問う仮想的な場」であるとカントは述べている⁶。「世界」というのは、生まれた時から既に周りにあるものではなくて、人と人とのあいだで、人と社会とのあいだで、その人自身が生活しながら紡いでいくものである。そして当事者がその「世界」を上手く創れずに難渋している時、その当事者にとって必要なのは、「生の意味」が肯定されうるような「居場所」に他ならない。今野さんには、当事者会の受付で当事者を「待つ人」という「居場所」と「役割」を与えられ、その後、いろんな場で「居場所」や「役割」を増やしていった。

このように、ある人の存在が、社会に肯定されているか否かは、その人にとってしっくりくる居場所が、その人の「世界」つまり生活空間に存在しているか否かということと深いつながりがある。「居場所とは極めて主観的なもの」⁷であり、一人ひとりの異なる主観に合わせて、生活空間の中に、「居場所」を創り、そこでどう振る舞うかという「役割」も含めて、創造していくことが、自宅以外に「世界」のない人への支援となる。一人でもしないでのんびりすることも含めて、生活の中に、他者から受け入れられる形で、なんらかの活動を行う場があること、そのことが、「この社会にその人が存在していること」を社会が肯定していることになるだろう。当事者の特性や状況を、個性として肯定的に理解し寄り添う人がいて、その個性が他者と共有される場があって初めて、そこが当事者にとっての「居場所」となる。これが「ひきこもり」支援におけるパワー交互作用によるソーシャルワークでいうところのサービス調整の大事な一つであり、このような支援の広がりが

今後も多く望まれる。

（５）今野さんと人との関係性

今野さんは、ある一定の「ライン」を超えないように付き合い、人と一緒にいる時、極度に緊張するので人と付き合うことがとても負担だったが、最近は、平気だという。どんな変化が今野さんに起こったのか、尋ねた。

一番は、「仲良くしないといけない」と思ってたんですね。（でも）合う人合わない人いる。Ｙさんですね、僕が相当たまってたみたいで。（Ｙさんに）相当聞いてもらって。（Ｙさんが）ものすごい真剣に応えてくれたんで、その後いろんな人とも（話して）、一人暮らしはじめて（23歳から）働かせてもらってた。で、働かんといけんってなって。僕が接した人っていうのが、結構、活動家っていうか、市民活動家が多かったんですね。一番最初に働き出したのは、実家にいた時に、Ｆさんのコンビニに１ヶ月間、働かせてもらった。（中略）その後、活動家のＩさんっていう方がいて、その人が作業所を作るっていうのがあったんで。あ、その前か、その人が『ひきこもり』とかのことについて文章書いて」って言われて。それで書いて。（中略）短期のバイトを紹介してくれて、そこで一ヶ月くらい働いて、そのあと、作業所つくるからって言って、作業所作るの手伝って。（中略）そんで、そうやって働いて、そういう場所で人といろいろ話しているうちに、合う人合わない人ができてきて、人とか、ですね。合う人合わない人、そこで割り切れるようになってきましたね。いろいろ、その、教えてくれる人が多かった。かなり割り切った人間関係を、「ざっくりとしたらいいよ」、みたいな感じで。そのあといろいろ、あとは、自助グループはずっとやってたんで、そのまま、で、そこで一応なんか、僕「待つ人」みたいな感じで、自分雑務係でいたから、来る人来る人いろいろあって、割りきらんとやりきれんっていうところがあったんで。全員とは仲良くできんって。最初は頑張ったんですけど（笑）。盛り上げんといけんとか、なんか言い出したら、「まあ、まあ、まあ」みたいな、やりよったんですけど。あんまり……、で、なるように任せるようになった。経験が、対人関係の経験が割り切るようになってきたところもあります。

※（ ）は筆者補足

今野さんの弱みである対人関係についての気持ちや考えに対して、共有し、今野さんの存在を肯定しながら、真剣に応えるＹさんとのやり取りが、「（誰とでも）仲良くしなければいけない」という固い社会規範を柔軟にしていた様子が伺える。さらに様々な人々と接する中で、今野さんは、対人関係についてさまざまなアドバイスをもらったり、気持ちを聴いてもらったりしている。自分の弱みである対人関係について、話をして、そして日々

の生活の中で実践をして、そしてまた話をしてという活動を続けていった。その繰り返しのよって、今野さんは以前より対人関係に関して、難渋することがなくなっていった。

つまり対人関係に対して、以前より柔軟になってきたのである。これはまさに日常生活の中でのエンパワーリングである。今野さんの日常に添った中で、会話や体験として行われているエンパワーリングであるので、自然な形で、対人関係についてより良い体験を重ねていっている様子が伺える。

2 宮脇健介さん（仮名：以下同じ、宮脇さんと省略）から学ぶ

「自分のお金を全部持って、外に出て、自分の知らない所に行って、お金がなくなったら、ホームレスみたいな生活をする様な、そういうイメージがあった。」

（1）宮脇健介さんのライフストーリー

宮脇健介さん（男性 28 歳）は、父親（60 歳）、母親（61 歳）、弟（21 歳）の 4 人家族である。宮脇さんは、すらっとして背が高く、背筋をピンと伸ばしている爽やかな青年である。尋ねられたこと以外余計なことを話さないが、質問を的確に受け止めようとする姿勢から真面目で知的な印象を受ける。

途中、大検を受験するために外出したり、内科へ入院したり、床屋へ行ったりしたこともあるが、概ね「ひきこもっていた」時期は、16 歳から 27 歳までの 11 年間。

生まれた時から現在に至るまで、一度も引っ越すことなく同じ町に暮らしている。小学校中学年までは、いたって普通の子で普通に遊んだりしていた。しかし、小学校中学年の時に、友人に打ち明けたある人の秘密が、回り回って伝わってほしくない本人の耳に届いてしまったことがあり、そのことをきっかけに口数が減り、おとなしくなった。小学校高学年では、クラスにギターのうまい子がいて、4 人でバンドを組むこととなり、ベースを始めた。とても楽しかったとのことだった。その後、バンド活動は中学校を卒業するまで同じ仲間と続け、たまにステージを借りて、ライブ活動を行ったりしていた。

第一の転機となったのは、高校入学であった。仲の良かったバンドのメンバーと別々の高校になり、入学してからすぐに周りの目が気になり始めた。そこから腹痛も伴い、一学期の時点で不登校となる。(a) そのまま不登校は続き、高校 1 年の 3 月の時点でも「行けるようにはならない」と感じたため、退学した。自宅では焦りもあって、大検を受けようと考えた時もあり一人で勉強をしていたが、やがて行き詰まり(c)、「パソコンでインターネットをしたり、テレビを見たり、漫画を読んだり、ゲームをしたりして現実から目をそらして遊んでいた」と当時を振り返る。

そのような生活が 18 歳まで 2～3 年続いていたある日、第二の転機が訪れる。腹部に激痛が走り、病院に行くと「十二指腸潰瘍」と診断され 1 週間ほど入院することとなった。

その入院がきっかけで、またやる気が湧いてきて、一人で大検の勉強をし、19歳の時に受験して、全教科の高卒資格を取得した。しかし、大学受験をして大学に合格しても通える自信がなく、そのままひきこもり、以前と同じ生活を始めた。その当時は、大学をあきらめて、「家の中で出来る仕事はないか」と考えていたという。

それから22歳まで2～3年は、自宅で「家で出来る仕事」を模索していたが、見つからず(d)、宮脇さんは「人生に絶望」し、23歳の時に「死んでしまおう」と考えた。(e)これが第三の転機である。しかしすぐには実行に移さず、「どうせ死ぬなら遊んでからの方がいいかなと」思い、それから5年間は家の中でずっとゲームをして遊ぶようになった。

第四の転機が訪れたのは、宮脇さんの「父親が定年退職する」と聞いたときだった。「今の生活は長くは続かない」「何かしないといけない」という想いが生まれた矢先、東日本大震災が起き、原発の事故を見て衝撃を受ける。「寝て、朝、眼が覚めたら世界は滅んでしまっているんじゃないだろうか」「どうせなら滅ぶ前に何かやっておけば良かったのかな」「外に出てみれば良かったのかな」という思いが湧き、それから母親に「外で仕事をしたい」と相談する。宮脇さんの母親は、保管していた若者就労支援機関が紹介された新聞の切り抜きを宮脇さんに見せ、宮脇さんは相談に行き(f)、その後、現状にあったプログラムに参加したり、若者就労支援施設の居場所活動に参加したりする中で、就労体験を行い、現在では、小さな町工場の清掃のバイトを行い、週5日、一日6時間働いている。しかし、「ここ最近、不況に伴い会社の都合で勤務日数を減らされて、土日以外にも休みになることがある」と、将来に対する経済的な不安を語っていた。休みの日は、若者支援施設の集まりに来て、同じ経験を持つ仲間やアニメ、ゲーム好きな仲間とおしゃべりしたり、カラオケに行ったりなど、自助グループの集まりに出かけたり、若者支援施設が行っている活動に参加して楽しんでいる(g)。

(2) 友人関係以外の繋がりが無いということ（学校での支援課題）

宮脇さんの語りから、幾つかのニーズが明らかにされ、また潜在的なニーズも想定することができる。最初のニーズは、「仲の良かったバンドのメンバーと別々の高校になり、入学してからすぐに周りの目が気になり始めた。そこから腹痛も伴い、一学期の時点で不登校となる。(a)」時（パワーレスネス）であった。ここでのニーズの当事者は宮脇さんである。宮脇さんはインタビューの中で、「これがあつたらひきこもらずにいたろうなという望む支援」として、高校に入学して不登校になったこと（パワーレスネス）を挙げ、その当時「悩んでいることを話せる人が身近にいたら、違うことになってたと思う」(b)と語った。また誰かに相談するという選択肢を選ばなかった理由を聞いたところ、「浮かばなかった」と応えた。つまり、③当事者のニーズを満たす選択肢が宮脇さんにとっては存在しなかったことを意味している。どうすれば宮脇さんが望む支援を得られたらだろうか。宮脇さんは、不登校になった時（ひきこもり始めた時）の心境を以下のように語った。

入学してすぐに。4、5月くらいから。外を歩いていて、人とすれ違うときに、すれ違った人が自分のことをじろじろ見ている様な気がした。自分では見ていたと思う。それが凄く嫌だった。それでも、無理して高校に通っていた。ある時、見られるだけではなくて、笑われたと思って、それで嫌になり、お腹が痛くなる様になり、家に引きこもる様になった。

小・中学校はずっと馴染みの友人に囲まれて楽しく過ごしていた宮脇さんが、それまでとは全く異なる環境で友人が一人もいない高校へ進学して、とても緊張していたことは想像に難くない。内閣府の調査⁸によると、宮脇さんのように高校1年時に中途退学する者は、高校在学者の全中途退学者数の約半数にのぼる。そして、退学理由の第1位に「最も当てはまる」のは「進級できそうもない」29.5%、次いで、「校則など校風が合わない」24.2%、3位が「人間関係がうまくいかない」21.2%、4位が「勉強が分からない」14.9%であった。不登校が続けば、「進級できそうも」なくなり、「勉強も分からな」くなるであろう。そうになると退学を余儀なくされる前の、さらに不登校になる前のきっかけとして、様々な理由はあるであろうが、新しい学校文化に馴染めず、心許せる人間関係が構築できず、人と人のあいだで辛く悩んでいる若者像が浮かびあがる。

宮脇さんの体験は、個人的な病気の様相を呈しているが、新しい場所で強い緊張状態に置かれ、その悩みを相談する相手がいない状態では、精神状態が過敏になり、心身症的な症状がでるのは自然の反応である。当事者にニーズがあっても、当事者がそれを発言することができないでいたり、どういう方法でそれをニーズとしてよいのか分からなかったりするような潜在的なニーズの場合は、それを汲み取ってくれる人が周囲にいないければ、宮脇さんのように一人で抱え続けることとなってしまう。

悩んだ時には「誰かに相談する」という選択肢を、この時、宮脇さんは持っていなかったが、これは宮脇さんの個人的な出来事なのであろうか。この点についても、上記の内閣府の調査⁹で「高等学校中退」ということに特化してはいるが、明らかにされている。中途退学者の「自分の将来への不安感」についての質問では、「やや不安がある」43.4%「たいへん不安だ」26.1%を合わせると、約7割の中途退学者がその後の自分の将来に対して不安感を抱いているにも関わらず、「高校をやめることを相談したか」という質問に対しては、「相談していない」が21.9%と高校中退という人生の大きな選択に関して、約2割の若者は一人で不安を抱えている現状が伺える。また今後必要となるであろう「社会サービス等に関する認知度」については、「仕事で困ったときに相談する方法」は、「よく知っている」、「だいたい知っている」を合わせて33.8%、「生活で困ったときに相談する方法」26.8%と3割以下であり、若者に特化した社会サービスである「地域若者サポートステーション」に至っては6.0%と、非常に低い認知度となっている。

宮脇さんが「悩んでいることを話せる人が身近にいたら、違うことになったと思う」(b)と語ったように、上記の調査でも、「必要な支援」について中途退学者に尋ねたところ、第

1 位は「進路や生活などについて何でも相談できる人」66.6%（「必要」と「ある程度必要」の合計）と 6 割強の人が宮脇さんと同じように相談できる人を望んでおり、第 2 位「生活や就学のための経済的補助」63.1%、第 3 位「仲間と出会え、一緒に活動できる施設」55.9% を挙げ、宮脇さんが「ひきこもり」状態から抜け出す動きを始めるのに必要な状況と同様のものを求めていることが明らかになった。

やむなく高校中退をした宮脇さんも「高卒の資格は取りたい」と「自宅では焦りもあって、大検を受けようと考えた時もあり一人で勉強をしていたが、やがて行き詰まり(c)」、本人もどうしていいか分からない状態が続く中で、ひきこもっていく過程がある。高校 1 年の 1 学期で不登校になってから、ひきこもっている時のことを宮脇さんは以下のように語っている。

1 学期のうちに不登校になった。

——学校に行けなくなってしまった後はどんな感じだったのですか。

時間が経って、高 1 の 3 月に担任の先生が家に訪ねて来た。留年するか、どうするかという話で。留年しても、行ける様にはならないと思ったので、退学した。

——ひきこもっていた時期は何かしていたんですか。

ひきこもるっていうことは、普通の人のルールから外れるみたいな。中学行って、高校行って、大学行って、就職するみたいな。そういうのから外れることに凄く焦りがあって、大学に行く為の勉強を自宅で 1 人で勉強していた。分からない所が沢山あり長続きはしなかったが。

同様の内閣府の調査¹⁰でも、「中退後、高卒の資格は必要だと考えたか」について、「はい」と応えた中途退学者の若者は、78.4%と約 8 割近くおり、高校中退をした宮脇さんが、高卒の資格を取りたいと思うことはとても一般的なことであり、ここでも社会規範のルールに戻りたいと努力するが、上手くいかずに「ひきこもっていく」宮脇さんの様子が伺える。また宮脇さんと同じく、他の高校中退者も同様の悩みを抱えている。「高校をやめた後の進路決定時に苦労したこと」という質問（複数回答可）では、1 位が「適切な情報を得る方法が分からない」19.2%で、2 位が「地元には仕事がない」18.1%、3 位が「仕事をしていく自信がもてない」16.4%と、中退後の進路について思い悩み、「家で出来る仕事」を模索していたが、見つからず(d)にいた宮脇さんの現状と同様の苦労を味わっている。つまり、宮脇さんの通ってきた道と辛さは、決して宮脇さんの個人的な出来事ではなく、多くの高校中退者に共通する困難さなのである。文部科学省の調査¹¹によると 1982 年（昭和 57 年）

から 2007 年（平成 19 年）まで 26 年間、波はありながらも一貫して約 2%の高校生が中途退学をしていることが明らかとなっている。どの学校かを特定できないにしても、毎年、平均して必ず約 2%の高校生が中途退学をするということは、予測出来る事態である。その 2%の人たちに適切な相談資源があれば、26 年間の間に中途退学者は減少傾向へ推移していたはずである。幸い、2008 年度（平成 20 年度）に 2%を切り、以降、毎年微減しているが、それでも 1.5%を超えている。今後の動向を見守っていきつつも、これまで馴染んできた人間関係から切り離され、まだ新しい関係ができていない高校入学後の支援のさらなる充実とともに、中途退学者の退学後の支援をも視野に入れた高等学校教育について、これまで以上の配慮と個別の状況に応じた相談資源の選択肢の提示が必要となるだろう。

（３）社会的に生きることに対して絶望する時

人生の中のある場面で選択肢がないことが、人を死へ追い詰める例として、「人生に絶望し」、23 歳の時に「死んでしまおう」と考えた(e)時（パワーlessness）の宮脇さんを挙げることができる。宮脇さんは 2~3 年もかけて、たった一人で自分にできる仕事はないかと模索し続けていた。そしてとうとう見つからなかった時のことをこう語った。

———2、3 年は何か自宅が出来ないかなと模索していた感じですか？

はい。

———その後は？

人生に絶望して……。

———絶望…

上手く社会の中で生きていくことは出来ないんだろうなあと。23 歳くらいの時に死んでしまおうと考えた。でもどうせなら遊んでからの方がいいかなと思って、ずっと遊ぶようになった。

傍から見れば、高校 1 年生で不登校になってから 23 歳までの宮脇さんの行動と、23 歳から 27 歳までの行動は、少し勉強をしているかしていないかくらいの違いで、ゲームをしたり TV を見たりしながら、基本的にはずっと自宅に「ひきこもっている」様相だったかもしれない。しかし、宮脇さんが語ったように、高校 1 年生から 23 歳までは、宮脇さんも自分の人生を自分なりになんとかしようと思い、他の多くの人たちが進む道へ戻れるように、勉強に取り組んだり、自宅で自分ができる仕事を模索したりしていたのだ。しかも 23 歳ま

での 7 年間は、宮脇さんにとって「ひきこもっていて」も、「遊んで」いたわけではない。
「死んでしまおう」と考えた 23 歳の時(e)、「どうせなら遊んでからの方がいいかなと思っ
て、ずっと遊ぶようになった」とは、そういうことを意味しているのである。

宮脇さんの母親は、宮脇さんが不登校になったり、中退した頃から、「どうするの」と言
ったり、通信制の学校を勧めたりしていたが、父親は放任主義的なところがあり、そのよ
うな父親の態度について「何も言わず、見守ってくれていた」と宮脇さんは感じている。「人
生に絶望し」、23 歳の時に「死んでしまおう」と考えた(e)時の心理状態下で、もし両親か
ら「働いていない」ことを強く責められたら、きっと宮脇さんはどうしようもなくなって
いただろう。「ひきこもり」原因説の中に、「中流階級層が増え、親の経済力が上がったこ
とで、長期間子どもの面倒がみられるため、親が子どもを甘やかして、ひきこもり状態を
続けさせている」¹²といったものがあるが、実際、宮脇さんは違った。

——もし、ひきこもってなかったら、どうなっていたのかなと思いますか。

「ひきこもらなかったら？」というのは、周りの目を気にしてひきこもるようにな
ったが、それがなくなったらという事ですか。

——気になっているんだけど、家にずっと居られない状況で、ひきこもれな
かったらということですね。

どこか旅に出ていたと思う。

——高校の時は?19 以降もそうですか。

多分。

——一人旅ですか。

はい。自分のお金を全部持って、外に出て、自分の知らない所に行って、お金が
なくなったら、ホームレスみたいな生活をする様な、そういうイメージがあった。

——想像する事があったんですね。

はい。何度も想像した。旅に出るような。

「ひきこもり」状態とホームレスの状態は、宮脇さんにとって、生活する場所は違うが、

彼にとって同じ状況であることを意味している。どちらも、孤立無縁で、何の仕事も出来そうになく、収入がなく、将来に対して夢や希望がない状態であり、社会的に生きることに対して絶望している状態である。

（４）人と一緒に生活を楽しむ

宮脇さんは休みの日は、若者支援施設の集まりに来て、同じ経験を持つ仲間やアニメ、ゲーム好きな仲間とおしゃべりしたり、カラオケに行ったりなど、自助グループの集まりに出かけたり、若者支援施設が行っている活動に参加して楽しんでいる(g)。このような場で、宮脇さんのように楽しみながら「ひきこもり」の状態から人づきあいに慣れていき笑顔を取り戻す若者も多い。このような関わりの中では、支援者は居場所が安全な場所になることに配慮をしつつも、当事者同士で盛り上がっている時には黒子になっていた。このことは支援者との良好な関係性が存在することに加えて、場そのものが当事者の「行為」ではなく、当事者の「存在」を肯定するものとなっており、一方的でない良好な相互依存の関係性が起こっていると考えられる。

3 佐藤奈美さん（仮名：以下同じ、省略）の語りから学ぶ

「この歳で、どうしてこういうことを考えないといけないのかな、というのがあった。」

（１）佐藤さんの満たされない安全のニーズ

佐藤さんは、柔らかな笑顔が印象的な 22 歳の女性である。インタビューを行う筆者を気遣いながら感じの良い挨拶をし、自身のことについて分かりやすく話をしてくれた。

中学 3 年時の不登校期間の 1 年間を含めると「ひきこもっていた」期間は約 5 年間。現在、奈美さん（22 歳）、母親（62 歳）と、血縁・戸籍関係のない“お爺さん”（82 歳）との 3 人暮らしをしている。

3 歳までは父と母と 3 人で暮らしていたが、その後、両親は離婚し、2 年間ほど母親と 2 人暮らしをしていた。母親は家計をやりくりするのが苦手で借金が膨らみ、佐藤さんが 5 歳の時に、友人が紹介してくれた借金を代わりに返済してくれる年金暮らしのお爺さんと 3 人暮らしを始めた。血縁関係のないこのお爺さんに、当時、佐藤さんが非常に懐いたため、今日まで一緒に生活している。借金は返済してもらったものの、その後も母親がまた借金をし、その返済に追われるという経済的に厳しい状態が 19 歳まで続いた。

小学校時は、学校も楽しく、友達もいた。友達の間で仲間はずれにされたりすることもあったが、自分もいじめたりしたこともあり、学校は概ね楽しかったとのことだった。ただ、家庭の経済状況が厳しかったため、校納金を自分だけ直接現金で支払ったり、体操服にワッペンをつけるためのアイロンがなく友達の母親に頼みに行ったりして、他の子と違

うことが恥ずかしかったと語っていた。家計は絶えず借金の返済に迫られ、電気や電話が一時的に止められることもしばしばだった。

佐藤さんの母親が母親役を十分に担えていない現状に、佐藤さんが幼い頃から自分で対応していた様子（パワーレスネス）が伺える。また佐藤さんが 5 歳から一緒に暮らし始めた血縁関係のないお爺さんは、佐藤さんの家族以外に家庭の状況を説明する際、佐藤さんとしても難しい存在であり、説明しても理解してもらいにくい存在であった。佐藤さんは当時のことを以下のように語っている。

生まれてから今まで、終始共通しているのが、お金のことで、自分自身の将来のことよりも、家族の借金問題とか、日々の生活のことがずっとのし掛かっていて。

（中略）（友達の家と）小さな違いや、校納金のことや、ワッペンをアイロンで付けるっていうことを知らなくて、自宅にアイロンがなく、母親が手縫いし、失敗した為に、母親が自分の友達の家で頼みに行ったりしていた。普通、どの家庭でも出来ることがうちには難しかったということがあったので、家のお爺さんのこともあり、「この歳でどうしてこういうことを考えないといけないのかな」 (a) というのがあった。

※（ ）内は筆者補足

以上のように、絶えず経済的な悩みがあり、また他者に対して家族の“お爺さん”の存在を説明することが難しかったと語っていた。このことから佐藤さんは幼い頃から親との関係でパワーレスネスな状態に陥っていたことが分かる。

【家庭のこと、生活のこと、経済的なことについて心配しなくていい状態で暮らしたかった（3 歳頃から 19 歳まで）】

小学校時代、佐藤さんは概ね楽しく学校に通っており、不登校ではなかった。しかし、佐藤さんの発言にあるように、幼い頃から「この歳でどうしてこういうことを考えないといけないのかな」 (a) というのを、ずっと佐藤さんは考えさせられていた。

このような佐藤さんの状況にアプローチできるのは、現状であれば、小学校の担任やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーであるが、子どもがうまく説明できない場合、母親と佐藤さんの事実把握が異なる場合、また担任やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの他者と、母親がコンタクトを取りたがらない場合などは、佐藤さんが感じる困難さに対して支援が行われることは難しい。門田¹³は、早期から日本の教育現場でスクールソーシャルワーカーが必要であることを提言しており、その重要な役割の一つとしてアドボケイトを挙げている。支援の対象としては浮かび上がりにくい佐藤さんのケースのような子どもが実感する生活苦に対して、家庭以外で関わることでできる人の役割は非常に重要であるといえる。

中学校に入学した佐藤さんは、他の出身小学校の人たちとの考え方の違いや、小学校時の友達の変化についていけず、「休み時間一人にならないように」今日の休み時間を誰と過ごすかを毎日授業中に考える学校生活を過ごす。その様子を以下のように語ってくれた。

一番は自分の出身小学校と別の小学校の考え方の違いが最初にあったが、それが段々混じってきて、小学校の頃は優しかった子が、(中学生になって)急に上から目線になっていたり、向こうに感化されたりしたのが嫌だった。休み時間を誰と過ごすか毎日授業中に考えていて、「どうしよう、今日は1人になるのかな。そうなる前に声を掛けなきゃ」とか。そういうのに疲れたと思う。

※()内は筆者補足

(2) 佐藤さんが話を聴いてもらえる場とアドボカシーの必要性

【一人になる心配をせずに休み時間を友達と楽しく過ごしたい。中学入学時から】

この希望は叶うことなく、その後、学校生活に疲れ、中学校1年の3学期より学校へ行き渋るようになり、2年生になるとほとんど学校に行かなくなっていった。そんな状況であったが、母親は佐藤さんの不登校を特に気にかける様子もなく、不登校状態が続いていった。中学2年の夏にスクールカウンセラーが自宅を訪問してくれたことをきっかけに、母親が佐藤さんに対して気にかけるようになり、別室登校を始め勉強も始めた。しかし中学2年2学期途中から1日も学校に行かず中学卒業まで不登校だった。

その時の支援に関して、佐藤さんは当時を振り返り、望む支援について次のように語っている。

家に介入できる人がいればいいと思う。母もそうだったが、スクールカウンセラーが来るまでは、自分の状況を一言も聴いてくれる人が居なくて寂しかった。(b)母に言おうとすると「仕事が忙しいから聴きたくない」と断られた。第三者の資格を持った方が、家に介入出来たらいいと思う。例えば、ひきこもりの人に「ドア開けてください」とか言うんじゃないくて、「こういう子達は、こういうことを考えてます」みたいなことを通訳みたいに家族に伝えてもらいたい。自分もスクールカウンセラーの先生が家に来てくれたことによって、一時的にも学校に戻れたりしたので。あと話を聴いてもらえることが一番嬉しいと思う。

【自分の状況を聴いて欲しかった。母親に自分の気持ちを伝えてもらいたかった(中学入学時から)】

中学2年生まで、自分の状況を一言も聞いてくれる人が居ない(b)状況(パワーlessness)が続いていた佐藤さんは、不登校になることによって初めて支援の対象となって、スクールカウンセラーに話を聞いてもらえ、母親に自分の気持ちを伝えてもらう機会を得ている。

しかしスクールカウンセラーの支援は、中学校に在学している間のみで、卒業後はまた支援が途絶えている。

生まれてから中学2年生までの14年間、自分の状況を一言も聞いてくれる人が居なくて寂しかった。(b)ことと、19歳まで経済的に厳しかったこと、そして中学卒業後再び支援が途絶えたことが、その後の佐藤さんにどのように影響しているのだろうか。その後の佐藤さんの状況をみていきたい。

佐藤さんは高校への進学は特に希望せず、中学卒業後は時々外出するものの、18歳までの3年間、ほとんど自宅で過ごした。その時、ひきこもっていた理由を以下のように語っている。

家は何もかざらなくていいし、楽っていうのが大きい。よく非行少女は、夜の街に行っているけど、そういうことをする為には、服装も考えないといけないし、お金も持って出て行かないといけないし、そっちの方がよく分からない。家に居れば、ご飯も食べれて、好きな時に好きなことが出来る。母もお爺さんも厳しいということはなかったの。叱咤して「早く外に出なさい」っていうこともなく、良くも悪くも放任主義だったので。非行する勇気もなかった。家が居心地良かった。

(3) 家族の支えを期待できない佐藤さんが社会的に生きるということ

そして佐藤さんは、18歳になると周りが大学進学などを始めたことをきっかけに、それまでの自宅での生活に焦りを感じるようになっていった。

【自宅での生活に焦りを感じて、なんとかしたかった。(18歳から)】

それでアルバイトの面接を受けるが、1日で辞めてしまう(パワーレスネス)。佐藤さんは自分で無料の相談所を探し、若者対象のハローワークに相談に行った際、相談員に「就労の前の段階」にあると精神科受診を勧められ「(自分は)病気なんだ。これならお母さんとお爺さんに理由が立てられる」と嬉しかったとのことだった。精神科のクリニックには2、3回通ったが薬の効果はなく、カウンセリングもお金がかかるので通院をやめている。

【無料で相談にのってくれるところ(18歳から)】

19歳になって、若者支援施設が開所したことを新聞で知り、無料だったので相談に行った。ここで佐藤さんの希望する「無料で相談にのってくれるところ」である支援施設とつながる。同時期、母親が急病で入院することになり、収入が途絶え、これまで母親がしていた借金もあり、生活ができなくなる(パワーレスネス)。

【経済的に安定して生活していけるようになること】

若者支援施設のスタッフが、佐藤さんの希望に沿って「経済的に安定するよう」生活支

援を行っている。若者支援施設のスタッフは、まず佐藤さんの母親の借金の整理と佐藤さん一家の生活保護の申請を手伝った。これによって母親が退院して働けるまでの半年間、生活保護を受けることができ、佐藤さんは経済的に安定して生活していけるようになった。またスタッフは、母親にも了承を得て、金銭管理が苦手な母の代わりに記録や計算が得意な佐藤さんが家計を預かるようアドバイスし、退院後は、佐藤さんが家計を預かり、母親はパートに出て働くという役割分担をした。しばらくして母親の体調が整い、母親のパートも軌道に乗って、生活の目処がたったところで生活保護を打ち切った。

その後、佐藤さんは若者支援施設関連のボランティアスタッフによる高校認定試験の勉強会や絵画教室、また他の若者支援の活動（自助グループ的な集まりの場）に参加し、現在、週1回くらいのペースで外出しており、それ以外は、基本的に自宅で過ごす日々を送っている。現在では、いろいろ自分のことを心配するお爺さんを鬱陶しく感じているとのこと。

現在、佐藤さんの今後の希望は、電車に乗れるようになって、一人でいろいろな場所に行きたいと思っている。また働けるようになって、経済的に自立したいと考えている。

【電車に乗れるようになりたい】

【経済的に自立したい】

佐藤さんは、上記のような希望を持ちつつも、理想とのギャップである現状の「動けなさ」について不安や心配を語っていた。

今、こうやって話をしている、自分に前向きさが足りないと思っていて、理想として自立をしたいというのはいつでもあるが、動こうとしていない。就職の本を見ることもないし、見ようとも思っていないし、一日一日が消化試合みたいな感じ。理想と今の動きのとれなさっていうのが、不安。

———それについて何かアイデアがあるの？

外に出れないとか、人が苦手だとか、仕事が出来ないのは、結局自分の弱さからきていると思う。「一步を踏み出してごらん」と周りからは言われているが、誰から手を添えて貰ってというより、結局自分が18歳の時に勇気を持って、会社に電話を掛けるとか、面接に行ってみるとか。自分で動かないといけないっていうのが、自分の悩みなので。動かないといけないけど、動けないっていう感じ。答えが分かっている悩みが一番厳しいなと思う。(c)

———動けない理由っていうのは分かっているの？

変化が嫌い(d)なのかも知れない。私生活や仕事に行こうかでも、ささいなことでも、何年もこの生活を送っているとリズムが出来上がっていて、朝は好きな時に起

きるとか、夜は好きな時に寝るとか、他の事を始めるとリズムが崩れるから。(アルバイトで) お菓子屋さんに初めて行った時も、始めは緊張しなくて、自分すぎって驚いたくらい出来ていたが、帰り道に何故か気持ちが暗くなって、家に帰宅し、風呂に入っていた時に、無性に嫌になった。いつもは風呂に入っている時は、次何しようかなと考えるのに、その日は現場の先輩の人に商品名を覚える為に渡された本を見なきゃいけないと考えると嫌になった。結局、次の日に断りの連絡を入れた。だから、変化が嫌いだと思う。

※ () 内は筆者補足

(4) 佐藤さんがニーズに気づく関わり

佐藤さんは、「経済的に自立したい」と言っているが、そのために動かないといけなく、動けないっていう感じ。答えが分かっている悩みが一番厳しいなと思う。(c)とも言っている。頭では「動かないといけなく」と思っているけれど、身体は「動けない」ということは、「経済的に自立したい」というニーズが、現在の佐藤さんの欲求ではなく、「自立しなければいけない」という社会的規範からの強制だと捉えることができる。佐藤さんが表現している「答えが分かっている悩み」というのは、「答え」＝「しなければいけないこと」が、自分には「できない」＝「動けない」状態であると「分かっている」ことに対して、どう理解して、今後どう行動していけばいいのか「悩んでいる」ということであろう。

そしてその状態の理解の一つとして、佐藤さんは変化が嫌い(d)であること挙げているが、そのような佐藤さんの「悩み」に対しては、まだ支援がなされていない。それは、佐藤さん自身が、「経済的に自立したい」と言っており、この発言をそのまま現在の佐藤さんのニーズと捉えて、経済的な自立を目標に支援をし続けていくと、「動けない」自分と長く向き合うことになってしまう。このような状況の時には、佐藤さんが現在の自分のニーズに気づき、それを語れるようになるための支援がまずは必要となる。それには、佐藤さんにそのニーズの理由を尋ねるのがよい。「どうして経済的に自立したいの？」と聴いて、「みんなそうしているから」とか「20歳を過ぎたら働くものだから」など、楽しくなさそうに答えたら社会的規範から出てきたものだとして捉えることができる。そしてさらに「もし経済的な自立のことを心配しなくてもよかったとしたら、どんなことがしたい？」と尋ねてみる。その後に出てきた答えが楽しそうな表情とともにあれば、それが本当のニーズかもしれない。けれどそのような質問自体、これまで彼らは考えたことがないので、答えられない人がほとんどかもしれない。またそのような質問を心から支援者が投げかけるためには、前提として、佐藤さんが経済的な自立を心配しなくてもよいような社会サービスが用意されていなければならない。

4 吉田雅彦さん(仮名：以下同じ、吉田さんと省略)の語りから学ぶ

「自分を受け入れてくれるところはないだろうな、と思っていた。」

(1) 吉田雅彦さんが「ひきこもり」に至るまで

小柄で、どこか年齢より若い感じのする雅彦さん（45 歳男性）は、父親（77 歳 年金で暮らしている）、母親（73 歳 主婦）、姉（50 歳）の 4 人家族である。礼儀正しく、実直な印象を受ける。父親は大手企業に勤めていたが、吉田さんが大学 2 年生の時にリストラされ、その後はいろいろな職を転々として、一家の生計を立ててきた。姉は短大卒業後、ずっと会社員をしているが家にはお金を入れていない。現在は、両親の年金や貯金で、両親と吉田雅彦さんの生活費をまかなっている。

生まれた時も特に問題なく、幼稚園は普通に通っていた。喘息があったので、6 歳のときに引っ越したが、そのときから人生が狂ってしまった気がしている。人との付き合いが分からなくなってしまって、こちらは何もしていないのに、相手が自分を嫌っているということ(a)がよくあったとのことだった。小学校は休まず通っていた。成績も中くらいだった。

【人との付き合い方を知りたい。人と良い関係を作りたい。6 歳から】

インタビューでの吉田さんの話し方や振る舞い方から筆者が受ける印象、そして上記の 6 歳という物心がつく頃の人づきあいの困難さのエピソードやその後の吉田さんの生き方の様子などから、筆者は吉田さんに生まれながらのコミュニケーションの困難さがあるのではないかと推測した。吉田さんと話をする中で筆者との間に良好な関係性を感じていたので、インタビュー後に吉田さんにコミュニケーションの困難さについて確認したら、「最近、『広汎性発達障害』かもしれないと就労支援施設のスタッフに言われて、検査に行きまして、診断が出て手帳を取りました」とのことだった。

吉田さんが生まれてから早期の時点で、吉田さんのコミュニケーションの困難さに対して、吉田さんや吉田さんの両親が何らかの支援を受けることができていたら、こちらは何もしていないのに、相手が自分を嫌っている(a)（パワーレスネス）という、理由が分からず上手くいかない状況は回避されていた可能性が高い。広汎性発達障害について、稲田¹⁴は、地域で暮らす高機能広汎性発達障害(以下、PDD 児者と省略)成人 154 人について心理的、社会的関係の主観的 Quality of Life(QOL)を明らかにし、それに関連する要因について検討している。その結果、心理的 QOL には、4 歳以前の早期診断と母親の助けが大きく影響していることが明らかにされている。早期診断については、診断とそれに伴う適切な支援によって、症状の改善だけでなく、本人に対する周囲の理解がすすみ、本人に適した環境が整えられ、その後の本人を取り巻く環境全体が大きく変わった可能性があるとし、高機能 PDD 児者に対する早期診断および支援の重要性を示唆している。また PDD 児者に対しては、生涯に渡る継続した支援が本人、家族ともに必要であると述べている。

吉田さんは、小、中学校時、学校も変わったりクラス替えもあったりして、クラス内に

知り合いがいない時期もあり、人付き合いが嫌だったと感じていたが、休まずに学校に通っていた。10歳の頃から吉田さんはラジオが好きで深夜放送をよく聴いて過ごしていた。

高校は自宅近くの高校を希望していたが、新設校に行くように姉に勧められ、そちらに行った。高校でもクラスに友達がおらず、図書館で一人本を読んでいる状態だった。

高校を卒業し、行きたかった大学を受験したが受からず、滑り止めで受けた大学にいかざるを得なかった。寮生活をしながら、大学に行った。

23歳で大学を卒業後、自動車販売の会社に就職し、訪問での自動車販売を担当していた。1年7ヶ月続けたが、(b)仕事に限界を感じていたので地元に戻って親孝行したいと思い、仕事を辞めて実家に戻った。(c)その後、仕事はおろかアルバイトすら見つけられなかった時期があり、再就職活動をして無駄だと思うようになり、25歳の時には求人票を見る意欲もなくなった。(d) (パワーlessness)

この頃のことを振り返って吉田さんは次のように語っている。

——「この時期にこんなことがあったら、ひきこもらずにいただろうな」ということはありますか。

仕事が上手く出来ていれば。話し下手でも、何とかやっていける術があれば。模索はしてみたが、いかんせん動かないと、多く訪問して種を蒔かないとお客様は来てくださらないし。それをまじめにしておけばと、今となっては後悔している。

——最初に勤められた自動車会社が上手くいってれば良かったかもしれないし、それを辞めた後も、他のものが何かあればというのがありますか。

他のものがあれば、…… 自分自身に向いていたり、自分が出来る仕事のある会社があれば、ひきこもっていなかった。

【自動車会社で仕事がうまく続けられる】

新入社員である若者が、1年目から自動車の訪問販売に配属されるというのは吉田さんでなくても非常に大変な仕事であると予想する。さらに吉田さんは、幼い頃から人とのコミュニケーションが苦手であることを考えると、自動車販売の会社に就職し、訪問での自動車販売を担当して1年7ヶ月続けた(b)ことや、そもそも営業という職種自体にも無理があった可能性が考えられる。この時、吉田さんが会社の上司や会社に所属する産業カウンセラーがいれば産業カウンセラーや、または会社という枠を超えて生活全般についていつも相談できる誰かに仕事のことについて相談できていたら、自動車会社を辞めるという選択肢以外も残されていたかもしれない。しかし吉田さんは、仕事ができずに辞めてしまった

ことについて、「何とかやっていく術がなかった」自分のせいだと思っている。

厚生労働省¹⁵によると、吉田さんが離職した1990年は、新卒者離職率が26.5%(大学卒1～3年以内の離職率)で、大学卒者の新規学卒者離職率は約20年間横ばいでほぼ3割を推移している。理由はどうか、新規大学卒者の約3割が離職するということは、新規学卒者の新規雇用が優位な我が国では、吉田さんのようにその後の就職が危ぶまれる若者が存在することを意味する。

またさらに(当時は気づいていなかったが)吉田さんは、広汎性発達障害でもある。神尾¹⁶は、青年期・成人期の男性の広汎性発達障害の特徴として

青年期の発達障害ケースが、不安、抑うつなどを主訴として精神科医療機関を受診する場合や、学校・職場への不適応、家庭内暴力や近隣への迷惑行為、社会的ひきこもりなどによって事例化することがあります。ひきこもり始める年齢は18～20歳前後がピークであることがわかっています。

と述べている。また、その支援方法として、

ASD(自閉症スペクトラム：広汎性発達障害)の人々に対する支援は、早期に始まり、ライフステージに応じて変えながらも、途切れることなく続けるのが最も望ましいのです。

と述べている。これまでの自分の人生を振り返って、吉田さんは「環境、その他、両親や同級生、その時々担任の先生に理不尽に潰されたというのが正直な感想」と語っていた。途切れなく支援が必要である吉田さんに、適切な支援が全く行き届いていなかった結果、小学校、中学校、高校、大学と人付き合いに苦労しながらも登校し、大学卒後、企業に採用されて1年7ヶ月で退職を余儀なくされている様子が伺える。

【自分に向いている、あるいは自分に出来る仕事のある会社に勤めたい】

という願いを持ちながら、吉田さんなりに再就職活動を行っている。しかし、そこで仕事はおろかアルバイトすら見つけられなかった時期があり、再就職活動をしても無駄だと思うようになり、25歳の時には求人票を見る意欲もなくなった。(d) (パワーレスネス)と諦めた体験を語っている。この時点で吉田さんに向いていることや、吉田さんにできることを一緒に探してくれたり、もし一般の企業の中にそのような仕事がなければ、吉田さんのために新しく仕事を作ってくれたりするような伴走者がいたら、吉田さんはこの再就職活動をどんなふうに体験していただろうか。

(2)「ひきこもっている」時の生活

その後、43歳まで、約18年間、趣味以外の外出はなく、自宅にひきこもって自分の趣味に没頭して過ごしていた。吉田さんの趣味は、ラジオを聴くことで、番組にお便りを出したり、年に3〜4回、DJの方に逢いに行行って差し入れを持っていったりしている。また音楽を聴いたり、模型を作ったりすることも好きで自宅でよく作っている。

人付き合いとしては、小学校3年時から22年間ずっと付き合ってくれた幼馴染が一人いたが、物の貸し借りのトラブルで絶交してしまって、それ以後、人付き合いは全くなかった。(パワーレスネス)

この「ひきこもっていた」時期のことを吉田さんに伺った。

——ひきこもっている時は、外の世界はどんな風に見えていましたか。またはどんな風に感じていましたか。

テレビは見ていなかったが、ラジオを聞いて、外の情報を知っていた。どう見えていたかと言うと、自分を受け入れてくれるところはないだろうなと思っていた。(e)

——それは仕事として、という事ですか。

そうですね。人として、あるいは、仕事ができる人という意味で。

——もし、「ひきこもれなかったら」、どうしていましたか。

自殺してしまったと思う。もう、どこにも居場所がないから。(f)今でも、考えないことはないですが。

「ひきこもっている」時、吉田さんは、社会の中に自分を受け入れてくれるところはないだろうなと思っていた(e) (パワーレスネス)。だから、もし実家でも受け入れてもらえない状況になったら、もう、どこにも居場所がないから(f)自殺してしまったと思うと吉田さんは語った。吉田さんが安心して存在することのできる居場所が自宅以外にどこにもなく、その状態像としての「ひきこもり」が18年間続いていたことを吉田さんは語っている。このことは逆にいうと

【自宅以外でも自分を受け入れてくれるところが欲しい 25歳〜43歳】

という希望を表しているとも受け取ることができる。考えられる支援としては、吉田さんが諒解する範囲で、自宅を訪問することができたなら、吉田さんが「受け入れてもらえて

いる」と感じるようなやりとりを少しずつ積み重ねていくことで、「ひきこもり」以外の別の選択肢を用意することができるかもしれない。それは例えば、ラジオ DJ の話や、音楽、模型づくりなどの話を吉田さんから聴きながら、吉田さんと一緒に過ごすことから始まるだろう。

吉田さんは 41 歳の時、突然、嘔吐や震えなどの症状がでた。内科に受診したら、「2 型糖尿病」と診断され、1 ヶ月間入院することとなる。その後も内科、眼科など糖尿病に関連する診療科へ定期的に通院している。

【症状をなんとかしたい 41 歳から】

「ひきこもり」続けている間に何らかの身体疾患を患い、その治療のために、これまでひきこもっていた人が自宅から出て通院や入院をするケースがある。身体疾患や大きな事故による怪我など本人に衝撃を与えるような病気、怪我の出現は、慢性的なこれまでの生活リズムや家族との関係性、そして「ひきこもり」という文脈そのものを変化させるとても大きな機会と筆者は捉えている。しかし、残念ながら関わった内科医や外科医が、「ひきこもり」状態の人に病気や怪我の治療以外のアプローチを行ったり、両親に話を聴いて他機関と連携したりして「ひきこもり」状態に変化が訪れたという実践例を筆者はまだ知らない。精神疾患に関しては、「ひきこもり」続けている間に精神症状が重篤になり当事者から SOS が出た場合に、精神科医につながってそこから精神疾患だけでなく、「ひきこもり」状態にも変化が訪れた事例は、今野さんの事例でも紹介した。

上記の事例を考察すると、医療に関して、身体の部位別、病気別、療法別、専門家の役割別ではなく、来院した人や家族、そしてその人の人生をトータルで診るという視点や仕組みがターミナルケアのように行われると、様々な人の支援につながる機会がより増えるだろうと期待している。

（3）吉田さんが外に出るようになったきっかけ

吉田さんは 43 歳の時、テレビで若者支援施設のことを知り、相談することで電話代や交通費がかかるが、「いつまでもこの状態でいられない」「いつまでも両親とこんな生活を続けられるとも思えない」と感じて、相談に訪れるようになった。

【「ひきこもり」の生活をなんとかしたい 43 歳から】

吉田さんは、若者支援施設の開設を 43 歳の時に初めて知って、そこから動き出そうとしたが、もしもっと以前に知っていたらどうだったのだろうか。例えば、もし小中学校の授業の一貫で、若者支援施設が紹介され、また発達障害が紹介され、様々な人の生き方が紹介される中で、社会サービスへのアクセスの仕方が紹介され、そこを訪れた人のより良い変化がすべての人に紹介されていたら、吉田さんの 18 年間はどうかっただろうか。社会サ

ービスの社会的認知を拡げていくためには、多くの人がアクセスする可能性の高い場所で啓発することが不可欠である。誰もが「ひきこもり」可能性があるなら、誰もが知りうる状況での啓発活動を視野に入れる必要があるであろう。

【まともに働いてお金がもらえること 43 歳から 45 歳（現在）】

現在は、就労訓練施設に週一回午後通っており、週一回そこに通うだけで精一杯な状況だと語る。通い始めてから 9 ヶ月が経過している。就労訓練施設では、職業に関する訓練を受けており、ビジネスマナーや仕事をするにあたっての社会人としての良い話し方などを学んでいる。

今後のことについて吉田さんに伺った。

———これからの人生について教えて頂きたいのですが、計画してることや期待していることはありますか。こんな風になったらいいなとか、これをやっていきたいなとか。

実現するか分からないが、「ひきこもり」から脱却出来て、まともに働いてお金がもらえて、自分の欲しい物が買えたり、両親に還元出来るといい。(g)『ひきこもり』でもやり直せますよ』っていう、現実には「ひきこもっている」皆さんのお手本になれる様になりたい。

吉田さんが語る将来の中に、両親に還元出来るといい。(g)という発言がでていますが、このように親や家族のことを考えている「ひきこもり」経験者は多く、2010 年の内閣府¹⁷の調査でも、「ひきこもり」群が選んだ「不安要素についてあてはまること」の項目で、「家族に申しわけないと思うことが多い」に「あてはまる」と応えた割合が 71.2%で、最も高かった。また KHJ 親の会の調査結果¹⁸でも「ひきこもり経験者が望んでいたこと」の中に、「親に安心して欲しい」という項目があり、「強く考えていた」「少し考えていた」を合わせると約 8 割にのぼっている。

（４）社会的に生きるために必要な経済的支援

【現在、生活していけるだけのお金が欲しい 43 歳から一生涯】

【将来、不安なく生活していきたい 43 歳から一生涯】

現在も全く収入がないので、お金をめぐって両親とトラブルが絶えなかった（パワーlessness）。それで、若者支援施設のスタッフに家族との間に入ってもらい調整してもらって、交通費や趣味に必要なお金として月 3 万円お小遣いという形で毎月決まった額をもらえることとなった。また国民年金は免除申請を出しているが 4 分の 3 は支払い請求が来ており、

それも払えておらず無年金の状態である（パワーレスネス）。

不安に思っていることについて吉田さんに尋ねた。

両親と姉といつ別れることになるのかということ。

——それは亡くなれるということですか。

はい。切実で……。どうしていいやら。今の時点では、支援施設に行って、訓練施設に行って、相談受けて…というのが、自分の中で精一杯。それを……、のちのち、家を守っていけるのか……。

「大人のひきこもりの現状と問題点」で、中垣内¹⁹は、「ひきこもり」外来に来院した患者を「年齢」「ひきこもり期間」「職業経験の有無」によって分類してその治療反応性について比較している。その結果、「35歳以上」「ひきこもり期間が10年以上の長期群」「就業経験がある場合」に治療反応性が悪いことが報告されている。この条件をみたすひきこもりを「大人のひきこもり」として、その現状と問題点を述べているが、吉田さん自身もこの「大人のひきこもり」にあてはまる。

インタビューでも「若者支援の多くは39歳までで、40歳を超えると受け皿が極端に少なくなるので困る」と話していた。またKHJ親の会の調査²⁰でも、当事者の平均ひきこもり期間が10.5年となっており、ひきこもり期間については「大人のひきこもり」の条件を満たしている。このことは、当事者の高齢化に伴い、その当事者を経済的に支えてきた親の高齢化の問題もはらんでいる。吉田さんは現在45歳で、吉田さんの父親は77歳である。吉田さんのように親の年金で吉田さんが生計を立てている場合、親なき後、吉田さんがどのように生活していくのかということについて、就労支援以上に考えていかなければならない支援がある。この点に関して、中垣内²¹は以下のように述べている。

特に70歳代以上の親の場合には、固定化した共依存をいじることより、親の会や保健師の訪問でしっかりサポートする方が有効です。（中略）一般に35歳以上のひきこもりでは、就労希望者がきわめて少なく、逆に就労どころか社会生活すべてを断念する傾向が増加します。そこで、早期の就労を促すことよりコミュニケーション能力を養うことから始めることが大切といえます。親の庇護がなくなった場合に、福祉関係者など他人と交流する力が最低限必要となるからであり、就労訓練はその次の段階です。

働きたくても何らかの事情で働けず生活がままならないのであれば、一般的には生活保

護受給対象者となるが、「ひきこもっている」人と同世帯の者に収入がある場合、扶養義務が生じ、「ひきこもっている」人のみが生活保護を受給することができない。

生まれてから多くの支援が必要な場面で支援を受けられず、やがて小中学校を卒業する年齢を過ぎ、ある人は高校、大学を経て、無職となり、生きるための唯一の方法として「ひきこもっている」人たちが、親なき後、社会で孤立せずに生活していけるために、今、私たちは何をすべきだろうか。非常に重要なテーマなので、次章で取り上げたい。

5 早期支援の可能性

厚生労働省の「ガイドライン」の「ひきこもり」評価基準や、医学・心理系の先行研究から、これまでの「ひきこもり」支援への理解は、医学モデルに基づく、精神疾患や発達障害など何らかの病気や障害、またコミュニケーションスキルや自信の無さなど心理的特性や家族関係といった当事者や家族に内在する問題であることを前提としているものが大半である。そして「ひきこもり」当事者や家族に内在する問題を改変する、またはコミュニケーションスキルや自信をつけさせるためのトレーニングやセラピー、またコミュニケーションの練習の場としての“居場所”やボランティア活動、社会に適応できるようになるための就労訓練が施され、それを「ひきこもり」支援と呼んでいる現状が多くみられる。

しかし、本章で「ひきこもり」経験者の語りについて、パワー交互作用モデルを用い分析していく中で、「ひきこもり」経験者全員が、「ひきこもる」以前の様々な場面でパワーレスネスな状態に陥っていたことが明らかとなった。幼少期からずっと親、友人、学校、社会でパワーレスネスな状態だった今野さん、吉田さん、3歳からずっと親との関係でパワーレスネスな状態だった佐藤さん、中学からずっと親、友人、学校、社会との関係でパワーレスネスな状態だった山川さん、高校に進学してからずっと友人、学校との間でパワーレスネスな状態だった宮脇さん、橋本さんの状況が明らかになった。

早期の時点で、パワーレスネスな状態に陥っている「ひきこもり」経験者たちに対してパワー交互作用モデルによるソーシャルワークが行われていたら、彼らは「ひきこもり」という状態像とはまた違った選択肢を選択していたかもしれない。そのような「ひきこもり」ソーシャルワーク実践を行うためには、当事者がパワーレスネスな状態であることをいち早く認識できるよう、家族を含め周囲の人たちが困った出来事を通して当事者のパワーレスネスに気づく必要がある。さらに、パワーレスネスな状態の当事者に関われるような人の存在、及び、ソーシャルワーク実践ができる人と、誰でもいつでも無料で出逢える仕組みが社会の中に必要であろう。

6 直接的な対人関係以外で起こるパワー交互作用

今野さんは「幼稚園のスクールバスから泣きながら逃げる」「『特定の何か』が嫌だった

わけでなかったが、学校に行くと緊張が激しかった」など、幼少期からパワーレスネスの状態に陥っている。吉田さんも同様に 6 歳の頃から「人生が狂ってしまった」と感じており、パワーレスネス状態であったことがうかがえる。しかし、両者ともに、「権威的・権力的パワー」が誰から、あるいは何からもたらされていたかはインタビューでは明らかにすることができなかった。もし、当時の今野さんや吉田さんに話を聴くことができれば明らかになった可能性はあるが、少なくとも、インタビューをした時点では今野さん、吉田さん自身も分からない状態であった。

このことについては、ヨハン・ガルトゥングの「暴力」の定義とそれについての考えが示唆を与えてくれる²²。彼は「暴力」について以下のように定義している。

ある人に対して影響力が行使された結果、その人が実現したものが、その人がもつ潜在的实现可能性（本来であれば実現可能であったもの）を下回った場合、その隔たりを生じさせた原因を「暴力」と呼ぶ。

上記の「暴力」の定義を見てわかるとおり、人が陥る状態は「パワーレスネスの状態」と酷似している。そして、暴力を行使する主体が存在するか否かで、暴力を以下のように区別している。

暴力を行使する主体が存在する場合、その暴力を個人的または直接的暴力と呼び、このような行為主体が存在しない場合、それを構造的または間接的暴力と呼ぶことにする。（中略）第一の場合には、これらの結果の原因は行為主体である具体的個人に求めることができるのに対し、第二の場合にはそれはもはや意味を持たない。その構造は、他者を直接に害する人は誰も含んでいないかもしれない。暴力は構造の中に組み込まれており、不平等な力関係として、それゆえに生活の機会の不平等としてあらわれる。

つまり、「行為の主体」が存在しない「暴力」があるということである。これをパワー交互作用モデルに当てはめて考えると、「行為の主体＝構造」であり、構造とのパワー交互作用によってパワーレスネスに陥る場合もある、という可能性が見えてくる。

また、村澤²³も「ひきこもり」経験者がパワーレスネスに陥っている関係性の一部を、「透明な排除のプロセス」という表現を使って、「行為の主体」がはっきりしない場合があることを説明している。彼は、「ひきこもり」経験者を対象に面接調査を行い、「ひきこもり」状態に陥っていくプロセスについて検討した結果、「いじめられ体験」「不登校経験」「就労や就職活動での失敗」「一人親家庭」といった「顕在的な要因」とは別に、もっと深層的な部分で「ひきこもり」経験者の人生に影響を及ぼしている「透明な排除」のプロセスがあるとしている。そして透明な排除のプロセスとして、①自らの選択の結果として排除されていく ②見えない力によって孤立させられてしまう、という以下の 2 点を挙げている。

一つ目は、自らの選択の結果として排除されていくというもので、表面上は学歴を積み重ねていこうとするが、十分な教育的ケアを受けることができず徐々に自分の存在基盤が希薄化していき、やがて身動きがとれなくなって「ひきこもり」状態に至るというプロセスである。もう一つは、見えない力によって孤立させられていき、やがて自身を存在価値のないものとして認識していき、自ら社会への参加から退いていくようになるプロセスである。

パワー交互作用モデルにおけるパワーレスネスの状態が、人間関係からだけでなく、社会構造やシステムからも起きるということを、構造的暴力は述べており、「ひきこもり」経験者の「透明な排除のプロセス」も同様の現象を指している。これについては非常に重要なテーマなので、ここではこれ以上特に展開せず、次章の課題としてより具体的に取り上げたい。

第5章 「ひきこもり」経験者から学んだこと

1 当事者ニーズの重要性

(1) 当事者ニーズの明確化、把握の重要性

「ひきこもり」当事者の多くがこれまでの人生の中で幾度となく挫折体験や思い通りにならなかった体験を持っている。中には望むことを諦めたり、他の選択肢があることさえ思い浮かばなかったり、何度も試みて失敗したり裏切られたりした結果、多くのことに対してすでに絶望していたりする。

また「ひきこもり」当事者は社会規範が比較的強い人が多いため、自分のニーズではなく、社会規範に沿った受け応えをすることが多い。この場合は、ニーズを聞いた後、どうしてそれをしたいのか理由を尋ねるのが有効である。「ひきこもり」当事者が理由を語る時の表情が明るく楽しそうであれば当事者のニーズである可能性が高いし、逆に暗くつらそうであったり、無表情であったりすれば社会規範からの受け応えである可能性が高い。そのような場合は、「もし〇〇しなくてよかったら、何をしたい」と再度質問することも有効である。またすぐには浮かばなくても良い旨を伝え、他の「ひきこもり」当事者の経験談や選択肢やニーズなど、似たような体験を持つ人の話などを用いて紹介すると、ニーズが出やすくなることもある。

(2) 変化していく当事者ニーズに寄り添う

「どうしたいか」とニーズを聞いても何も出てこない場合もある。その場合は、可能な限り多くの選択肢を用意して紹介し、選んでもらうことから始めると良い。もしくは体験可能な沢山のリストの中から「これだけは絶対やりたくないもの」だけ外してもらって、残りを一緒に体験することから始めてもよい。一つ何かを体験していく中で、その体験後には別なニーズが生まれる可能性があるからである。ニーズはずっと止まっているような静的なものではなく、日々の体験や支援者や家族など人との関係性の中で、変化し育まれていく動的なものである。ニーズを動的なものにするためには、支援者との良好な関係性が不可欠であり、小さくてもこれまでとは異なる体験が「ひきこもり」当事者に必要である。そして可能な限り多くの選択肢を支援者が用意するためには、日頃から思考を柔軟にして、支援者自身が社会規範に囚われず、生活者として、また市民として、多くのネットワークとつながっておく必要がある。

(3) 当事者ニーズと家族との対話を促す

当事者ニーズと家族ニーズが異なる場合に、どのように支援していくのか、当事者に寄り添うのか、家族に寄り添うのかという議論が起こることがある。しかし、どのような時でも当事者がパワーレスネスな状態に陥っていることを認識して、当事者に強い影響を及ぼし当事者のサービス調整の一端を担っている家族が当事者を心からエンパワーリングしていきやすいよう、当事者ニーズを中心に据えて家族を支援するという姿勢が必要である。

具体的には、第 2 章 7 で山川友里さんの実践例で紹介した母親へのアドボケイトであり、第 4 章 3 で佐藤奈美さんのインタビューで紹介した、何の対応もしていない母親に対して「通訳みたいに家族に伝え」たスクールカウンセラーの対応である。支援者は、どのような時もパワーレスネスな状態に陥っている当事者に寄り添い、当事者ニーズへの支援を家族に受け入れてもらえるよう働きかけていくこととなる。

つまり、当事者の状況を分析し、当事者ニーズを把握するということは、ただ単に当事者や家族から困っていることを聴いたり、やりたいことを聴いたりするのではない。その困っていることが当事者にとってどうなるといいのか、それが何とつながっているのか、それがやれるとどうなりそうなのかなど、ニーズにつながっている様々な関係性への影響を、言語的、非言語的に聴いていくことにほかならない。そしてそのやりとりが支援者との信頼関係を構築することに役立ち、支援者の当事者や家族への理解を深め、さらに家族間での理解を深め、当事者自身の自己理解をも深めることに繋がるだろう。

またニーズというものは、一度決めたら変わらないような静的なものではなく、やりとりや関係性や状況、時間の中で影響を受け、絶えず変化していく動的なものである。当事者に寄り添うとは、変化し続ける動的なニーズに伴走することも意味する。

2 「ひきこもり」ソーシャルワークにおけるアドボカシー

(1) 当事者と家族とのあいだ

「ひきこもり」ソーシャルワークの重要な役割の一つにアドボカシーがある。アドボカシーについては、第 2 章 2 節で述べたが、門田¹が Sosin&Calum の「アドボカシーは決定者よりも弱いパワーの立場にある人の福祉や利益のために、決定に際して個人やグループが別の個人やグループに影響を及ぼしていく試みである」という定義と、Mickelson の「アドボカシーは社会的公平を保証し、維持する目標をもって、一人以上の個人、グループ、コミュニティのために、直接に代表し、擁護し、介入し、サポートし、または一連の活動を薦める行為」という定義を採用している。第 2 章のかたつむり学舎の実践でも、当事者と家族とのあいだで、当事者の福祉や利益のために影響を及ぼしていくためにアドボカシーを行っていった。そこには、独立した形で支援としてのアドボカシーがあるわけではなく、当事者や家族が置かれている状況に対しての分析、潜在的な当事者ニーズを顕在化させるためのニーズ把握、「ニーズを伝えたい」と思えるようなエンパワーリングが絶えず行われている。

具体的な場面としては、第 2 章の 7 で紹介した実践例 I 【やる前から「できない」と決めつけないでほしい】や【大学に進学したい】などである。親より発言権が弱い「ひきこもり」当事者のニーズに寄り添い、その体験の当事者にとっての意味や効果を母親に伝え、実現するようにアドボケイトしている。

（２）当事者と学校とのあいだ

当事者と学校のあいだのアドボカシーについては、第２章の８の実践Ⅱで紹介した。

【学校に敬史さんへの対応の仕方を説明してほしい】という母親のニーズに添って、母親の声に耳を貸さない学校に対しアドボケイトしたが、ここでソーシャルワークにおけるアドボカシーの課題が浮きぼりになる経験を筆者は体験した。それは子どもたちが所属する学校に対して、アドボケイトしようとする時、その要望が受け入れられサービス調整が可能となるか否かは、学校に委ねられるということである。これは、第４章６で述べた構造的暴力と関係があり、アドボカシーとしての機能をしっかりと果たす機関の必要性や、当事者のニーズに添った教育のあり方など非常に重要なテーマであるので、今後の課題としたい。

（３）当事者と社会とのあいだ

①経済的なこと

かたつむり学舎の実践で、課題になったことの１つに、経済的なことが挙げられる。実践例Ⅰ、Ⅱの２人とはまた別に、「かたつむり学舎」で支援をしていた当事者Ｈさんの父親がリストラされ、「かたつむり学舎」での関わりは続けて欲しいが月謝が払えない状況になった。このように経済的な問題を抱えている家族は、Ｈさんの家族に限らない。実際に、現在の公的な支援では充足できない、伴走的な支援を必要と感じてはいるが、経済的理由で頼めない家族もあった。「かたつむり学舎」など民間機関に関わってもらう場合、また何かしらの活動を一緒にしていく場合、それらの費用はすべて扶養している家族が負担することになる。

公的な支援でも、参加費や交通費、通信費など少なからず発生する場合があります、第４章４で紹介した吉田さんのインタビューの中でも、それを危惧して相談に行くことを躊躇する発言があった。つまり、「ひきこもり」当事者がどれだけの費用負担を担えるかという、当事者または家族の経済力が、「ひきこもり」当事者たちへの支援の種類や量を左右するという経済格差が起こってしまうのである。どの人にも必要な支援を必要な分だけ提供できるような公的サポートの充実が早急に望まれる。

さらに社会参加支援の前提となる、「ひきこもり」当事者の生活自体を支えるための公的支援についてみていきたい。吉田さん（第４章４参照）のような、親なき後の子どもの将来の不安に応える公的支援はあるのだろうか。残念ながら応えは否だ。現在、ひきこもりの公的支援には、大きく分けて３つある。就労支援、社会保障、公的扶助だ。だが自宅からほとんど出ることができない「ひきこもり」当事者に、就労支援を行うのは難しい。吉田さん自身も９ヶ月の訓練を経て、週一回の午後だけの参加が精一杯と語っていた。また、満を持して就労支援をすべて行えたとしても、就労への道は非常に厳しく、経済状況の悪化や労働者派遣法、規制緩和などの企業擁護のための法制度によって、今日の就労状況は悪化の一途を辿っている。１５歳から３４歳までの若年失業者のうち、失業期間が１年以上

に及ぶ長期失業者の占める割合は、一貫して上昇している。1991年、10.4%だった長期失業者率は、2005年には29.5%とほぼ3倍に上昇している²。また吉田さんが就労していた1990年は、20.2%だった非正規雇用率が、2009年には33.4%と、わずか20年間に、労働人口全体の3分の1を超える状況になっている。また年間通して就労しているにもかかわらず、源泉徴収票記載の年収が200万円に満たない給与所得者が、1990年には768万人で、労働力人口の19.5%だったものが、2009年には、1099万人と増加し、労働力人口の24.4%に達しており³、就労支援の先にある労働環境はその過酷さが年々増している現状である。

「ひきこもり」になったきっかけについても、「職場になじめなかった」(23.7%)、「就職活動がうまくいかなかった」(20.3%)と、就職に関することが44%を占めている⁴。対人関係に困難を抱え、多くの挫折経験があり、長期に渡り「ひきこもり」経験を持つ人が、現状のような労働環境の中で、個人の努力だけで果たして継続して就労していけるのか疑問である。労働市場というフィールドの問題点を棚上げにして、自己責任に基づく自己努力のみに肩入れしている状況が伺える。

次に社会保障についてであるが、年金保険は個人の「拋出」に伴うものなので、国民年金を払ったものだけに受給資格がある。就職そのものが困難を要し、生活費を親にみてもらう状況の吉田さんが年金保険料を納めるのは非常に難しいといわざるを得ない。納付が困難な人には、国民年金の免除・減免手続きもあるのだが、情報が必要な人には届いていない現状で、平成19年度厚生労働省の資料を元にした計算では、申請すれば全額免除となる人は521万人(所得状況から免除となるか機械的に推計)いるのに対して、実際申請している人は202万人⁵で、約300万人もの人は申請しておらず、苦しい生活状況の中、納付していたり、未納のまま放置したりしている。また所得状況による計算では、例外的措置としての免除や猶予の対象者が、国民年金第一号被保険者の80%に及ぶ現状であり、制度としての正常性を疑わざるをえない⁶。何らかの障害になった時、困窮している時に役立つはずの社会保障のしくみから、社会的弱者である吉田さん一家は排除されているのである。

さらに、「最後のセイフティーネット」と言われる公的扶助である生活保護制度であるが、親と同居しており、両親が扶養できる間、吉田さんにはその受給資格がない。つまり、両親が経済的困窮や病気、死亡などにより吉田さんを扶養できなくなって初めて、生活保護の受給資格が生まれるのである。吉田さんは若者支援施設とも繋がっているのに、親亡き後、スタッフの支援を受けながら自分で生活保護課に出向き、申請を行えるかもしれない。しかし、まだどこにも繋がっていない「ひきこもり」当事者に生活保護が必要となった時、いったい誰がつないでいくのだろうか。

以上のように考えていくと、吉田さんの不安は、個人的な悩みなどではなく、生存を脅かす社会的なサポートの欠如と、それを家族だけで補おうとして必死にやってきた家族福祉の限界を提示している。つまり若年者の高い失業率にみられるように就業者にとって過酷な労働市場を構成している労働基準法の問題と、一人ひとりの事情に対応しきれていな

い福祉制度の問題によって編み出された構造的な問題だということだ。個人的な問題ではなく、構造的な問題だからこそ、日本に155万人もの「ひきこもり」親和群が存在しているのである⁷。

また、このような不安を抱えているのは、もちろん吉田さんだけではない。第1章2（2）で述べたように、NPO法人全国引きこもりKHJ親の会における実態⁸によると、「ひきこもり」当事者の親の平均年齢は、母親が平均60.18歳であり、最年長が80歳、父親は平均が64.41歳、最年長が77歳と高齢化している。また「ひきこもり」当事者の年齢も、平均31.67歳で、最年少が14歳、最年長が51歳と報告されている。さらに「ひきこもり」期間は10.21年であり、最長が34年とあり、退職し公的年金を受給する年齢に達する高齢の親が、長年に渡り、「ひきこもり」子どもを支え続けている姿が伺える。

実際、内閣府は「ひきこもり支援者読本」⁹の中で、現在の生活や親亡き後のことなど、当事者や家族からの様々な不安を受けて、「親が高齢化、死亡した場合のための」自助として、ファイナンシャル・プランナーである畠山・浜田が、「ひきこもり」の子どもが親なき後も一生涯、生活していけるようなライフプランの親の資産活用をアドバイス・紹介している。サバイバルプランとして、親の年齢、子どもの年齢をもとに、「ひきこもり」の子どもが亡くなるまで年間収支と貯蓄残高をシュミレーションし、「将来なんとなく不安」より「はっきりとした不安」としてライフプランを描きだし、生活コストを下げたり、資産の活用をアドバイスしたりしている。切実な問題に、現状でできる限りの代替案を提案しているが、親がいない、もしくは親に期待できない「ひきこもり」当事者や、資産が乏しい親はどのようにしていくのだろうかという点には触れられていない。

以上のことについて、樋口¹⁰は、「ひきこもり」を社会的排除という視点で言及している。「ひきこもり」の公的支援として、現在、若者支援施設、地域若者サポートステーション、ジョブカフェなど、それぞれの相談に応じ「参加」の機会が創られている。しかし、そこには、その「参加」を支える基盤となる、現金や社会サービスの「給付」が完全に欠けていることを指摘している。つまり、就労支援やスキル支援、人と関わる機会を作るなど、「ひきこもり」当事者の社会参加を促しながらも、その前提となる『ひきこもり』当事者が生活することそのものを支える仕組みがないというのである。「抛出」にもとづく社会保険制度では、仕事に就いたことのない無業者、長期に渡る失業者、社会保険加入に満たない非正規労働者など職業生活の不安定な若者が、職業教育訓練やその他の社会サービスへアクセスしたり、無業や求職期間の生活を支えるような所得を得たりすることは困難だと指摘している。また社会的排除に陥る若者が再び教育・職業訓練・雇用に「参加」できる仕組みと同時に、社会保険による抛出の実績に依拠しない所得保障制度があるイギリスのニート政策と、日本の若者支援とを比較し、「日本における『ひきこもり』の困難さは、一人一人の抱える具体的な課題を意味する以上に、社会サービスの不在を物語っている」と言及している。

②啓発について

第4章のインタビューにあったように、「ひきこもり」経験者たちは困った状況においてもなお、「他者へ相談する」という選択肢を思いつかず、その状況に翻弄されていた。また「誰かに話を聴いて欲しい」と望みながら、そのような機会を得ることなく、状況が悪化していった人もいた。このような状況にならないよう、困っていない時にすべての人に対して、「ひきこもり」になった時どのような支援を受けることができるのかという啓発活動を行う必要がある。全ての人の生活が、「学校に行って企業に就職すること」が前提となって構成されている社会では、学校に行けない状況になった時どんなことが待ち受けているのか、自宅から出られなくなって就職ができなかった時どうすればいいのか、まったく予想がつかない。「ひきこもり」になった時には、どこに相談に行ったらいいのか、「ひきこもり」になった人はどんなことに困っているのか、何をつらく感じているのか、そして実際に相談に行った人はどんなふうになんか楽になっているのか、どんな支援が受けられるのかなど、小学校のうちから知る機会を得ると、自分が「ひきこもり」になった時だけでなく、身近な人が「ひきこもった」時にも理解が深まり、支援の輪が広がりやすい。

第2章で、当事者が社会に歩み寄るために必要な支援とは何かを、「かたつむり学舎」での実践から考察し、また第3、4章で、「ひきこもり」経験者のインタビューを分析した。そこには共通して「他者からの眼を気にして」動けない彼らがいた。その「他者」とは、「ひきこもり」当事者が感じる「世間の眼」であり、「ひきこもっている」自分に対する「社会的な評価」を意味する。多くの「ひきこもり」当事者が「家族に申し訳ない」と思いながら(71.2%)、約半数が「他人がどう思っているのかとても不安」(50.8%)、「知り合いに合うことが不安になる」(47.5%)と「社会的な評価」や「世間の眼」を気にして、ひきこもっている。また、「生きるのが苦しい」(47.5%)と感じている人は、「ひきこもり」当事者の約半数に及び、さらに「死んでしまいたい」と思っている人が35.6%¹¹と、3割を超えているのである。これは忌々しき事態である。

自立とは、なんでも一人でできるようになることではなくて、「依存する相手が増えること」である¹²。これまで親だけに頼っていた「ひきこもり」当事者たちが、最初に関わった支援者を始めいろんな人たちとつながり、自分の状況に合わせて様々な場面で多くの人に頼れるようになった時、それを自立と呼ぶのだろう。そのような理解を前提とした、循環性、多様性、関係性の充実に図る¹³ような教育がすべての人において必要である。

では次に、そのような啓発活動を具体的にどのように行なっていくか。上記のような趣旨で、啓発活動を教育の一貫として中学校、高校で取り組んでいるアメリカの例を紹介したい。プログラム内容は、「ひきこもり」ではなく自殺を扱っており、ソーシャルワーカーを中心として行った、学校全体を対象とした「自殺予防プログラム SOS (Sign of Suicide) Program」¹⁴である。全米保健センター(the National Center for Health Statistics)の調査によると、15歳から24歳の若者の自殺率は、1950年から2007年現在までで3倍になっていた。この事態を改善し、思春期の子どもたちの自殺を減らす目的で、行われた取り組

みである。このプログラムは、子どもたちが相互に助け合えるように、そして学校や共同体の誰かに助けを求めることができるように組み立てられている。そのために、まずは自殺の兆候について全ての生徒が理解し、誰にでも起こりうるものとして教育されている。さらに、自分もしくは誰かの、自殺の兆候に気づいたら、兆候を示す相手のために自分がいることを伝え、いつでも助けを求められるような手続きを共有している。スクールソーシャルワーカーは、学校や生徒たちが利用できる外部機関と連携を取り、ネットワークを組み、教員と一緒にプログラムを行なっていく中で、学校が地域と連携して自分たちで自殺予防プログラムを実施していけるようにサポートしていく。例えば、このプログラムを応用して、「自殺」というテーマの代わりに、「ひきこもり」「社会的弱者」や「自分の権利を守ること」などをテーマにして、社会で生活するため必要な知識の共有と、他者への配慮の方法、助けを求める方法など、教育の一環として取り組むこともできるだろう。そうすることで、社会に出る前の段階で、循環性、多様性、関係性が私たちの生活にとってどのように重要であるのかを、子どもたちに伝え考えてもらうことができる。

3 「ひきこもり」ソーシャルワークにおけるエンパワーリング

(1) 当事者の現状を肯定する関わり

支援者が「支援目標」を用意すること自体が、「ひきこもり」当事者を否定的に見ることにつながる。例えば、「就労」を支援目標とすると「ひきこもり」当事者を「働く能力の低い・足りない人」とみなすことになってしまう。「人間関係」を支援目標とすると「コミュニケーション力が低い・足りない人」とみなすことになってしまう。

そのため、「ひきこもり」当事者を全肯定するためには、何よりもまず「支援者が勝手に支援目標を用意しない」ことが絶対条件である。

(2) 当事者や家族が受け入れられていると感じる場や人の存在

「ひきこもり」当事者が希望を持つのは、「自分と似たような人が、楽しそうに人の輪の中でそこそこ暮らしている」のを知ることである。「ひきこもり」当事者が、既に上手くやっている「ひきこもり」経験者との関わりを持ち、いろんな不安を共有できたら、それはとても大きな支援となるだろう。自助グループ活動や、居場所活動も部分的にはこれにあたるかもしれない。現在の多くの居場所活動では、「ゆくゆくは就職して巣立っていく」という前提で居場所が設定されており、そのような居場所では、上手くやれている経験者は既に居場所を“卒業”しており、交流する機会が少ない。今後さらに「ひきこもり」当事者や経験者、そして何かしら応援する人も含めて、常時交流できる場所が必要である。

(3) 当事者ニーズを把握、実現させる関わり

「ひきこもり」当事者からニーズが出たら、それを実現するために、「ひきこもり」当事

者と作戦を練り、必要に応じて仲間を集め、状況を整え、支援者は伴走する。この必要に応じた環境への要請が「ひきこもり」当事者を取り巻くネットワークとなっていく。支援者は、「ひきこもり」当事者から出たニーズを実現しようとすればするほど、支援者の経験値として、また伴走した結果として、多くのネットワークを構築していくこととなる。これが支援者にとっても社会資源となり、支援者自身を支えたり、また別の「ひきこもり」当事者を支えたりすることに役立つという相互依存的な良好な関係性を成熟させていく。ニーズは時に、「ひきこもり」当事者の代弁であったり、「ひきこもり」当事者が苦手な人達との関係性を良好にすることだったりするかもしれない。そして「ひきこもり」当事者の代弁や周囲との関係性を良好にした結果、困りごとが解消すると、さらにやりたいことがニーズとして出やすくなってくるという好循環が起りやすくなる。

4 「ひきこもり」ソーシャルワークにおけるサービス調整

(1) 当事者ニーズ、当事者の特性との擦り合わせ

サービス調整を行う際、重要であるのが、サービス調整自体を目的化しないということである。就学、就労、コミュニケーション・スキル獲得など、社会的にも求められるサービス調整については特に注意してソーシャルワークを行う必要がある。

どのようなサービス調整を行うにせよ、その当事者の特性としっかり擦り合わせる必要があり、当事者の特性に合っていないサービス調整は持続が困難となる。

(2) サービス調整による当事者への影響のアセスメント

当事者のニーズからでたサービス調整であっても、当事者への負荷を考えた場合、持続が困難になることがある。当事者への負荷とは、その活動をするお金が続かないという経済的負荷もあれば、第2章実践例Ⅰの山川さんの受験勉強のように精神的負荷もあるだろう。サービス調整においては、絶えず当事者のニーズに寄り添いつつ、当事者への負荷の様子を観察しつつ、持続可能性を検討しつつ、当事者の試みが当事者に“挫折経験”と定義されないよう変化に対する対処をしながら、エンパワーリングしていく必要がある。

(3) 家族や当事者に関係する人への影響のアセスメント

「ひきこもり」ソーシャルワークでは、アドボカシー、エンパワーリング、サービス調整など、当事者に何らかの影響を与える働きかけを行う際、当事者ニーズを中心に支援を行っていくが、それは家族ニーズや家族の意見を無視するということではない。「ひきこもっている」人の多くは、家族（多くが親）と一緒に暮らしており、家族と「ひきこもっている」人はお互いに多大な影響を与え合っている。それは、親が「ひきこもっている」人の生活を支えるといった経済的・生活的支援、挨拶や会話といった直接的なコミュニケーションもちろん含まれるが、トイレの利用、ドアの開け閉めや茶碗を洗う音など生活す

る上で起こる物音に至るまで、一緒に生活することで起こる様々な関わりの中で、互いに多大なる影響を与え合っている。つまり、「ひきこもり」当事者に関わり、何らかのサービス調整を行って変化をもたらすということは、その変化が「ひきこもり」当事者と一緒に暮らす家族に影響を及ぼすということを意味する。サービス調整を行う際には、その結果、その両者がより良好な関係を構築できることに少しでも役立つような提案を行うことが望ましい。

そのためには、「ひきこもっている」人のサービス調整をする際、絶えず親を視野に入れた関わりをし、また親を支援する際には、絶えず「ひきこもっている」人を視野に入れた関わりを行っていく。具体的には、「ひきこもり」当事者に対してサービス調整をする場合には、新たなサービス調整を行った後、「ひきこもり」当事者がどう変化しそうか、当事者に直接尋ねる。さらにその「ひきこもり」当事者の変化によって起こりうる家族への影響について、当事者にも推測してもらう。必要があれば、その影響について家族と話し合うことも必要になる。また逆に、母親に支援者がアドバイスをする場面では、「もし今話したアドバイスのように、お母さんが行動されたら、『ひきこもっている』息子さんはどのように反応しそうですか」と、サービス調整後の息子さんの行動について想像してもらい、教えてもらうことである。実際には母親のみの来談であっても、相談場面では、「ひきこもっている」息子さんが一緒にいて話を聴いてリアクションしているかのように一緒に想像しながら、相談に乗ることが望ましい。

（４）社会の中にまだ存在していない必要な選択肢を創造していくネットワーク

「かたつむり学舎」で当事者に関わる中で、「同じ趣味の人と逢って話をしたい」「家の中でできる仕事をしたい」「私と同じ悩みを抱えている人と話したい」「同じ母親としての立場にある人と話したい」「遊びながら楽しく誰かと楽器を演奏したい」「誰かと一緒に食事をしたい」「勉強を教えてあげたい」など実に様々なニーズがあることを実感している。それらを全部実現させたいと思うのだが、実現のためには、実に多くのネットワークが必要となる。当事者に合う時間帯で、当事者の特性をふまえつつ、仮に失敗してもより心地よい体験となるために、「ひきこもり」の支援者としてではなく、まず一市民として、どれだけ私たちが社会の中でつながっているかを試されている。

5 「ひきこもり」ソーシャルワーク実践への可能性

（１）時間：生まれてから一生涯に関わる支援

ソーシャルワークという言葉は、研究者によってその使い方が異なる。

「ひきこもり」「ソーシャルワーク」という 2 語を CiNii で検索すると、2005 年から 2013 年にかけて、5 本の論文があり、いずれも山田¹⁵と山本¹⁶の論文である。山本は論文の他にも、「ともに生きともに育つひきこもり支援―協同的關係性とソーシャルワーク―」¹⁷と

題した著書も出しているが、山本がソーシャルワーカーとして出会った関わりをソーシャルワークと表現しており、その著書の中では「親の問題」「本人の育ち」として言及しており、「ひきこもりを親と子の課題として捉える」とし、親子間の問題として捉え、その「育ち」に介入することをソーシャルワークとしている。「育ち」の支援として医学モデルに基づくアセスメントやアウトリーチなど介入が行われているが、そこに当事者のニーズがどう関わっているのかについては全く触れられていない。また事例の分析も心理学的な個人の問題として言及するに留まっている。また山田は、個別面接で「ひきこもり」当事者をアセスメントした結果、親からの心理的な自立が不十分、対人関係が十分に取れないと見立て、そのため介入としてグループワークを行って、その後の変化を考察している。これをソーシャルワークと表現しているが、これは個人の変容を目的とした心理学的アプローチといえる。

第2章2節でも述べたように、筆者は、「ひきこもり」への支援におけるソーシャルワークを、門田のパワー交互作用におけるソーシャルワークに依拠し、「ひきこもり」当事者及び家族の状況分析、当事者のニーズ把握、そしてそのニーズに添ったアドボカシー、エンパワーリング、サービス調整こそ、「ひきこもり」ソーシャルワークであると考えます。

そして第4章の「ひきこもり」経験者たちの語りで見えてきたように、「ひきこもり」状態は、ある日突然、交通事故に遭ったように起こるわけではなく、日常的なパワーレスネス状態の積み重ねから、選択肢がなくなっていく、結果として「ひきこもり」を余儀なくされている。このことから、「ひきこもり」ソーシャルワークは、「ひきこもり」になってから関わり始めるのではなく、多様な生き方を支援する選択肢の創造や「ひきこもり」に関する啓発も含め、生まれてから誰しもが一生関わられるソーシャルワーク支援として位置づけられる必要がある。

（2）空間：家族、学校、社会など生活すべてのフィールドに関わる支援

上記のように考えると、「ひきこもり」ソーシャルワークを実践する者は、学校や病院など、ある特定の所属機関に属しては、本来のソーシャルワーク実践は不可能である。なぜなら地域に暮らす人の生活すべてに関わる必要があるからである。現在、中学校にスクールソーシャルワーカーが置かれているが、中学時代、不登校や家庭状況が困難だという理由で関わっていても、卒業してしまえばスクールソーシャルワーカーはもう関わることができない。また第4章3節の佐藤奈美さんのようにクリニックに相談に行っている間、関わりがあっても、お金がなくなって相談に来なくなったら関わりが途切れてしまう。「ひきこもり」ソーシャルワークを実践するものは、所属機関を超えて、地域の誰もが継続的に利用できるものでなくてはならない。

6 成果と課題

本研究による成果について述べたい。第2章では、「かたつむり学舎」の実践について考察し、「ひきこもり」当事者への支援実践である「かたつむり学舎」の実践がパワー交相互作用モデルのソーシャルワーク実践であることが明らかになった。そして、第1章3(4)～(6)に記した「ひきこもり」支援の課題とされていた連携、ネットワーク構築、支援の不足、支援内容のミスマッチ、支援目標の不一致について、「かたつむり学舎」の実践によって一定の成果を上げることが明らかとなった。それは、ある同一の支援者が当事者や家族と良好な関係性を築き、常に当事者のニーズに寄り添い続け、それを実現するために当事者や家族を取り巻く環境にネットワークを構築しつつ、アドボケイトしながら働きかけ、また環境からの可能なフィードバックを当事者に働きかけ、当事者をエンパワーリングしていくという一連のソーシャルワークの必要性を示唆するものである。

また第4章では、4名の「ひきこもり」経験者のインタビュー調査によって、「ひきこもり」経験者の世界を部分的にはあるが知ることができ、「ひきこもり」経験者たちが何を考え、何に困り、何を求めているのかということを知ることができた。4名の「ひきこもり」経験者たちは、それぞれ性別も年齢も家族構成も現在の状況も異なるが、共通していることは、彼らは「ひきこもった」と同時にパワーレスネスな状態になったのではなく「ひきこもる」以前からパワーレスネスな状態に陥っていたということである。パワーレスネスな状態は、対人関係だけでなく、構造的にも引き起こされていることも示唆された。つまり「ひきこもる」以前のパワーレスネスな状況に陥っていた時に、適切な支援を受けていなかったということである。適切な支援を彼らが受けることができなかった理由は幾つかあるが、1つには、当時の彼らを支えられる支援が社会の中に存在していないことが挙げられる。もう1つには、「相談するという選択肢があることを知らなかった」「どこに相談すればいいかわからなかった」といった支援の存在についての社会的認知の課題も浮き彫りになった。

本論では、一貫して「ひきこもり」当事者のニーズを中心としたソーシャルワークの必要性について言及してきた。それは、これまで多くの他分野の支援では当たり前とされている当事者のニーズを中心とした関わりが、こと「ひきこもり」支援においては「ひきこもり」当事者のコミュニケーションスキル不足という理由で置き去りにされ、より困り感を発信しやすい立場にある家族ニーズや就労問題といった社会的ニーズにすり替えられてきたという状況があるからである。「ひきこもり」当事者のニーズに添い、それを実現していく支援がいかに重要であるか、また当事者ニーズに寄り添う支援がいかに早期に必要であるかを、「かたつむり学舎」の実践例や「ひきこもり」経験者のインタビュー調査は明らかにしている。

一方で、本研究の課題も残っている。今回の研究では「かたつむり学舎」の実践例、及び4名の「ひきこもり」経験者のインタビュー調査をもとに分析、考察を行ったわけだが、標準化するには実践例が少なかった。今後、より多くの「ひきこもり」当事者や「ひきこ

もり」経験者の語りを得ることによって、当事者のニーズと効果的なソーシャルワークのあり方について支援の標準化を試みていきたい。

今回、学校ソーシャルワークで用いられたパワー交互作用モデルによるソーシャルワーク論を、「ひきこもり」支援にも応用し、「ひきこもり」ソーシャルワーク論を展開していったわけだが、パワー交互作用モデルによるソーシャルワーク論の限界として、動的で様々な方向性の関わりをどう表現していくかということや、パワーレスネスについて、対人関係以外の構造的なパワー交互作用についてどのように表記していくかという課題も明らかになった。今後すべての「ひきこもり」支援の状態をパワー交互作用モデルによるソーシャルワークで説明するためには、「ひきこもり」支援の特性をふまえ一定の修正が必要であると考ええる。以上の点から、「ひきこもり」支援におけるパワー交互作用モデルによるソーシャルワーク論において再考の余地があるので、今後の課題としたい。またニーズ論についてもマズローの欲求階層論を採用したが、これについても「ひきこもり」の特性をふまえ、よりニーズが捉えやすいものをさらに再考する余地がある。なぜなら「ひきこもり」当事者は、ニーズを明確化するまでの過程で難渋していることが多いので、ニーズがどのような状態にあるのか支援者や家族が詳細に把握できることによって、当事者のニーズに添った支援をより展開できる可能性が増えるからである。これについても今後の研究課題としたい。

むすびに

本来、国の法律や制度、政策は、そこに暮らす人々の精神保健を増進したり、人々の人権を守ったりするためのものであるが、結果的に、人々の生命や暮らしを破壊するような法律や制度、政策になっていた歴史がある。らい予防法¹、精神障害者の私宅監置²、水俣病³、HIVに関すること⁴など、薬害・公害での被害、病気や障がいなど様々な理由で生活そのものが困難になっている人たちがこれまで精神保健の範疇でどのような処遇をされてきたかという歴史を辿れば、それは明らかである。そこには共通する過ちがある。それは、当事者不在ということだ。当事者に関する法律であるにも関わらず当事者不在のまま決定され、その国の決めた法律に基づいて、ある時、ある場所で、警察、裁判官、医師、看護師、保健師、心理士、ソーシャルワーカー、教職員と呼ばれる専門家たちも“社会”のシステムの中でパターンリズムを行使する側の“援助者”として立ち振舞い、当事者に知らせることなく害のあることを行わせていたり、当事者の同意なく家族と引き離させたり、隔離させたり、強制的な治療や身体拘束といった、当事者の人権を侵害する脅威者となってきた歴史がある。

そして「ひきこもり」についても当事者のニーズの確認がないまま、法律や施策によって当事者不在の「ひきこもり」支援が行われるのではないかと危惧している。2013年（平成25年）5月に厚生労働省から出された「ひきこもり関連施策」⁵では、「ひきこもり等児童福祉対策事業」の内容として「ふれあい心の友訪問援助・保護者交流事業」「ひきこもり等児童宿泊等指導事業」に37億円の事業予算が組まれている。困っている現状に対して支援すること事態には何の反論もないが、問題なのは、その流れがどれも「ひきこもり」当事者のあり方を問題視するところからスタートし、コミュニケーション能力の向上や社会参加のための力をつけさせるなど、「ひきこもり」状態の改変をねらって、アウトリーチと呼ばれる家庭訪問やメンタルフレンドの派遣、集団的に生活指導を行ったり心理療法やレクレーションなどを行おうとしたりしているところである。「ひきこもり」支援といいながら、国の打ち出している「ひきこもり」関連施策の目的や実施内容からは、「ひきこもり」当事者のニーズを把握するという視点がみられない。当事者ニーズの把握がないところに、当事者にとって良い支援などありえない。これまで国がいろいろな「ひきこもり」支援を実施してきたが“困難事例”というレッテルを貼られた一定の層に対して効果が出せなかったのは、その出発点が当事者ニーズに添っていないからに他ならない。

さらに付け加えるならば、現存する支援のあり方は前提として、経済的な面も含め“家族による支援”を必須としており、“困難事例”と呼ばれる当事者の多くは、“家族による支援”がないことによって当事者ニーズまで行き着かないという事態を招いているのである。総務省が行っている「ひきこもり」の人を含む「孤立無業」⁶の調査も、国を支える労働力、生産力、納税者としての若者の「無業」をどうするかということが第一義的な目的であり、そこには「孤立」した人をどう支えるかという視点が失われている。そして失業

や不況によるリストラなど労働市場の側の問題が、“若者就労問題”⁷にすり替えられ、さらに支援が「無業」の若者を“改善”するための対策にすり替わっている。

誰のための「ひきこもり」支援かを考えた時、それは当事者のための支援に他ならない。私たちはソーシャルワークを実践する時、その活動が国や法律や施策に当てはまるのかどうかを基準として動くのではなく、第一に当事者ニーズに添っているのかを基準としなければならない。これまでの歴史の過ちが証言しているように、国や法律は、時として人を社会の中で管理し、人権を侵害する方向に動いていくことがある。しかし、管理という視点では、人を支援することはできない。

今後も「ひきこもり」に関して、国が関与し法律や施策が打ち出される時、それに伴い「ひきこもり」に関連する“ソーシャルワーク実践”や“ソーシャルワーク”という言葉が耳障りの良い文脈で使用される場面が増えるかもしれない。そうであれば、私たちは、そこに当事者ニーズがあるかどうか、今後さらに、意識して注意深く動いていかなければならない。なぜなら当事者ニーズのないところにソーシャルワーク実践などないからである。

豊田⁸は「窮状を訴える一人ひとりに添いつつ、援助する」ことをソーシャルワーク (social work) と呼び、一人ひとりへの「添い」の重要性を提言している。「社会的に生活すること」に不都合が生じた一人ひとりに寄り添って行う援助こそがソーシャルワークであり、「ソーシャルワークは『添いの知』の実践である」と述べている。支援者が当事者に添っているか否かは、当事者からの言語的な表現に加え、当事者の穏やかさ、心地よさ、笑顔といった身体感覚の体現によっても知ることができる。支援者は、それらを常に捉え、当事者ニーズを顕在化し、その充足に向けて当事者と一緒にどれだけ楽しく取り組めるかが、ソーシャルワークの専門性⁹といえるのではないだろうか。

(2014 年 9 月 21 日受理)

【引用文献】

第1章

- 1 斎藤環 1998『社会的ひきこもり—終わらない思春期』PHP 新書 25 頁
- 2 富田富士也 2000『新・引きこもりからの旅立ち—不登校「その後」・就職拒否に悩む親子との関わりの記録』ハート出版
- 3 塩倉裕 2003『引きこもり』朝日新聞社 215 頁
- 4 井出草平 2008「社会学的問題としての「ひきこもり」—「ひきこもり」の社会学定義と「ひきこもり」を社会学が扱う意義について」年報人間科学 29 1-23 頁
- 5 厚生労働省 2010『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』6 頁
http://www.ncgm.kohnodai.go.jp/pdf/jidouseishin/22ncgm_hikikomori.pdf
- 6 前掲 5 7 頁
- 7 川北憲人 2007「こころの健康についての疫学調査に関する研究」 1-8 頁
<http://www.ncnp.go.jp/nimh/keikaku/epi/Reports/H18WMHJR/H18WMHJR01.pdf>
- 8 内閣府 2010「若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）」 1-12 頁
<http://www.ncnp.go.jp/nimh/keikaku/epi/Reports/H18WMHJR/H18WMHJR01.pdf>
- 9 境泉洋、植田健太「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書②」（2005）
<http://www.khj-h.com/pdf/2005tyousa.pdf>
- 10 境泉洋、中村光「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書③」（2006）
http://www.khj-h.com/pdf/hiki_tyousa3.pdf
- 11 境泉洋、中垣内正和「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書④」（2007）
<http://www.khj-h.com/pdf/06houkokusho.pdf>
- 12 境泉洋、川原一紗「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書⑤」（2008）
<http://www.khj-h.com/pdf/tyousa2007.pdf>
- 13 境泉洋、川原一紗ほか「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書⑥」（2009）
<http://www.khj-h.com/pdf/08houkokusho.pdf>
- 14 境泉洋、野中俊介ほか「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書⑦」（2010）
http://www.khj-h.com/pdf/tyousa_7.pdf
- 15 境泉洋、堀川寛ほか「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書⑧」（2011）
<http://www.khj-h.com/pdf/10houkokusho.pdf>
- 16 境泉洋、平川沙織ほか「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書⑨」（2012）
<http://www.khj-h.com/pdf/11hikikomori.pdf>
- 17 境泉洋、斎藤まさ子ほか「「ひきこもり」の実態に関する調査報告書⑩」（2013）
<http://www.khj-h.com/pdf/12hikikomori.pdf>
- 18 青木美紀子「福岡市における成人期のひきこもり支援--福岡市精神保健福祉センターの取り組みを中心に」『教育と医学 58(11)』（2010）1033-1042
- 19 富田富士也 1992『ひきこもりからの旅立ち—登校・就職拒否から『人間拒否』する子どもたちとの心

- の記録』ハート出版
- 20 ニュースタート事務局は、1994 年からひきこもりやニートの若者支援をしている NPO 法人で、ひきこもり支援を行うなかで訪問支援も行っている
 - 21 前掲 5 41-42 頁
 - 22 内閣府 2013「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」16 頁
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/shiensya/h24/pdf_index.html
 - 23 前掲 5 65 頁
 - 24 前掲 22 1 項
 - 25 秋田敦子 2007「ひきこもり克服支援への取り組み」精神神経学雑誌 第 109 巻第 2 号
 - 26 川口和正 2005「"市民起業家"という生き方(12)家族的なつきあいでひきこもりの若者たちをサポートする--NPO 法人わたげの会・社会福祉法人わたげ福祉会 代表 秋田敦子さん」企業診断 第 52 巻第 1 号
 - 27 奥野潔和 2006「地域に生きる 地域で支える 社会的ひきこもりに対する就労支援「(有)キャッツハンド」について」月刊福祉 第 89 巻第 5 号
 - 28 工藤定次 2004『脱！ひきこもり-YSC（NPO 法人青少年自立援助センター）の本』ポット出版
 - 29 後藤雅博・香月富士日 2005「社会的ひきこもり」への支援活動の現状と課題（特集 こころの健康問題への挑戦）公衆衛生 第 69 巻第 5 号
 - 30 竹森元彦・川井 富枝・鷺見 典彦 2012「ひきこもり」の現状と支援の実践からみた地域支援のあり方について」香川大学教育学部研究報告. 第 1 部 第 137 号
 - 31 竹中哲夫 2007「ひきこもり支援の方法を探るー「長期・年長ひきこもり」を中心にー」福祉研究第 97 巻
 - 32 竹中哲夫 2010『ひきこもり支援論ー人とつながり、社会につなぐ道筋をつくる』明石書店 184-189 頁
 - 33 前掲 5 66 頁
 - 34 前掲 18
 - 35 板東充彦 2010「ひきこもり支援活動の実情--地域のサポートグループから見えるもの（特集 ひきこもり・不登校の今を考える）」教育と医学 第 58 巻第 11 号
 - 36 前掲 22 13 項
 - 37 前掲 5 66 頁
 - 38 花嶋裕久 2011「ひきこもりの若者の居場所と就労に関する研究：居場所から社会に出るまでのプロセス」心理臨床学研究 第 29 巻第 5 号
 - 39 上山和樹 2000『「ひきこもり」だった僕から』講談社 156 頁
 - 40 前掲 22 13 項
 - 41 前掲 22 30 頁
 - 42 前掲 22 32 頁
 - 43 前掲 22 32 項

- 44 磯崎彦次郎、田中成幸 2013「ニート・ひきこもり問題への支援のあり方(後編)ニート・ひきこもり本人への支援のミスマッチ解消に向けて」NRI パブリックマネジメントレビュー第 122 巻
- 45 今田高俊 2000「支援型の社会システムへ」支援基礎論研究会編『支援学—管理性をこえて』東方出版 11 頁
- 46 日置真世 2009「困難を抱える子ども・若者とその家族への地域生活支援の意義と今後への提言—支援実践を通しての分析と検討」子ども発達臨床研究 第 3 巻
- 47 東京都青少年・治安対策本部 2008「東京における若年者支援の現状と施策への提言—社会につながるきっかけづくりのために—」 13—18 頁
- 48 前掲 32 37—39 頁
- 49 前掲 5 66 項
- 50 石川良子 2007『ひきこもりの「ゴール」：「就労」でもなく「対人関係」でもなく』青弓社 230—235 頁
- 51 前掲 22 26 項
- 52 前掲 22 27 頁
- 53 福崎はる 2012「ひきこもり支援における事例研究—かたつむり学舎での実践から—」社会福祉研究所報 第 40 巻

第 2 章

- 1 2008 年より筆者が運営する民間の不登校・ひきこもり支援組織 かたつむり学舎ホームページ <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~katatsumuri/>
- 2 門田光司 2000「学校ソーシャルワーク実践におけるパワー交互作用モデルについて」社会福祉学 第 41 号第 1 号 71-85 頁
- 3 門田光司 1999「わが国での学校ソーシャルワーク機能の必要性について」社会福祉学 第 40 巻第 1 号
- 4 門田光司 2002「(平成 13 年度) 第 3 回安田火災記念財団賞受賞者記念講演録 論文部門—学校ソーシャルワーク実践におけるパワー交互作用モデルについて」損保ジャパン記念財団叢書 No. 64
- 5 前掲 2
- 6 前掲 2
- 7 前掲 2
- 8 Maslow, A.H 1954 Motivation and Personality. Harper and Row. 小口忠彦監訳 1987『人間性の心理学』産能大出版部 改定新版
- 9 Bradshaw, J.R 1972 A taxonomy of social need. in McLachlan, G. (ed.), Problems and progress in medical care: essays on current research, 7th series. London: Oxford University Press, pp.70-82.
- 10 上野千鶴子 2011『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』太田出版
- 11 上田敏 1983『リハビリテーションとは』
- 12 前掲 2

- 13 Norlin,J.M, & Chess,W.A. 1997「Human Behavior and the Social Environment: Social Systems Theory. 3nd ed. Allyn &Bacon. p.24
- 14 前掲 8
- 15 佐々木秀和 1996「生涯学習実践の学習課題に関する理論的考察—A.H.マズローの欲求理論の批判的継承を軸として—」生涯学習・社会教育学研究 第 20 号
- 16 打田信彦 2012「ある事例を通じた世代間連鎖の考察—マズローのヒューマンニーズの階層からアプローチ—」近畿医療福祉大学紀要 vol.13(1)pp59~66
- 17 三島重顕 2009「経済学におけるマズローの自己実現概念の再考(1): マグレガー、アージリス、ハーズバーグの概念との比較」九州国際大学経営経済論集 15(2/3)pp69-93
- 18 横山利枝・原田朋代 2005「実践研究終末期がん患者の欲求と希望に関する研究—マズローの理論を用いた分析—」看護実践の科学 30(12)pp69-74
- 19 佐藤智子・末永篤彦・高崎ゆかり他 2004「不登校児が自己決定できるまでの看護の振り返り—マズローのニード論を用いての検討—」『日本看護学論文集 小児看護』 35 pp38-40
- 20 松井剛 2001「マズローの欲求階層理論とマーケティング・コンセプト」一橋論叢 126(5), pp495-510
- 21 前掲 15
- 22 田嶋誠一 2009『現実介入しつつ心に関わる—多面的援助アプローチと臨床の知恵—』金剛出版 101 頁
- 23 長谷川俊雄 2011『ひきこもり支援の多様性と今後の課題』内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室
- 24 本論第 1 章 3(4)で述べた「適切な支援を受ける上での本人に関する障壁」についてのネットアンケート調査の結果より参照。
- 25 前掲 23
- 26 岡部茜・青木秀光・深谷弘和・斎藤真緒 2012「ひきこもる若者の語りにみる“普通”への囚われと葛藤—ひきこもる若者へのインタビュー調査から—」立命館人間科学研究 25 67-80 頁
- 27 斎藤環 2012「「良い子」の挫折とひきこもり (特集 「よい子」の破綻とそこからの再生)」教育と医学 60(7), 582-588
- 28 東京都青少年・治安対策本部 2009『ひきこもる若者たちと家族の悩み』平成 20 年度若年者自立支援調査研究報告書
- 29 Townsend.P 著 山室周平監訳 1974『居宅老人の生活と親族網—戦後東ロンドンにおける実証的研究』垣内出版。服部弘子・一番ヶ瀬康子訳 1974『老人の家族生活—社会問題として』家政教育社。Townsent.P が、高齢者を対象に 1954 年から 1955 にかけてロンドンの東地区で実施した調査。社会的孤立研究の先駆けと言われている。それまで明確な区分のなかった「孤独」(loneliness)と「孤立」(social isolation)を区別し、主観的なものとしての「孤独」に対し、客観的な状態としての「孤立」を捉えようとした。
- 30 川瀬隆千 2013「教師バーンアウトの要因と予防」宮崎公立大学人文学紀要 第 20 巻 第 1 号
- 31 石川良子 2006「「ひきこもり」と「ニート」の混同とその問題: 「ひきこもり」当事者へのインタビューからの示唆」教育社会学研究 79 25-46 頁

- 32 前掲 31
- 33 芹沢俊介 2011 『『ひきこもり』をどう理解すべきか』『臨床心理学』11(3)324-329 頁
- 34 石川良子 2011 『『ひきこもり』の分からなさに向き合うことから見えたもの』『臨床心理学』11(3)330-335 頁
- 35 前掲 33
- 36 前掲 31
- 37 中山元 2007 『思考の用語辞典』146-150 頁
- 38 前掲 第2章2
- 39 前掲 26
- 40 林祐造・吉川悟・阪幸江[他]2001 「ひきこもりの心理教育的アプローチについての研究—不安と焦りを対象とした家族援助プログラムの開発」研究助成論文集(37)90-97 頁
- 41 前掲 第2章2
- 42 S Robert J. Kolenberg , Mavis Tsai 著、大河内 浩人訳 2007 『機能分析心理療法—徹底的行動主義の果て、精神分析と行動療法の架け橋』金剛出版
- 43 前掲 第1章53
- 44 鈴木晶子 2005 「引きこもり地域支援の現状と課題」東京大学大学院教育学研究科紀要 44, 227-239

第3章

- 1 寺下貴美 2011 「質的研究方法論：質的データを科学的に分析するために」日本放射線技術學會雑誌 67(4), 413-417

第4章

- 1 前掲 第2章2
- 2 工藤宏司・川北稔 2008 「『ひきこもり』と統計」荻野達史他編『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』p76-81
- 3 木村敏 1972 『人と人との間—精神病理学的日本論—』弘文堂
- 4 2000年1月28日、新潟県で起こった少女誘拐事件。誘拐された少女は当時9歳だった。加害者宅で9年2ヶ月の間、監禁され、その後発見されたことにより発覚した。犯人の男性が長期の「ひきこもり」状態にあったことで、「ひきこもり」と犯罪の関連性についてマスメディアに大きく取り上げられることとなった。碓井真史 2000 『少女はなぜ逃げなかったか』小学館文庫参照
- 5 2000年5月3日、佐賀県で起こった西鉄バスジャック事件。犯人は当時17歳の少年で、刃物で乗客や警官3名を切りつけ、2名が負傷し1名が死亡した。犯人の少年は高校に合格したものの不登校となり中退し、自宅でパソコンに熱中、家庭内暴力で家族を悩ませていた。前掲4の新潟事件とともに、「ひきこもり」若者、発達障害の少年が突如凶悪な犯罪を犯すかのような印象を与えるマスコミ報道がなされた。入江吉正 2014 『ある日、わが子がモンスターになっていた』ベストセレクト、高岡健

- 2009『発達障害は少年事件を引き起こさない』明石書店参照
- 6 中山元 2010『思考の用語辞典―生きた哲学のために―』筑摩書房 317-321 頁
 - 7 阿部真大 2011『居場所の社会学―生きづらさを超えて―』日本経済新聞出版 11-43 頁
 - 8 内閣府 2011「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）報告書」
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/school/kaisetsu.html>
 - 9 前掲 8
 - 10 前掲 8
 - 11 文部科学省「高等学校における中途退学者数と中途退学率の推移」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2013/11/13/1341420_2.pdf
 - 12 田中俊英 2014「日本で「ひきこもり」が成立した 5 つの理由」
<http://bylines.news.yahoo.co.jp/tanakatoshihide/20140112-00031505/>
 - 13 前掲 第 2 章 3
 - 14 稲田尚子 2009「高機能広汎性発達障害成人の主観的 QOL とその関連要因」平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 障害保健福祉総合研究推進事業報告書
<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/kousei/h21houkoku/katuyou01.html>
 - 15 厚生労働省「若者雇用関連データ（新規学卒者の離職状況に関する資料一覧）」
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/24.html>
 - 16 神尾陽子 2010「ライフステージに応じた広汎性発達障害者に対する支援のあり方に関する研究」国立精神・神経センター精神保健研究所
 - 17 前掲 第 1 章 8
 - 18 前掲 第 1 章 12
 - 19 中垣内正和 2007「大人のひきこもりの現状と問題点（特集 大人のひきこもり--長期化するケースにどう対処するか）」月刊地域保健 38(2), 44-52
 - 20 前掲 第 1 章 17
 - 21 前掲 19
 - 22 ヨハン・ガルトゥング著 高柳先男・塩屋保・酒井由美子訳 1991『構造的暴力と平和』中央大学出版部
 - 23 村澤和多里 2013「「ひきこもり」における透明な排除のプロセス」札幌学院大学人文学会紀要

第 5 章

- 1 前掲 第 2 章 2
- 2 樋口明彦 2007「日本における若者問題と社会的排除「適正な仕事」「活性化」「多元的活動」をめぐって」『社会的排除/包摂と社会政策』220-242 頁
- 3 湯浅誠 2011『活動家一丁あがり！社会にモノ言うはじめての一步』NHK 出版
- 4 前掲 第 1 章 8 33 頁

- 5 厚生労働省 2008「平成 19 年度末における国民年金第 1 号被保険者の内訳（粗い推計）」第 12 回 社会保障審議会年金部会 参考資料集 P23
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/11/s1112-9.html>
- 6 前掲 5
- 7 前掲 第 1 章 8 15 頁
- 8 前掲 第 1 章 17
- 9 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室 2011『ひきこもり支援者読本』
- 10 樋口明彦 2008「「ひきこもり」と社会的排除—社会サービスの不在がもたらすもの—」荻野達史他編『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』239-265 頁 ミネルヴァ書房
- 11 前掲 第 1 章 8
- 12 安富歩 2011『生きる技法』青灯社
- 13 中村尚司 2002「当事者性の探求と参加型開発—スリランカにみる大学の社会貢献活動—」『参加型開発—貧しい人々が主役となる開発へ向けて—』215-236 頁
- 14 James P.Clark and Michelle E.Alvarez 2010 “Response to Intervention A Guide for School Social Workers” Oxford University Press pp70-111
- 15 山田武司 2006「社会的ひきこもりにおけるソーシャルワークの視点」岐阜経済大学論集 40(1) 269-274 頁
- 16 山本耕平 2012「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって：若者問題に関する韓日間比較調査から」立命館産業社会論集 48(2) 1-20 頁
- 17 山本耕平 2009『ともに生きともに育つひきこもり支援—協同的關係性とソーシャルワーク』かもがわ出版

むすびに

- 1 「らい予防法」は、公共の福祉を増進することを目的として、1907 年（明治 40 年）に旧法が成立し、その後 1931 年（昭和 6 年）、1953 年（昭和 28 年）と改変されながらも、隔離や強制収容など権力によって患者の人権侵害行為を規定した日本の法律である。全患協の粘り強い反対運動の成果によって、この法律は、1996 年（平成 8 年）廃止となった。
- 2 1900 年に制定された精神病患者監護法に規定されているもので、精神障害者の治療や保護を目的とせず、座敷牢制度を一定の要件の下に合法化した基本的人権を侵害するものであった。
- 3 1959 年 7 月に有機水銀説が熊本大学や厚生省食品衛生調査会から出されたにも関わらず、「チッソの出す排水と水俣病との因果関係が証明されない限り工場に責任はない」とする考え方によって、被害の拡散を防ぐ有効な手立てをほとんど打てず、水俣病の発見から約 11 年が経過した。その結果、重大な問題と大量の被害者を生み出し、地域社会や環境、企業側にとっても重篤な損害を生むこととなった。一方、1992 年に規定された「マーストリヒト条約」（による欧州共同体を設立する条約の改正）では、「予防原則」に従い、「予防的取組方法を適用し、海洋環境に持ち込まれた廃棄物その他の物が害をもたら

すおそれがある場合には、投入及びその影響との因果関係を証明する決定的な証拠があるか否かを問わず、この考え方に従い、適当な防止措置をとる」と規定している。「環境政策における予防的方策・予防原則のあり方に関する研究会報告」より参照

- 4 1982 年 7 月、アメリカで血友病患者に AIDS 症例が報告され、血液による感染の疑いが出された。1983 年 3 月に米国立防疫センターは血液製剤の危険性を指摘し、同年 5 月には米食品医療薬品局が各製剤メーカーに血液製剤の加熱処理を指示した。ドイツ、カナダでは、加熱製剤が許可され、フランスはアメリカの危険な血液製剤の輸入を禁止した。しかし日本政府は、危険を回避する対策を取らず、アメリカから血漿や血液製剤を輸入し続けた。加熱製剤が許可されたのは 1985 年 7 月であるが、許可以降も回収されず販売が続けられた。この 2 年 4 ヶ月の間に全国で 5000 人いるといわれる血友病患者のうち、4 割にあたる約 2000 人が HIV に感染した。「HIV 感染者の人権 薬害としての HIV」ホームページより引用
- 5 厚生労働省 2013 「ひきこもり関連施策」
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/hikikomori01.pdf#search=%27%E3%81%B2%E3%81%8D%E3%81%93%E3%82%82%E3%82%8A%E9%96%A2%E9%80%A3%E6%96%BD%E7%AD%96%27>
- 6 玄田有史、高橋主光 2012 「孤立無業（SNEP）について—総務省『社会生活基本調査』匿名データによる分析—」
- 7 白川一郎は「若年雇用問題」が政策課題に初めてのぼったのは 1990 年代末だと述べている。1997 年から始まった若年失業率（15 歳～24 歳）の上昇が特に問題視され、長い不況で企業が新卒雇用の枠を縮小したことがその背景として指摘されていた。この問題はその後、2001 年 4 月に誕生した小泉純一郎内閣が掲げた「構造改革」の基本方針のなかで、「人間力戦略」の 1 つに位置づけ直された。そこでは「早い時期からの職業体験機会の充実等を通じ、若年者雇用対策に万全を期する」「職業体験機会を通じて、青少年等の職業理解を促進し、職業意識を醸成させる」という方向が示された。こうした方針は 2003 年 6 月の「若者自立・挑戦プラン」として結実する。そこでは「若年者の働く意欲を喚起しつつ、全てのやる気のある若年者の職業的自立を促進し、もって若年失業者等の増加傾向を転換させる」という目標が明示され、具体的な政策課題が示された。「青少年育成推進本部」でも同時期に同様の方向性を明示している。「若年雇用問題」が若者自身の「職業意欲の喚起」と「職業訓練」に重点を置く「教育・訓練型」制作のもとに位置づけられたことは、「雇用問題」から「就労問題」への転換と言えるだろう。企業側の方針に若者を適応させることを目的とした政策課題という印象が拭えない。荻野達史、川北稔他 2008 『「ひきこもり」への社会的アプローチ—メディア・当事者・支援活動—』第 2 章 62-63 頁 より引用
- 8 豊田謙二 2011 『一人ひとりの社会福祉』ナカニシヤ出版 97-134 頁
- 9 「サービスの受け手のニーズの充足に自己の最善を尽くそうとすることに関心をもたなければならない」「ソーシャルワーカーはクライアントに対して評価せず、個別化し、無条件の愛を注ぐ」としている。ゾフィア・T/ブトゥリム著川田褒音訳 1986 『ソーシャルワークとは何か』川島書店より参照

【参考文献】

- 1 阿部彩 2011『弱者の居場所がない社会－貧困・格差と社会的包摂』講談社現代新書
- 2 阿部真大 2011『居場所の社会学－生きづらさを超えて』日本経済新聞出版社
- 3 荒井裕司 2000『ひきこもり・不登校からの自立』マガジンハウス
- 4 荒川龍 2006『レンタルお姉さん』東洋経済新報社
- 5 池上正樹 2010『ドキュメントひきこもり－「長期化」と「高年齢化」の実態』宝島社新書
- 6 泉谷閑示 2006『「普通がいい」という病』講談社
- 7 五十田孟 2006『ひきこもり－当事者と家族の出口』寺子屋新書
- 8 五十田猛 2003『引きこもりと暮らす－対人関係づくりのフィールドワーク型記録』東京学参
- 9 磯部潮 2004『「ひきこもり」がなおるとき－23人の臨床例』講談社
- 10 磯部潮 2007『不登校・ひきこもりの心がわかる本イラスト版』講談社
- 11 井出草平 2007『ひきこもりの社会学』世界思想社
- 12 イマニュエル・ウォーラーステイン著 山下範久訳 2008『ヨーロッパの普遍主義』明石書店
- 13 岩田正美・大橋謙策・白澤政和 2012『現代社会と福祉』ミネルヴァ書房
- 14 上野千鶴子 2011『ケアの社会学』太田出版
- 15 上山和樹 2001『「ひきこもり」だった僕から』講談社
- 16 荻野達史・川北稔・工藤宏司（他）2008『「ひきこもり」への社会的アプローチ』ミネルヴァ書房
- 17 岡本民夫・平塚良子 2010『新しいソーシャルワークの展開』ミネルヴァ書房
- 18 長田百合子 2003『イジメ・不登校・ひきこもりと親はどう向き合うか：子ども問題を解決する「長田式10の知恵」』大和書房
- 19 勝山実 2011『安心ひきこもりライフ』太田出版
- 20 川上佳美 2007『わたしはレンタルお姉さん。』二見書房
- 21 北島英治 2008『ソーシャルワーク論』ミネルヴァ書房
- 22 北西憲二 2001『親子療法：引きこもりを救う』講談社
- 23 木村敏 1994『こころの病理を考える』岩波新書
- 24 木村敏 1972『人と人との間－精神病理学的日本論－』弘文堂
- 25 工藤定次 2004『脱！ひきこもり－YSC(NPO 法人青少年自立援助センター)の本』ポット出版
- 26 ケン・コーツ編著 丸山幹正訳 1984『核廃絶の力学』勁草書房
- 27 斎藤環監修 2004『hikikomori@NHK ひきこもり』日本放送出版協会
- 28 斎藤環 2002『「ひきこもり」救出マニュアル』PHP 研究所
- 29 斎藤環 2003『ひきこもり文化論』紀伊国屋書店
- 30 斎藤環 監修 2004『ひきこもり－hikikomori@NHK』日本放送出版協会
- 31 斎藤環 2007『ひきこもりはなぜ「治る」のか？－精神分析的アプローチ』中央法規出版
- 32 斎藤環 2010『ひきこもりから見た未来－SIGN OF THE TIMES 2005-2010』毎日新聞社
- 33 斎藤環 2012『ひきこもりのライフプラン－「親亡き後」をどうするか』岩波書店
- 34 塩倉裕 2000『引きこもり』ビレッジセンター出版局

- 35 清水克修 2012「日本の「ひきこもり」支援の動向と課題をさぐる―「ひきこもり」当事者のナラティブを参考に―」精神神経學雑誌 第 107 回 日本精神神経学会学術総会 シンポジウム
<https://www.jspn.or.jp/journal/symposium/pdf/jspn107/ss047-053.pdf>
- 36 鈴木國文 2012「日本のひきこもり, ヨーロッパのひきこもり―イタリアとフランスの現状に触れて―」精神神経學雑誌 第 107 回 日本精神神経学会学術総会 シンポジウム
<https://www.jspn.or.jp/journal/symposium/pdf/jspn107/ss040-046.pdf>
- 37 ゴフィア・T・ブトゥリム 1986『ソーシャルワークとは何か―その本質と機能』 川田誉音(訳) 川島書店
- 38 高岡健 2011『不登校・ひきこもりを生きる』 青灯社
- 39 高塚雄介 2002『ひきこもる心理とじこもる理由: 自立社会の落とし穴』 学陽書房
- 40 高橋良臣 2005『不登校・ひきこもりのカウンセリング 子どもの心に寄り添う』 金子書房
- 41 武田専 2005『人はなぜ自殺するのか―中高年の自殺と若者のひきこもり』 元就出版社
- 42 竹中哲夫 2010『ひきこもり支援論―人とつながり、社会につなぐ道筋をつくる』 明石書店
- 43 忠井俊明 2006『不登校・ひきこもりと居場所』 ミネルヴァ書房
- 44 立石宏昭 2010『地域精神医療におけるソーシャルワーク実践: IPS を参考にした訪問型個別就労支援』 ミネルヴァ書房
- 45 田中俊英 2008『「ひきこもり」から家族を考える―動き出すことに意味がある』 岩波書店
- 46 田辺裕 2000『私がひきこもった理由』 ブックマン社
- 47 照山絢子 2012「アメリカから見た日本の「ひきこもり」」精神神経學雑誌 第 107 回 日本精神神経学会学術総会 シンポジウム <https://www.jspn.or.jp/journal/symposium/pdf/jspn107/ss054-060.pdf>
- 48 富田富士也 2001『「ひきこもり」から、どうぬけですか』 講談社
- 49 富田富士也 2000『心のサインを見逃すな: わが子を「透明な存在」にしないために』 ハート出版
- 50 富田富士也 1994『よみがえった家族の絆 引きこもりからの旅立ち・パート 3』 ハート出版
- 51 富田富士也 2000『言ってはいけない親のひと言 新・引きこもりからの旅立ち 2』 ハート出版
- 52 富田富士也 2000『心のサインを見逃がすな 新・引きこもりからの旅立ち 3』 ハート出版
- 53 富田富士也 2000『子どもが変わる父のひと言 新・引きこもりからの旅立ち 4』 ハート出版
- 54 富田富士也 2001『傷つきやすい子に言ってよいこと悪いこと 新引きこもりからの旅立ち 5』 ハート出版
- 55 富田富士也 2001『子育てに立ち往生の親子へ 新引きこもりからの旅立ち 6』 ハート出版
- 56 富田富士也 2003『引きこもり一週間脱出法 あなたならどんな工夫をしてみますか』 学研
- 57 富田富士也 2001『「引きこもり」から、どうぬけですか』 講談社
- 58 豊田謙二 2011『一人ひとりの社会福祉』 ナカニシヤ出版
- 59 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室 2011『よりそい: 不登校・ひきこもりに対する民間支援団体の活動事例集』
- 60 中西正司・上野千鶴子 2003『当事者主権』 岩波新書
- 61 仲村優一・一番ヶ瀬康子・右田紀久恵 2007『エンサイクロペディア社会福祉学』 中央法規出版

- 62 日本平和学会編 1988『構造的暴力と平和』早稲田大学出版部
- 63 日本平和学会編集委員会編 1983『平和学：理論と課題』早稲田大学出版部
- 64 林尚実 2003『ひきこもりなんて、したくなかった』草思社
- 65 樋口康彦 2006『「準」ひきこ森 人はなぜ孤立してしまうのか?』講談社
- 66 広井良典 1997『ケアを問いなおすー＜深層の時間＞と高齢化社会』ちくま新書
- 67 福原宏幸 2007『社会的排除／包摂と社会政策』法律文化社
- 68 不登校情報センター編 2005『不登校・引きこもり・ニート支援団体ガイド最新版』子どもの未来社
- 69 マイケル・ジーレンジガー 2007『ひきこもりの国ーなぜ日本は「失われた世代」を生んだのか』光文社
- 70 マイケル・J・サンデル 2010『完全な人間を目指さなくてもよい理由』ナカニシヤ出版
- 71 町沢静夫 2003『ひきこもる若者たちー「ひきこもり」の実態と処方箋』大和書房
- 72 三鷹市・ICU 社会科学研究所編 1991『市民・自治体は平和のために何ができるか：ヨハン・ガルトゥング平和を語る』
- 73 向谷地生良 2006『安心して絶望できる人生』NHK 出版
- 74 向谷地生良 2009『統合失調症を持つ人への援助論』金剛出版
- 75 森口秀志・奈浦なほ他 2002『ひきこもり支援ガイド』晶文社
- 76 森下一 2003 不登校・引きこもりをなくすためにーいま私たちにできること』春秋社
- 77 諸星ノア 2003『ひきこもりセキララ』草思社
- 78 山本耕平 2009『ひきこもりつつ育つー若者の発達危機と解き放ちのソーシャルワーク』かもがわ出版
- 79 湯浅誠・茂木健一郎 2012『貧困についてとことん考えてみた』NHK 出版
- 80 湯浅誠 2011『活動家一丁あがり！ー社会にモノ言うはじめの一步』NHK 出版
- 81 湯浅誠 2008『反貧困ー「すべり台社会」からの脱出』岩波新書
- 82 吉川武彦 2001『「引きこもり」を考える 子育て論の視点から』日本放送出版協会
- 83 横山正樹 1994『フィリピン援助と自力更生論：構造的暴力の克服』明石書店
- 84 ヨハン・ガルトゥング著 矢澤修次郎・大重光太郎訳 2004『グローバル化と知的様式』東信堂
- 85 ヨハン・ガルトゥング著 木戸衛一・藤田明史・小林公司訳 2006『ガルトゥングの平和理論：グローバル化と平和創造』
- 86 ヨハン・ガルトゥング・藤田明史編著 2003『ガルトゥング平和学入門』
- 87 ヨハン・ガルトゥング著 高村忠成訳 1990『仏教：調和と平和を求めて』東洋哲学研究所
- 88 ヨハン・ガルトゥング著 高柳先男・塩屋保訳 1989『平和への新思考』勁草書房
- 89 ヨハン・ガルトゥング著 高柳先男・塩屋保・酒井由美子訳 1991『構造的暴力と平和』中央大学出版部

【参考資料】

- 1 青木朋江 2004 「新しいタイプの"学校"を訪ねて(12)ひきこもりや不登校を「二時間メンタルケア」で解決--親が本気で学習すれば、その子は必ず立ち直る」 学校経営 49(3), 51-59
- 2 青木秀光 2013「統合失調症の子を抱える,ある母親のライフストーリー: 両価的な思いのなかで揺らぐということ」立命館人間科学研究 27, 31-46
- 3 秋元樹 2009「ソーシャル・ワークの伝承: ソーシャル・ワークとは何か - 定義、対概念で遊ぶ」社会福祉 50, 11-25
- 4 浅田(梶原)彩子 2010「ひきこもり当事者の「居場所」支援に関する分析 - 家族・当事者・支援者の視点から-」人間文化研究科年報 25, 193-203
- 5 麻生武 2004「「子ども時代」を奪われた子どもたち (特集 忙し過ぎる子どもたち)」児童心理 58(8), 735-740
- 6 阿部茜・青木秀光・深谷弘和 2012「ひきこもる若者の語りに見る“普通”への囚われと葛藤: ひきこもる若者へのインタビュー調査から」立命館人間科学研究 25,67-80
- 7 天谷真奈美・宮地 文子・高橋 万紀子 (他) 2004「社会的ひきこもり青年を抱える家族の困難さと支援ニーズに関する研究」保健師ジャーナル 60(7), 660-666
- 8 有吉晶子 2011「多様なひきこもりを支援する-「居場所」と「出番」作りに伴走する」臨床心理学 11(3),367-373
- 9 池内伸明 2012「「ひきこもり」経験者の生活」教育福祉研究 18, 27-39
- 10 石川時子 2011「ソーシャルワークにおける自己決定原理の考察: 自律・自己決定の「価値」をめぐって」社会福祉 52, 111-122
- 11 石川良子 2005「「ニート」論の批判的検討:「ひきこもり」当事者の語りから」日本教育社会学会大会発表要旨集録 57,195-196
- 12 石川良子 2004「<ひきこもり>における「居場所」の二義性 (特集 臨床社会学の可能性)」アディクションと家族 20(4), 377-387
- 13 石川良子 2011「「ひきこもり」の分からなさに向き合うことから見えたもの」臨床心理学 11(3),330-335
- 14 石川良子 2006「「ひきこもり」と「ニート」の混同とその問題: 「ひきこもり」当事者へのインタビューからの示唆」教育社会学研究 79, 25-46
- 15 石田陽彦 2011「スクールカウンセリングからみた「ひきこもり」について」臨床心理学 11(3),360-366
- 16 伊藤 美奈子 2010「教師・カウンセラー・保護者の協働による不登校への対応 (特集 ひきこもり・不登校の今を考える)」教育と医学 58(11), 1043-1049
- 17 井出草平 2008「社会学的問題としての「ひきこもり」-「ひきこもり」の社会学定義と「ひきこもり」を社会学が取り扱う意義について」年報人間科学 29(2)
- 18 井出草平 2007「現代的逸脱論への試論--「ひきこもり」と「摂食障害」」年報人間科学 (28), 55-78
- 19 井手宏 2011「ひきこもり問題とその背景と対応について (特集 こころの健康とその政策的課題--こころの健康政策構想会議の提言を踏まえて)」保健の科学 53(9), 613-615
- 20 伊藤順一郎 2007「「ひきこもり」と精神医療-Community based Mental Health System づくりの展

- 望」精神神経学雑誌 109(2), 128-129
- 21 伊藤順一郎 2007 「「ひきこもり」に必要な支援は何か」精神神経学雑誌 109(2), 130-135
- 22 伊藤順一郎・吉田光爾・原敏明 2005 「「ひきこもり」から脱出させるための支援技術 1 相談面接と親グループ (特集 1 「ひきこもり」ケースには、こう対応する!--保健師ができる支援について考える)」保健師ジャーナル 61(12), 1152-1155
- 23 稲田尚子 2003 「高機能広汎性発達障害成人の主観的 QOL とその関連要因」平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 障害保健福祉総合研究推進事業報告書
- 24 今橋久美子 2003 「青年期発達障害者の主観的 Quality of Life 評価に関する研究」平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 障害保健福祉総合研究推進事業報告書
- 25 岩木秀夫 2004 「子どもを急がせているものは何か--社会システムの変動とユックリズム (特集 忙し過ぎる子どもたち)」児童心理 58(8), 741-746
- 26 岩間 伸之 2010 「ソーシャルワークの理論と実践(2)総合相談」総合リハビリテーション 38(10), 951-956
- 27 上山和樹 2007 「ひきこもり--根拠なき順応と、交渉弱者 (特集 アルチュセール・マラソン・セッション再生産は長く続く?) -- (『ニート』議論で語られないこと--なぜ、まだシンドイのか)」立命館言語文化研究 19(2), 83-90
- 28 浮田徹嗣 2009 「家庭内暴力を伴うひきこもり青年の親に対するロール・プレイングをもちいた面接と援助の意義について」心理劇 14(1), 75-86
- 29 臼井卓士・臼井みどり 2006 「提言 ひきこもりの家族支援--ステージに応じた介入のあり方」保健師ジャーナル 62(3), 222-228
- 30 梅林秀行 2011 「内的葛藤としてのひきこもり-現場の雑感」臨床心理学 11(3), 374-382
- 31 大石英史 2003 「援助関係においてクライアントの存在を無条件に受け入れるということ : 若者のひきこもり問題を踏まえて」研究論叢. 芸術・体育・教育・心理 52(3), 71-84
- 32 大塚公一郎・加藤敏 2012 「慢性統合失調症における生殖・世代主題」精神神経学雑誌 114(10), 1133-1148
- 33 大場信恵 2010 「臨床心理士の立場からみた不登校の今 (特集 ひきこもり・不登校の今を考える)」教育と医学 58(11), 1018-1031
- 34 岡部茜・青木秀光・深谷弘和・斎藤真緒 2012 「ひきこもる若者の語りに見る“普通”への囚われと葛藤-ひきこもる若者へのインタビュー調査から-」立命館人間科学研究 25, 67-80
- 35 岡本泰弘 2009 「「スクールソーシャルワーカー活用事業」今後の展開について (特集 スクールソーシャルワーカーを知る)」月刊生徒指導 39(6), 6-9
- 36 小川豊昭 2012 「ひきこもりの精神分析 : 幼少期のコンテイング不全から生じる誇大なナルシズムと受動的攻撃性 (特集 ひきこもりの多角的検討)」精神神経学雑誌 114(10), 1149-1157
- 37 奥野潔和 2006 「地域に生きる 地域で支える 社会的ひきこもりに対する就労支援 「(有)キャッツハンド」について」月刊福祉 89(5), 74-79
- 38 奥村賢一 2009 「スクールソーシャルワーカーの 1 日 (特集 スクールソーシャルワーカーを知る)」月刊生徒指導 39(6), 30-33
- 39 奥山雅久 2007 「全国引きこもり KHJ 親の会代表・奥山雅久氏に聞く 多様性を受け入れる懐の深い社

- 会を(特集 大人のひきこもり--長期化するケースにどう対処するか) 月刊地域保健 38(2), 53-63
- 40 加藤弘通 2006「ひきこもりの青年にとって働くということ--社会に向き合って生きようとする姿(特集 若者が働くということ--発達心理学的な視点から)」発達 27(108), 28-34
- 41 門田光司 1997「わが国に学校ソーシャルワーカーは必要か? : 教頭へのアンケート調査結果より」社会福祉学 38(2), 67-80
- 42 門田光司 1998「アメリカにおけるインクルージョンとスクールソーシャルワーカーの役割について」西南女学院大学紀要 2, 65-78
- 43 門田光司 1999「家庭相談員と学校ソーシャルワーカー : 半構造的面接調査からの分析」社会福祉学 39(2), 15-32
- 44 門田光司 2002「不登校児童生徒に対する学校ソーシャルワーク実践の役割機能について」社会福祉学 42(2), 67-78
- 45 門田光司 2004「不登校児の母親へのグループワーク実践」社会福祉学 45(2), 81-90
- 46 門田光司 2004「長期欠席児童・生徒の状況の把握と対応をどう進めるか(特集 虐待防止にどう取り組むか--児童虐待防止法の改正と学校の対応課題)」教職研修 33(4), 48-51
- 47 門田光司 2006「わが国における学校ソーシャルワーカーの役割機能に関する調査報告」社会福祉学 46(3), 122-133
- 48 門田光司 2007「各論 学校現場の混乱の背後にある家族問題と支援方法--学校ソーシャルワークの展開可能性(特集 浮遊する家族と福祉課題)」社会福祉研究 (98), 26-32
- 49 門田光司 2007「「個別の教育支援計画」と学校ソーシャルワーク実践について」学校ソーシャルワーク研究 2, 35-45
- 50 門田光司 2009「全国のスクールソーシャルワーカーの取り組み(特集 スクールソーシャルワーカーを知る)」月刊生徒指導 39(6), 18-21
- 51 門田光司 2011「小・中学校の特別支援教育コーディネーターにおける校内及び校外協働の現状とスクールソーシャルワーカーによる支援の必要性について--福岡県におけるアンケート調査結果より」学校ソーシャルワーク研究 6, 2-14
- 52 神仁 2007「ネットワークキングする仏教者たち(case02)「てらネット EN」全国不登校・ひきこもり対応寺院ネットワーク に学ぶ(上)お寺だからできることがある」大法輪 74(2), 126-131
- 53 神仁 2007「ネットワークキングする仏教者たち(case02)「てらネット EN」全国不登校・ひきこもり対応寺院ネットワークに学ぶ(下)こころのセイフティーネット」大法輪 74(3), 190-197
- 54 香山雪彦 2004「現代社会の象徴としての「摂食障害」とその地域差(1)摂食障害が教えてくれるもの(特集 引きこもり依存症--第14回日本嗜癪行動学会より)」アディクションと家族 21(1), 54-62
- 55 香山雪彦 2004「現代社会の象徴としての「摂食障害」とその地域差(2)地域の中での対応(自助活動を中心に)(特集 引きこもり依存症--第14回日本嗜癪行動学会より)」アディクションと家族 21(1), 54-62
- 56 川北稔 2009「若者の「生きづらさ」と障害構造論--ひきこもり経験者への支援から考える」愛知教育大学教育実践総合センター-紀要 (12), 293-300
- 57 川口和正 2005「"市民起業家"という生き方(12)家族的なつきあいでひきこもりの若者たちをサポート

- する--NPO 法人わたげの会・社会福祉法人わたげ福祉会 代表 秋田敦子さん」企業診断 52(1), 74-77
- 58 紀井早苗・能勢桂介 2007「高槻の在日学級と松本のニューカマー (特集 アルチュセール・マラソン・セッション 再生産は長く続く?) --(『ニート』議論で語られないこと--なぜ,まだシンドイのか)」立命館言語文化研究 19(2), 67-81
- 59 熊谷直樹・根上由紀 2007「面接相談で親をエンパワメント--都立中部総合精神保健福祉センターの取り組み (特集 大人のひきこもり--長期化するケースにどう対処するか)」月刊地域保健 38(2), 64-67
- 60 衣笠 一茂 2009「ソーシャルワークの「価値」の理論構造についての一考察: 「自己決定の原理」がもつ構造的問題に焦点をあてて」社会福祉学 49(4), 14-26
- 61 熊谷忠和 2011「当事者視点を基盤にしたソーシャルワーク援助に関する試論: ハンセン病当事者のライフストーリーからの学びを通して」川崎医療福祉学会誌 21(1), 11-28
- 62 玄田有史・高橋主光 2012「孤立無業(SNEP)について--総務省『社会生活基本調査』匿名データによる分析--」世代間問題研究機構 550
- 63 厚生労働省 2013「ひきこもり関連施策」
- 64 厚生労働省 2006「ひきこもりの若者を支援 我が国で初めての共同作業所--特定非営利活動法人エルシティオ (地域からの発想 豊かな地域づくり--和歌山県)」厚生労働 61(3), 33-35
- 65 古賀正義 2012「ひきこもりとその家族に関する社会学的研究: 『ひきこもる若者たちと家族の悩み』調査の結果から」教育学論集 54, 1-30
- 66 古賀正義 2010「「ひきこもり」青年の自立支援に関する実証的研究: 支援団体参加家族への聞き取り調査の結果から」日本教育学会大会研究発表要項 69, 348-349
- 67 小杉礼子・富永良喜・永井徹・村尾康弘 2007「座談会 今、なぜ青年期自立なのか。心理教育なのか。(青年期自立支援の心理教育)」現代のエスプリ 483, 10-37
- 68 小園弥生 2011「働くことがこわくなくなったんです--"ガールズ"就労支援カフェの現場から (特集 拡大する相談・支援事案の実相)」福祉労働 (131), 69-78
- 69 後藤雅博・香月富士日 2005「「社会的ひきこもり」への支援活動の現状と課題 (特集 こころの健康問題への挑戦)」公衆衛生 69(5), 378-383
- 70 小松源助 2000「ソーシャルワーク研究における価値と倫理に関する諸問題--ストレングズ視点からの考察 (特集 世紀を越えて--ソーシャルワーク研究の課題)」ソーシャルワーク研究 25(4), 242-248
- 71 近藤直司 2011「地域づくりのためのメンタルヘルス講座(3)「ひきこもり」はどれくらいいるのですか? 背景にあるメンタルヘルスの問題と支援上の注意事項を教えてください」公衆衛生 75(6), 483-485
- 72 近藤直司 2011「地域づくりのためのメンタルヘルス講座(3)「ひきこもり」はどれくらいいるのですか? 背景にあるメンタルヘルスの問題と支援上の注意事項を教えてください」公衆衛生 75(6), 483-485
- 73 近藤直司 2005「「ひきこもり」を理解しよう 1 青年期ひきこもりケースの精神医学的理解 (特集 1「ひきこもり」ケースには,こう対応する!--保健師ができる支援について考える)」保健師ジャーナル 61(12), 1140-1144
- 74 近藤直司・小林真理子・宮沢久江(他) 2009「発達障害と社会的ひきこもり」障害者問題研究 37(1), 21-29
- 75 近藤直司 2011「ひきこもり問題の捉え方をめぐって」臨床心理学 11(3), 356-359

- 76 近藤直司 2010「青年期ひきこもりケースの精神医学的背景と支援（特集 ひきこもり・不登校の今を考
える）」教育と医学 58(11), 1008-1016
- 77 近藤 直司・小林 真理子・宮沢 久江【他】2009「発達障害と社会的ひきこもり」障害者問題研究 37(1),
21-29
- 78 今野晃 2007「現代社会の再生産--ニート・引きこもり・移民問題とアルチュセール再生産論の〈可能
性〉（特集 アルチュセール・マラソン・セッション 再生産は長く続く?）--（『ニート』議論で語られな
いこと--なぜ、まだシンドイのか）」立命館言語文化研究 19(2), 103-115
- 79 斎藤学 「引きこもり依存症--システムズ・アプローチに基づく対応法（特集 引きこもり依存症--第 14
回日本嗜癡行動学会より）」アディクションと家族 21(1), 33-53, 2004
- 80 斎藤環 2007「堀江貴文は"社交的ひきこもり"--一方的な多弁、交渉下手に見る「負け組」の要素」Voice
351, 122-127
- 81 斎藤環 2008「ひきこもり青年たちはなぜ、仮想現実には逃げ込まないのか?（ネットジェネレーション--
バーチャル空間で起こるリアルな問題）--（リアル版社会とバーチャル版ムラ社会）」現代のエスプリ
492,140-148
- 82 斎藤環 2004「ひきこもりと家族（特集 引きこもり依存症--第 14 回日本嗜癡行動学会より）」アデ
ィクションと家族 21(1),27-32
- 83 斎藤環 2004「韓国の「隠遁型ひとりぼっち」と日本の「ひきこもり」--ソウル・シンポジウム参加報
告」中央公論 119(4),184-191
- 84 斎藤環・北村肇 2011「ひきこもりを生んだ"主犯格"は? 斎藤環のリアルな団塊診断」金曜日 19(6),
26-28
- 85 斎藤雅美 1999「ソーシャルワークの独自性についての一考察：人とその環境への視点」龍谷大学大学
院研究紀要社会学・社会福祉学 6,5-36
- 86 酒木保 「臨床心理学の方法（試論）ー結城心理学を振り返りながらー」臨床心理研究 京都文教大学心
理臨床センター紀要 3,9-16
- 87 佐久間京子・田畑紀美江「ひきこもり支援の実践例 1 東京都多摩小平保健所におけるひきこもり問題
への取り組み（特集 1 「ひきこもり」ケースには、こう対応する!--保健師ができる支援について考える）」
保健師ジャーナル 61(12),1164-1169
- 88 Jane Boylan & Jane Dalrymple 2013「反抑圧実践の手段としてのアドボカシー」社会関係研究 18(2),
33-59
- 89 島田佳枝 2006「＜こと＞性の回復へ：「コミュニケーション不全」という存在状況からの出発Ⅳ」美
術科教育学会誌 27,187-204
- 90 下地明友 2012「精神医療における「リカバリー」を再考する（特集 個々のリカバリーに向けた支援を
考える）」精神科看護 39(10),10-19
- 91 杉江彰 2010「精神障害者と「生活のしづらさ」ーひきこもり・貧困、そして自立ー」教育 60(12), 68-74
- 92 鈴木晶子 2005「引きこもり地域支援の現状と課題」東京大学大学院教育学研究科紀要 44, 227-239
- 93 鈴木啓嗣 2004「子どものための小さな援助論(9)不登校やひきこもりへの援助(1)社会参加をめぐって」

こころの科学 116,132-138

- 94 鈴木啓嗣 2004「子どものための小さな援助論(10)不登校やひきこもりへの援助(2)何に対して援助するのか」こころの科学 117,127-133
- 95 鈴木庸裕 2009「教師が求めるスクールソーシャルワーカー---家庭・学校・地域をつなぎ、子どもの生活を支援するパートナー (特集 スクールソーシャルワーカーを知る)」月刊生徒指導 39(6), 22-25
- 96 関水徹平 2011「「ひきこもり」問題と「当事者」:「当事者」論の再検討から」年報社会学論集 (24),109-120
- 97 関水徹平 2011「ひきこもり経験と「時間の動かなさ」--「語りの難破」に着目して (特集 時間と経験の社会学)」社会学年誌 52,67-84
- 98 芹沢俊介 2004「忙し過ぎる子どもとは (特集 忙し過ぎる子どもたち)」児童心理 58(8), 721-729
- 99 芹沢俊介 2011「「ひきこもり」をどう理解すべきか」臨床心理学 11(3),324-329
- 100 副田あけみ 2010「ソーシャルワークの理論と実践(3)チームワーク」総合リハビリテーション 38(11),1051-1055
- 101 高岡健 2011「ひきこもりという概念がどうして必要とされたのか」臨床心理学 11(3),336-340
- 102 田垣正晋 2004「中途重度肢体障害者は障害をどのように意味づけるか: 脊髄損傷者のライフストーリーより」社会心理学研究 19(3),159-174
- 103 高塚雄介 2011「不登校とひきこもり--現象としての共通性と意識傾向の違い (不登校の現在)」児童心理 65(9),28-38
- 104 高橋良臣 2010「不登校サポートボランティアの現状とこれから (特集 ひきこもり・不登校の今を考える)」教育と医学 58(11), 1058-1064
- 105 高橋良臣 2004 ひきこもり・不登校 (特集 忙し過ぎる子どもたち)-- (過剰な忙しさがもたらす心身の問題) 児童心理 58(8), 784-787
- 106 滝口克典 2007「「居場所」に関わる人びとによる「不登校・ひきこもり支援」の社会的構築: 支援者のアイデンティティ・ワークに着目して」日本教育社会学会大会発表要旨集録 (59), 5-6
- 107 竹村洋介 2006「格差社会と「下流」の現実--ひきこもりや不登校から見えること (今月の特集 格差社会と高校教育)」月刊高校教育 39(8),26-31
- 108 竹森元彦・川井富枝・鷺見典彦 2012「「ひきこもり」の現状と支援の実践からみた地域支援のあり方について」香川大学教育学部研究報告,第1部 137,97-110
- 109 立石一信 2004「不登校の現状と考察 (特集 青少年の育ち--その現状と課題)」月刊福祉 87(5),19-21
- 110 田中俊英 2004「暴力のない「群れ」は可能か--若者の集団行動について (特集 青少年の育ち--その現状と課題)」月刊福祉 87(5), 28-30
- 111 田中俊英 2011「社会参加の可視化--ひきこもりへのスモールステップ支援の意味 (特集 拡大する相談・支援事案の実相)」福祉労働 131,96-103
- 112 千葉千恵美 2006「ひきこもりケースについてシステム論的考察: システム論的家族支援におけるケース検討から」高崎健康福祉大学紀要 5,13-24
- 113 津田均 2012「公共の縁における実存: ひきこもりへの理解と対策のための試論 (特集 ひきこもりの多角的検討)」精神神経学雑誌 114(10),1158-1166

- 114 津富宏 2006「ニート支援に関する「?」 (特集 2 ひきこもり・不登校と社会へ踏み出す仕事体験)」
中小商工業研究 (86),85-89
- 115 鶴真一 1997「レヴィナスの他者論」発達人間学論叢 1, 99-105
- 116 照山絢子,堀口佐知子 2012「発達障害者とひきこもり当事者コミュニティの比較：文化人類学的視点から (特集 ひきこもりの多角的検討)」精神神経学雑誌 114(10),1167-1172
- 117 富田富士也 2005「「ひきこもり」から脱出させるための支援技術 3 社会資源の種類とコーディネートのコツ (特集1 「ひきこもり」ケースには,こう対応する!--保健師ができる支援について考える)」保健師ジャーナル 61(12),1160-1163
- 118 富田 富士也 2005「「ひきこもり」を理解しよう 2 「引きこもり」が生じる社会の背景とは (特集1 「ひきこもり」ケースには,こう対応する!--保健師ができる支援について考える)」保健師ジャーナル 61(12),1146-1151
- 119 内閣府 2010「個々の状態に合わせた支援を：内閣府が不登校、ひきこもりで特別企画」内外教育 6047, 14-15
- 120 中垣内正和 2007「人のひきこもりの現状と問題点 (特集 大人のひきこもり--長期化するケースにどう対処するか)」月刊地域保健 38(2),44-52
- 121 中垣内正和 2004「ひきこもりを生む社会 (特集 引きこもり依存症--第 14 回日本嗜癪行動学会より)」アディクションと家族 21(1),17-26
- 122 永富奈津恵 2007「青年期自立へ向けた民間施設の活動--ひきこもり支援の現状と問題点 (青年期自立支援の心理教育)-- (青年期自立支援の課題と実際)」現代のエスプリ 483,67-76
- 123 中光雅紀 2004「ひきこもりの心理と克服の視座 (特集 青少年の育ち--その現状と課題)」月刊福祉 87(5), 25-27
- 124 中藤信哉 2011「青年期における居場所についての研究」京都大学大学院教育学研究科紀要 57,153-165
- 125 中藤信哉 2012「「居場所のなさ」についての研究」京都大学大学院教育学研究科紀要 58,209-220
- 126 中村佐織 2010「ソーシャルワークの理論と実践(新連載・1)ソーシャルワークとは何か」総合リハビリテーション 38(9),849-854
- 127 西村賢二 2010「ひきこもり経験者のライフストーリー」人間科学研究 23(1), 29-29
- 128 西元祥雄 2012「ひきこもり支援におけるケアマネジメント・プログラム導入の検討-ひきこもり地域支援センターの実態調査を踏まえて」社会福祉学 52(4),80-91
- 129 野田正人 2009「スクールソーシャルワーカーって何者? (特集 スクールソーシャルワーカーを知る)」月刊生徒指導 39(6), 10-13
- 130 野村豊子・池田 和彦 1988「ソーシャルワーク実践過程における知識と価値観の区別についての一試論--精神科ハーフウェイハウスの事例を基に (ソーシャルワーカーの実践と倫理<特集>)」ソーシャルワーク研究 14(2),99-105
- 131 橋口昌治 2007「『ニート』議論で語られないこと--なぜ,まだ,シンドイのか (特集 アルチュセール・マラソン・セッション 再生産は長く続く?) -- (『ニート』議論で語られないこと--なぜ,まだシンドイ

- のか) 立命館言語文化研究 19(2), 61-65
- 132 長谷川俊雄 2005 「社会的ひきこもり」問題の所在と構造—家族相談事例の分析とヒアリング調査を
ととして— 社会福祉研究 7, 47-62
- 133 長谷川俊雄 2007 「自立」を迫る社会と若者の生きづらさ—政策的「自立」の社会的克服（青年期自
立支援の心理教育）—（青年期自立支援の課題と実際）現代のエスプリ 483, 56-66
- 134 長谷川寿一 2009 「対人不安の進化心理学—ひきこもりと殺人率（対人恐怖）」こころの科学 147, 84-89
- 135 八田隆司 2008 「共感の構造」明治大学教養論集 433, 153-175
- 136 花嶋裕久 2013 「ひきこもりの若者が就労して居場所を離れるプロセス」心理臨床学研究
31(4), 529-540
- 137 林真帆 2011 「ソーシャルワークにおける「主体性」に関する一考察—主体性概念に着目して—」別府
大学紀要 (52), 55-65
- 138 板東充彦 2007 「ひきこもり者の心理状態に関する一研究：文献における「当事者の語り」の分析よ
り」九州大学心理学研究 8, 185-193
- 139 日置真世 2009 「困難を抱える子ども・若者とその家族への地域生活支援の意義と今後への提言：支
援実践を通しての分析と検討」子ども発達臨床研究 3, 45-53
- 140 樋口律子 2012 「三条市の子ども・若者総合サポートシステム：新潟県三条市（特集 わがまちの子育
て支援事業）」月刊地域保健 43(3), 26-32
- 141 平野 均 2009 「時間生物学からみた「不登校・ひきこもり」問題（特集 メンタルヘルス(1)一般教職
員のための基礎知識）」大学と学生 (68), 46-56
- 142 Billstedt, E., Gillberg, I.C. & Gillberg, C 2011 「（仮訳）児童期に自閉症と診断された成人のQOLの状
況—人口を基にした研究—」autism, 15(1), 7-20
- 143 廣瀬真理子 2009 「「ひきこもり」問題における親—「親が変わる」という主体的選択に向けて—」人文
研究 59(3), 63-86
- 144 深谷昌志 2004 「現代の子どもは忙しいのか—調査データから（特集 忙し過ぎる子どもたち）」児童
心理 58(8), 730-734
- 145 福知栄子・梅野潤子 2008 「子どもの育ちへのNPOの貢献 — 地域子育て支援の事例から —」中
国学園紀要 7, 83-94
- 146 福山和女 2010 「ソーシャルワークの理論と実践(4)医療・保健・福祉領域での協働のあり方—医学的
リハビリテーションにソーシャルワークの視点を援用して—」総合リハビリテ-ション 38(12),
1155-1161
- 147 二神能基・雨宮処凛 2011 「対談 「国家破綻」こそチャンスだ!—「仲間、働き、役立ち」の新しい絆
へ（特集 家族崩壊という現実—子どもの虐待、ひきこもり、失踪老人）」世界 (813), 140-148
- 148 古橋忠晃 2012 「ひきこもりの国際比較—欧米と日本—」精神神経学雑誌 第 107 回 日本精神神経学
会学術総会 シンポジウム <https://www.jspn.or.jp/journal/symposium/pdf/jspn107/ss032-033.pdf>
- 149 古橋忠晃 2012 「フランスの「ひきこもり」と医療制度について」精神神経学雑誌 第 107 回 日本精
神神経学会学術総会 シンポジウム

<https://www.jspn.or.jp/journal/symposium/pdf/jspn107/ss034-039.pdf>

- 150 Butrym Zofia・川田誉音（訳）1994「ソーシャルワークとは何か」ソーシャルワーク研究 20(3), p180-194
- 151 松井美穂・笠井孝久 2012「不登校を経験した青年の育ちを抑制するもの：不登校経験の意味づけと影響」千葉大学教育学部研究紀要 60, 55-62
- 152 松田幸恵 2001「ソーシャルワークの価値観とアドボカシー：相互関連性とアドボカシーの方法をめぐって」龍谷大学大学院研究紀要. 社会学・社会福祉学 8, 91-112
- 153 三橋弘次 2001「どこか「心の問題」化される若者労働：「フリーター」,「ひきこもり」,「ニート」に焦点を当てて」立正大学文学部論叢 (133), 25-45
- 154 宮崎隆志 2008「家族の危機と協同的支援ネットワークの課題」子ども発達臨床研究 2,21-34
- 155 村上満・清水剛志 2009「富山県におけるスクールソーシャルワーク活動の現状とこれから（特集 スクールソーシャルワーカーを知る）」月刊生徒指導 39(6), 26-29
- 156 目良宣子 2005「ひきこもり支援の実践例 2 和歌山県田辺市におけるひきこもり支援の実例（特集 1 「ひきこもり」ケースには,こう対応する!-保健師ができる支援について考える）」保健師ジャーナル 61(12), 1170-1175
- 157 森崎志麻 2012「関係の病としての「ひきこもり」：ひきこもり当事者本の分析を通して」京都大学大学院教育学研究科紀要 (58), 275-287
- 158 森田桂・宮本ふみ 2005「「ひきこもり」から脱出させるための支援技術 2 保健師の戦術「家庭訪問」をいかそう（特集 1 「ひきこもり」ケースには,こう対応する!-保健師ができる支援について考える）」保健師ジャーナル 61(12), 1156-1159, 2005
- 159 矢花芙美子 2004「子どものバーンアウト-進学塾の子どもたち（特集 忙し過ぎる子どもたち）-（過剰な忙しさがもたらす心身の問題）」児童心理 58(8), 766-770
- 160 山下英三郎 2009「スクールソーシャルワークとは（特集 スクールソーシャルワーカーを知る）」月刊生徒指導 39(6), 14-17
- 161 山崎道子 2000「ソーシャルワークを定義すること-時代と環境の変化の中で（特集 世紀を越えて-ソーシャルワーク研究の課題）」ソーシャルワーク研究 25(4), 262-270
- 162 山田潤 2007「「仕事(職務)」をめぐるとの 30 年-個人的な回想をまじえて（特集 アルチュセール・マラソン・セッション 再生産は長く続く?）-（『ニート』議論で語られないこと-なぜ,まだシンドイのか）」立命館言語文化研究 19(2), 91-101
- 163 山田武司 2005「社会的ひきこもりへのソーシャルワーク援助-グループへの援助を通じたひきこもりメンバーの変化と援助の考察」ソーシャルワーク研究 30(4), 269-274
- 164 山田武司 2006「社会的ひきこもりにおけるソーシャルワークの視点」岐阜経済大学論集 40(1), 1-44
- 165 山田武司・小木曾 隆臣 2011「35 歳前後から 40 歳前後のひきこもりの人における居場所の意味-居場所を設置する団体における社会福祉活動の役割」岐阜経済大学論集 44(3), 23-44
- 166 山田均 2011「特集にあたって（特集 ひきこもり支援論）」臨床心理学 11(3), 319-323

- 167 やまだようこ 2000「人生を物語ることの意味：なぜライフストーリー研究か？」教育心理学年報 39,146-161
- 168 山本耕平 2005「社会的ひきこもりの背景と類型化について」大阪体育大学健康福祉学部研究紀要 2, 23-37
- 169 山本耕平 2009「若者のひきこもりを精神保健福祉課題としてどう同定するか」立命館産業社会論集 45(1), 15-33
- 170 山本耕平・Insoo Lee・安藤 佳珠子 2012「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって：若者問題に関する韓日間比較調査から：第1報」立命館産業社会論集 46(4), 21-42
- 171 山本耕平 2012「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって：若者問題に関する韓日間比較調査から(第2報)Yooja Salon の実践を通して」立命館産業社会論集 48(2), 1-20
- 172 山本耕平 2012「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって：若者問題に関する韓日間比較調査から(第2報)Yooja Salon の実践を通して」立命館産業社会論集 48(2), 1-20
- 173 結城錦一 1986「<私>にとって<身>とは何か・1」中京大学文学部紀要 21(2の3), p286-264
- 174 湯川順子 2012「社会的孤立への視点：高齢者を中心に」龍谷大学大学院研究紀要. 社会学・社会福祉学 19, 57-71
- 175 吉川悟 2011「ひきこもりへの治療的対応-家族療法の立場から留意していること」臨床心理学 11(3),347-355
- 176 米本秀仁 2000「ソーシャルワーク・アイデンティティの形成と社会福祉系大学の責任(特集 世紀を越えて--ソーシャルワーク研究の課題)」ソーシャルワーク研究 25(4), 341-346
- 177 和田修 2012「大学と地域の連携でおこなう、ひきこもり・不登校学生への就労支援」教養研究 18(3), 61-75
- 178 渡部麻美・松井豊・高塚雄介「ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討」心理学研究 81(5), 478-484
- 179 渡辺かよ子 2008「社会的包摂に向けたメンタリング運動：米国の特別な支援を必要とする青少年のためのプログラムを中心に」愛知淑徳大学論集文学部・文学研究科篇 33, 19-30
- 180 和辻健太・三浦恭子・青木省三 2011 ひきこもり一歩足を踏み出すのを援助する 臨床心理学 11(3),341-346